平成２８年度

研究紀要

碧海

第２７集

平成２９年３月

鹿児島県立大島養護学校

はじめに

特別支援学校で教育を行う者にとって,「何をどう学ばせるか」ということは，この教育に関わり始めたときからの大きなテーマではないでしょうか。年代別にそれぞれの差こそあれ，その時代の障害に対する考え方・捉え方，障害のある人の実情，周りでサポートする環境等，それらを総合的に考慮し，自分なりに担当する子供の将来の姿を予想して教育を考えていくところから始まるところは，この教育に携わる教師に共通するものだと思います。

養護学校（特別支援学校）の創生期から，体験的な学習を教育の中核に据えるという考え方を継続しながら，各種発達検査法の普及や，その分析を活用した実態把握，子供が生き生きと活動し個々の能力を伸ばす授業の在り方，子供一人一人のパーソナリティの理解や保護者，医療機関等の関係機関との連携の在り方，将来の職業生活を意識したキャリア教育の充実等々，子供が現在も将来もより良く生きていくために，携わった教師たちが様々な思いと労力をこの教育に注いできたのは周知の事実です。

本校におきましても，20 年ほど前から奄美大島で取り組まれた就学前療育の基礎の下に，学校教育の充実を図りながら，教育研究，各研修の積み重ねによる教育の質の一定の向上，子供の希望を叶える進路指導の充実等を目指して実践してきました。ここ数年は，子供が具体的な将来への目標をもち，また豊かな時間を過ごすための取組として，各種スポーツ大会への参加，各種技能検定（校内）の実施，休日のＰＴＡ活動の充実など離島のハンディを抱えながらも本校らしい取組を実践しているところです。

さて，特別支援教育において「自立と社会参加」が重要なキーワードになって久しいですが，本校におきましても，子供の実態に応じた自立の在り方，家族や施設，地域社会の人々等と関わりのある豊かな余暇の過ごし方等は大きな課題でＰＴＡと連携しながら継続して模索しているところです。本研究は，卒業後までを見据えた指導・支援の在り方に改善の必要があるとの反省の下，教師の個々の取組が単年度で終わるのではなく，子供にとって一貫した継続性のある指導を目指したものです。取組の 1 年目は，アセスメントを活用した共通した授業づくりのプロセス，2 年目は，チェックリストや単元一覧表，指導内容の整理・精選等，アセスメントの内容・方法の整理，そして 3 年目の今年度は，過去 2 年間の研究を基にした授業実践等でその検証を行い，改善を重ねるという取組を行いました。御一読いただき，御意見，御指摘をいただけたらありがたく存じます。

昭和 53 年の本校後援会発足に当たっての趣意書に,「特殊教育を行うことは，心身障害児の成長発達を促すばかりでなく，地域社会の道徳性を高め，福祉社会を作る素地になる。」と謳われています。この意志を継承し「本地区の共生社会の実現」に向けて取組を継続したいと思いますので，今後ともよろしく御指導いただきますようお願いいたします。

最後に，10 月に実施しました「かごしま学力向上プログラム」に係る授業公開におきましては，県教育庁義務教育課特別支援教育室及び県総合教育センター特別支援教育研修課から懇切丁寧な御指導，御助言を賜りました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

平成２９年３月

校長　中村周一郎

総　目　次

はじめに

Ⅰ　研究の概要
1　研究テーマ ―― 1
2　研究テーマ設定の理由 ―― 1
3　研究テーマの意味（捉え方） ―― 4

Ⅱ　１年目の研究
1　研究の方法と組織 ―― 6
2　研究の経過 ―― 7
3　研究の実際 ―― 8
4　研究の成果と課題 ―― 10

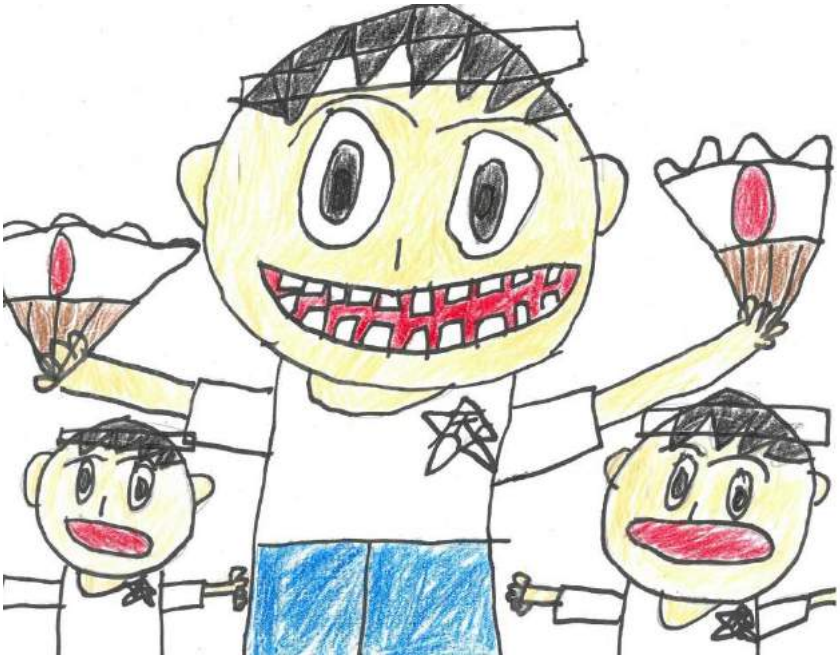
Ⅲ　２年目の研究
1　研究の方法と組織 ―― 11
2　研究の経過 ―― 12
3　研究の実際 ―― 12
4　研究の成果と課題 ―― 15

Ⅳ　３年目の研究
1　研究の目標 ―― 18
2　研究の仮説 ―― 18
3　研究の方法 ―― 19
4　研究の組織 ―― 20
5　研究の計画 ―― 20
6　研究の実際
　小学部 ―― 21
　中学部 ―― 36
　高等部 ―― 50

Ⅴ　研究のまとめ
1　３年間の研究のまとめ ―― 63
2　今後に向けて ―― 65

おわりに
研究同人

Ⅰ　研究の概要



「運動会」

Ⅰ　研究の概要

１　研究テーマ

一人一人の自立と社会参加をめざす一貫性・継続性のある指導

～アセスメントを利用した指導を中心に（１年次）～
～プロジェクトチームの実践を通して（２年次）～
～生活単元学習と作業学習の授業実践を通して（３年次）～

２　研究テーマ設定の理由

⑴　研究テーマ設定の視点

研究テーマは，以下に示す事項を鑑みて設定した。その視点を図に示す。（**図１**）

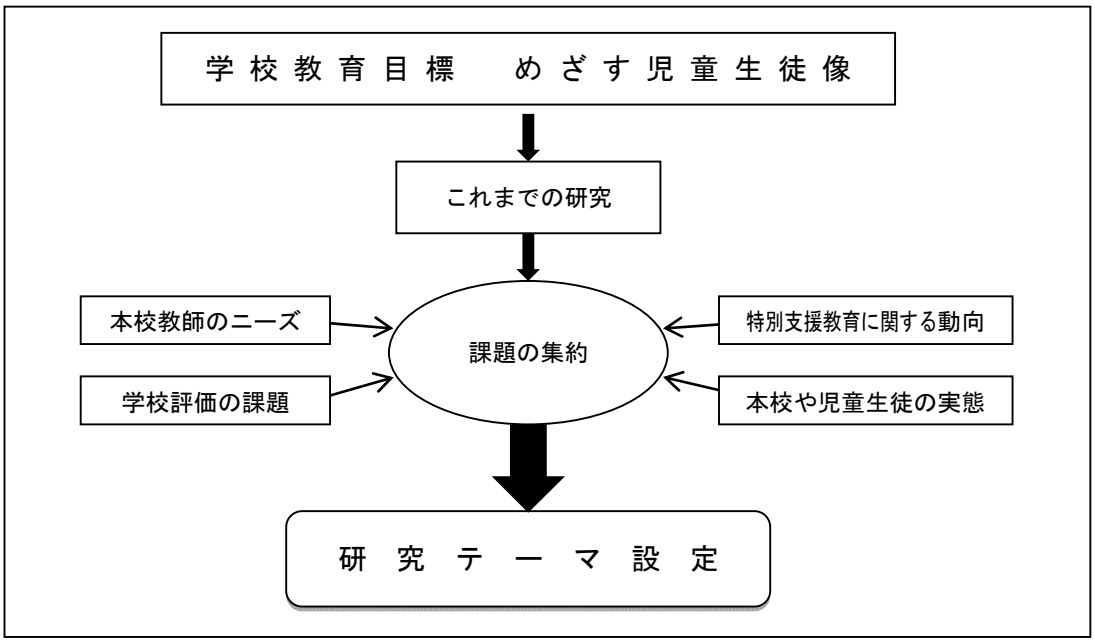


図１　研究テーマの視点

⑵　本校の学校教育目標，めざす児童生徒像から

本校では，校訓として「明るく，強く，豊かに」を掲げており，校訓を踏まえた学校目標が示されている。学校教育目標は「児童生徒一人一人の発達段階や特性等に応じた教育を行い，生きる力を身に付け，自立と社会参加に向けて，『明るく，強く，豊かに』生きる人間を育成する。」としており，めざす児童生徒像として「明るく，元気で，礼儀正しい児童生徒」，「健康に関心をもち，将来の自立をめざす児童生徒」，「周りの人と仲良くし，積極的に社会に参加する心豊かな児童生徒」が具体的に掲げられている。

⑶　特別支援教育に関する動向から

平成１９年文部科学省初等中等教育局通知「特別支援教育の推進について」において，「特別支援教育は，障害のある幼児児童生徒の自立と社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち，幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し，その持てる力を高め，生活や学習上の困難を改善又は克服するため，適切な指導及び必要な支援を行うものである。」と，特別支援教育の理念が示された。

また，中央教育審議会初等中等教育分科会の「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」（平成 24 年 7 月 23 日）の中で，インクルーシブ教育システムの構築を目指し，「（中略）個別の教育的ニーズのある幼児児童生徒に対して，自立と社会参加を見据えて，その時点で教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できる多様で柔軟な仕組みを整備することが重要である。」と，述べている。

また，特別支援学校学習指導要領には，第１節教育目標の中で「児童及び生徒の障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服し自立を図るために必要な知識，技能，態度及び習慣を養う」とある。さらに，特別支援学校学習指導要領解説において，「教材・教具や補助用具を含めた学習環境の効果的な設定をはじめとして，児童生徒へのかかわり方の一貫性や継続性の確保，（中略）大切である。」とある。

これらのことから，私たち特別支援学校に在籍する教師は特別支援教育の理念に基づき，児童生徒一人一人の自立と社会参加を見据えた特別支援教育の推進を図っていかなければならない。そして，教師の関わり方の一貫性や継続性を備えた指導の在り方など常に追求しなければならない。

⑷　これまでの研究から

本校では，これまでに「個別の指導計画」，「個別の教育支援計画」，「チェックリスト」及び「あゆみ（通知表）」の様式とその作成システムについて〝テーマ研究〟で研究を進め，年度ごとによりよい方向に改善がなされ，大島養護学校の財産として現在に至っている。

近年では，毎時間の授業を重視して，題材等に関する実態把握，目標設定の在り方，それを達成するための教師の手立てや状況設定，評価の在り方など「授業づくり」における専門性を高める実践研究に取り組んできた。（**表１**）

また，平成 24・25 年度は「語り合う」というキーワードを共有し，ワークショップ型の授業検討会を用いた PDCA サイクルのシステムの確立を目指し，相互研修に取り組んできた。その結果，授業研究での焦点化した話し合い及び全員が意見を出し合えるシステム作りや日常の学習指導に生かされる授業研究の在り方が成果として得られた。一方，個別の指導計画と授業との関連が明確になっていない，チェックリストの活用頻度の低さなどが課題として挙げられた。

表１　本校におけるテーマ研究の過程（抜粋）

年度	研究テーマ	研究紀要等
平成 15～16 年度	**個別の指導計画を活用するために**　～様式の改善とシステム作り～	「碧海」第 23 集 別冊資料集
平成 17～18 年度	**一人一人のニーズに応じた個別の教育支援計画はどうあればよいか** ～個別の指導計画を生かした取り組みの検討～	「碧海」第 24 集
平成 19～20 年度	**児童生徒一人一人がかがやく授業の実践をめざして** ～日々の子どもとのかかわりや実践を通して～	「碧海」第 25 集
平成 21～22 年度	**生活に生かす力をつける授業づくり**　～授業力向上を目指して～	「碧海」第 26 集
平成 23 年度	**明日に生かせる指導法** ～「やってみる？」「やってみよう！」「やってよかった♪」～	
平成 24 年度	**みんなで語り合う授業づくりと授業研究** ～思いを授業改善につなげよう～	
平成 25 年度	**児童生徒の生きる力を育む授業づくり** ～みんなで語り合う PDCA サイクルを通して～	

⑸　本校の児童生徒の実態から

本校は大島地区唯一の特別支援学校であり，奄美群島内の個別の教育的ニーズのある児童生徒の指導・支援を担っている。その児童生徒の中には，知的障害や肢体不自由を有する者だけではなく，視覚障害，聴覚障害，病弱を併せ有する者や日常生活において医療的ケアを必要とする者も在籍しているなど，実態は様々である。そこで，一人一人の実態をより的確に捉え，効果的な指導・支援を進めていくためには，児童生徒の指導・支援に関わる複数の教師で実態を分析（解釈）し，手立てや関わり方などを共有して，一貫した指導を行っていくことが必要である。

また，本校は，大島本島以外の離島などから近隣の施設に入所し，登校する児童生徒もいる。そうした児童生徒の中には，卒業後，出身の島や地域に戻り，それぞれに自立した生活を送ろうとするものも少なくない。そこで，関係する学校等から児童生徒に関する情報の収集を行い，学校における指導・支援に生かすとともに，卒業後も継続した指導・支援ができるように工夫していく必要がある。

⑹　本校教師のニーズから

平成 26 年５月に実施した教師アンケートでは，「行われている指導・支援が将来的に（小・中・高等部，社会に出てから），どのようにつながっていくのかを把握・理解した上で授業を計画し，実施していきたい」といった指導の継続性に係る意見が多く挙げられた。また，「他の先生方と相談や話をしながら日々の授業を行いたい」，「アセスメントがしっかりされていると課題がもっと明確になるのではないか」，「児童生徒の発達段階や障害の特性をしっかりと把握した上での指導が重要」といった実態把握→課題分析→指導→評価の一連の流れを，複数の教師によるチームとして取り組む授業づくりが重要であるという多くの意見が出された。

以上のことから課題を集約すると，これまでの研究の成果（財産）を活用しながら，教師として特別支援教育に関する専門性を高め，児童生徒の自立と社会参加を見据えた，一貫性・継続性のある指導を実践することが大切である。このことが，学校教育目標にある「児童生徒一人一人の発達段階や特性等に応じた教育を行い」の具体的実践であり，「自立と社会参加に向けて，『明るく，強く，豊かに』生きる人間を育成する」ことの実現につながるものと考えられ，本研究テーマを設定した。

３　研究テーマの意味（捉え方）

⑴　一人一人の自立と社会参加とは

中央教育審議会初等中等教育分科会の「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」（平成 24 年 7 月 23 日）の中で，共生社会について「これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が，積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは，誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い，人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である。このような社会を目指すことは，我が国において最も積極的に取り組むべき重要な課題である」と述べられ，そのために「障害者の権利に関する条約に基づくインクルーシブ教育システムの理念が重要であり，その構築のため，特別支援教育を着実に進めていく必要があると考える」としている。さらに，インクルーシブ教育システムにおいて「個別の教育的ニーズのある幼児児童生徒に対して，自立と社会参加を見据えて，その時点で教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供」できる学び場の一つとして特別支援学校が挙げられている。

そこで本校では「一人一人の自立と社会参加」を以下のように確認したい。

一人一人の自立と社会参加とは，個別の教育的ニーズを基に身に付けてきた生きる力を生かしながら，地域社会における体験的な学習や主体的に行動・判断することを通して，必要な支援を受けながら積極的に働いたり，楽しい生活を送ったりすることである。

このことは，「一人一人の自立と社会参加」≠「就労」という意味も含んでいる。

以下に各学部における「一人一人の自立と社会参加」につながる具体的な目標と「めざす子供像」の広がりを示す。（**表２**）（**図２**）

表２　各学部における自立と社会参加につながる目標（各学部の教育目標から）

小学部	・　身辺の自立的な生活を送ることができる。 ・　周囲の人と豊かな関係を築くことができる。 ・　自分の気持ちや要求を伝えることができる。 ・　集団生活に必要なルールや役割を理解することができる。 ・　一日の生活や学校行事に見通しをもつことができる。 ・　友達や教師と一緒に学校生活を楽しむことができる。 ・　作業的な活動において達成感を得ながら，自ら意欲的に取り組むことができる。
中学部	・　新たなことにチャレンジしようとする意欲を高めることができる。 ・　自分の役割や責任を遂行することができる。 ・　目的を共有し，共に活動することができる。 ・　相互に気持ちや考えを伝え合うなどして課題解決をすることができる。 ・　社会生活のルールやマナーについて身に付けることができる。 ・　働く生活に関心をもつことができる。 ・　自己選択，目標設定，自己評価をすることができる。
高等部	・　身に付けてきた力を実際の社会生活で生かすことができる。 ・　主体的に判断・行動することができる。 ・　身だしなみや礼儀を大切にすることができる。 ・　自分の役割を意識し，成し遂げる責任感をもつことができる。 ・　作業に意欲的に取り組むことができる。 ・　一定時間継続して作業のできる体力と気力をもつことができる。 ・　社会や職場の決まりを守り，協力し合って生活を送ることができる。

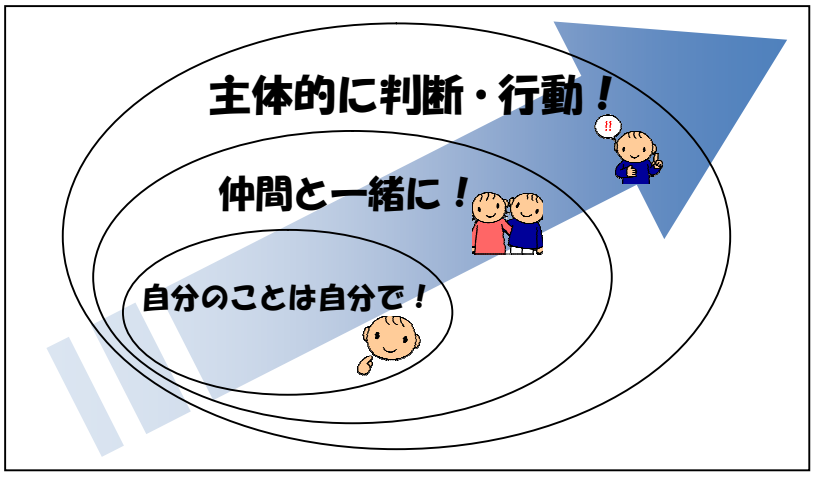


図２　めざす児童生徒像（キーワード）の広がり

⑵　一貫性・継続性のある指導とは

「一貫性・継続性のある指導」の捉え方について言及する前に，「一貫」と「継続」について，辞書※２での意味について確認することで，研究テーマでの意味が鮮明になると考える。※２　広辞苑より引用

一貫	一筋に貫くこと。一つの考え方ややり方で貫き通すこと。
継続	前の状態・活動がつづくこと。また，受け継いでつづけること。

次に，鹿児島県総合教育センター平成 25 年度研究紀要「特別支援学校における一貫性・系統性のある指導の在り方に関する研究　―知的障害のある児童生徒の pdca サイクルに基づいた授業づくりを目指して―」での一貫性・系統性のある指導について整理されたものを引用する。本校は「系統性」ではなく「継続性」のある指導であるが，ここではその違いを考える参考とする。

一貫性のある指導	一人一人の教育的ニーズや指導内容・指導方法などを明らかにし，指導者間及び学部間などで共有して指導すること
系統性のある指導	一人一人の指導目標や指導内容を，各教科の目標や内容，発達の段階や生活経験，生活年齢などを踏まえて指導すること

これらのことや「Ⅱ　研究テーマ設定の理由」で述べられた項目から，本校では「指導の一貫性・継続性」を以下のように確認した。

一貫性のある指導	心理検査（知能検査），チェックリスト，行動観察，保護者とのミーティング（家庭訪問）を基にしたデータをケース会にて複数の教師で分析（解釈）し，得られた個別の教育的ニーズに向かって児童生徒に関係する者が手立てや関わり方を**共有して**指導すること ＜本校での実施場面＞ 保護者とのミーティング，学園との担当者会，ケース会，学部会，授業前ミーティングなど
継続性のある指導	個別の教育支援計画，個別の指導計画やその他の引継資料を活用し，学年や学部が変わっても手立てや関わり方を**受け継ぎ**ながら，新たな（次のステップの）個別の教育的ニーズに向かって指導していくこと。 ＜本校での実施場面＞ 担任間引継，個別の教育支援計画，個別の指導計画，通知表（あゆみ），指導要録など

Ⅱ　１年目の研究

「ライオン」

Ⅱ　１年目の研究

１　研究の方法と組織

「一人一人の自立と社会参加をめざす」ことについては，個別の教育支援計画及び個別の指導計画を作成する中で，個別の教育的ニーズに対する目標設定，指導，評価を行うこととする。

「一貫性・継続性のある指導」については，標準化された心理検査（知能検査），本校チェックリスト及び行動観察等によって得られたデータを複数の教師で分析（解釈）し，目標を設定し，手立てを考え，日々の授業や研究授業で実践し，授業検討会で学期の反省から評価や改善点を見出すアセスメントの一連のプロセスを行う。

また，研究の組織は，研究テーマの捉え方や進め方の共通理解を図る全体研究とアセスメントの一連のプロセスを学部の実情に合わせて実施する学部研究に分けた。そして，研究テーマを達成するための検証や，その問題点を改善するために３年間の計画で研究を進めることにした。

⑴　研究の方法

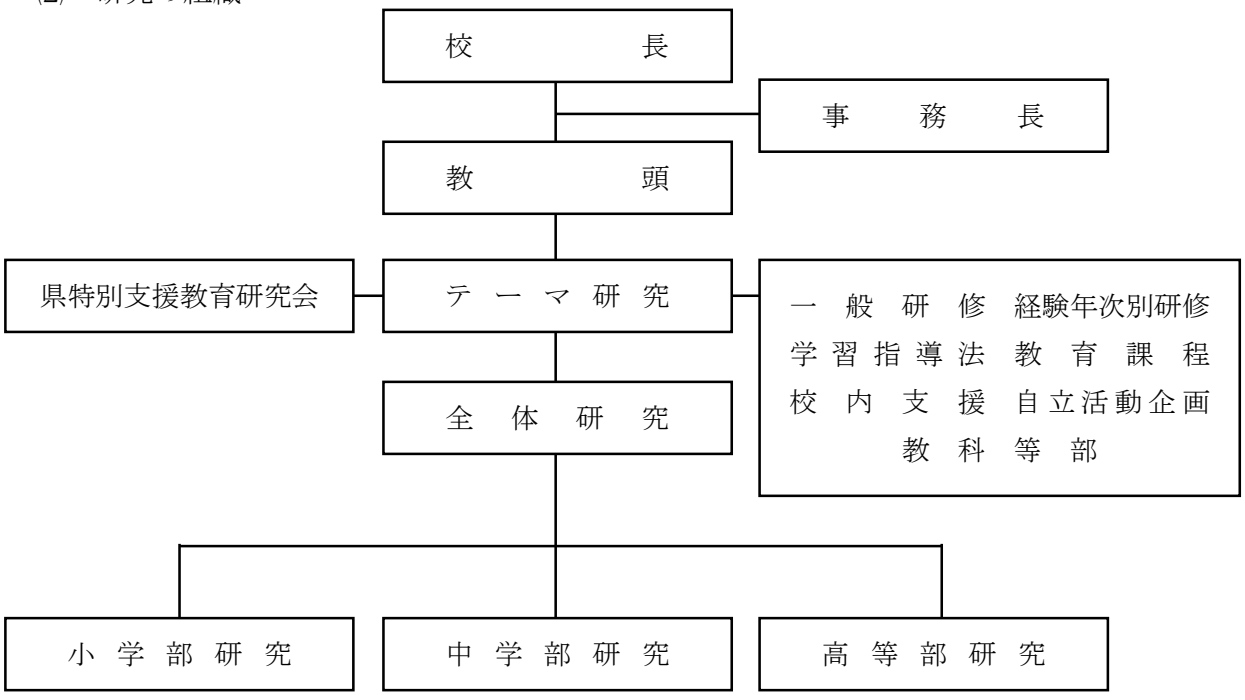
ア　全体研究

- 「一人一人の自立と社会参加」，「一貫性・継続性のある指導」についての捉え方，研究テーマ設定の視点，研究の進め方について全体で共通理解する。また，チェックリストの具体的な活用法について研修を行う。
- 研究の始めと終わり（６月と１月）に教師アンケートを実施し，意識の変化や取組状況の比較から成果と課題，来年度の方向性を見出す。
- 各学部の研究内容について紹介する「実践報告会」を設定する。

イ　学部研究

国語，算数・数学に教科について，対象児童生徒を設定し，心理検査（知能検査）や本校のチェックリストからのデータを複数の教師で分析（解釈），目標設定，評価，改善を行う。このアセスメントの一連のプロセスを学び合うことで教師の特別支援教育に関する専門性の向上へつなげる。

⑵　研究の組織



２　研究の経過

月	日	曜	主な研究内容		形態
5	2	金		今年度の研究テーマについて教師アンケート	
	29	木	テーマ研究 ①	今年度のテーマ研究について 今年度の研究計画について アンケート，校長先生から	全体
6	12	木	テーマ研究 ②	研究テーマの捉え～ 「一人一人の自立と社会参加」とは 「一貫性・継続性のある指導」とは 研究テーマの検証方法，進め方について チェックリストの活用法～国語，算数・数学～ 研究検証用アンケート	
	26	木	テーマ研究 ③	各学部での進め方について（メンバー構成） 研究授業，授業検討会の実施期間，進め方について 様式について	各学部
7	10	木	テーマ研究 ④	対象児童生徒を設定し，国語，算数・数学のチェックリストを中心に分析（解釈）を複数の意見を交えながら行う。 明らかになった目標やそれに対する手立てを研究授業にて検証し，ワークショップ型の授業検討会では改善点へつなげる。	各学部
8	28	木	テーマ研究 ⑤		
9	25	木	テーマ研究 ⑥		
	30	火		授業参観，授業検討会一覧表　掲示，配布	
10	16	木	テーマ研究 ⑦	原則として，テーマ研究の時間を使用し，授業検討会を行う。 進捗状況を中間報告会，アセスメントの一連のプロセスを実践報告会などとして設定してもよい。	
11	13	木	テーマ研究 ⑧		
	18	火		県特別支援教育研究大会（大島大会）	
12	4	木	テーマ研究 ⑨	各学部での研究まとめ 成果と課題　来年度へ向けて	各学部
1	20	火		各学部での研究まとめ　原稿提出	
	22	木	テーマ研究 ⑩	研究（成果と課題）の発表（小・中学部，高等部） 質疑応答　研究検証用アンケート	全体
	28	水		平成 26 年度　「研究のまとめ」起案	
2	12	木	テーマ研究 ⑪	研究（成果と課題）の発表（全体） 来年度の研究について，アンケート 校長先生から	全体
	18	水		「研究のまとめ」丁合，発送，ＨＰへアップロード	

3　研究の実際

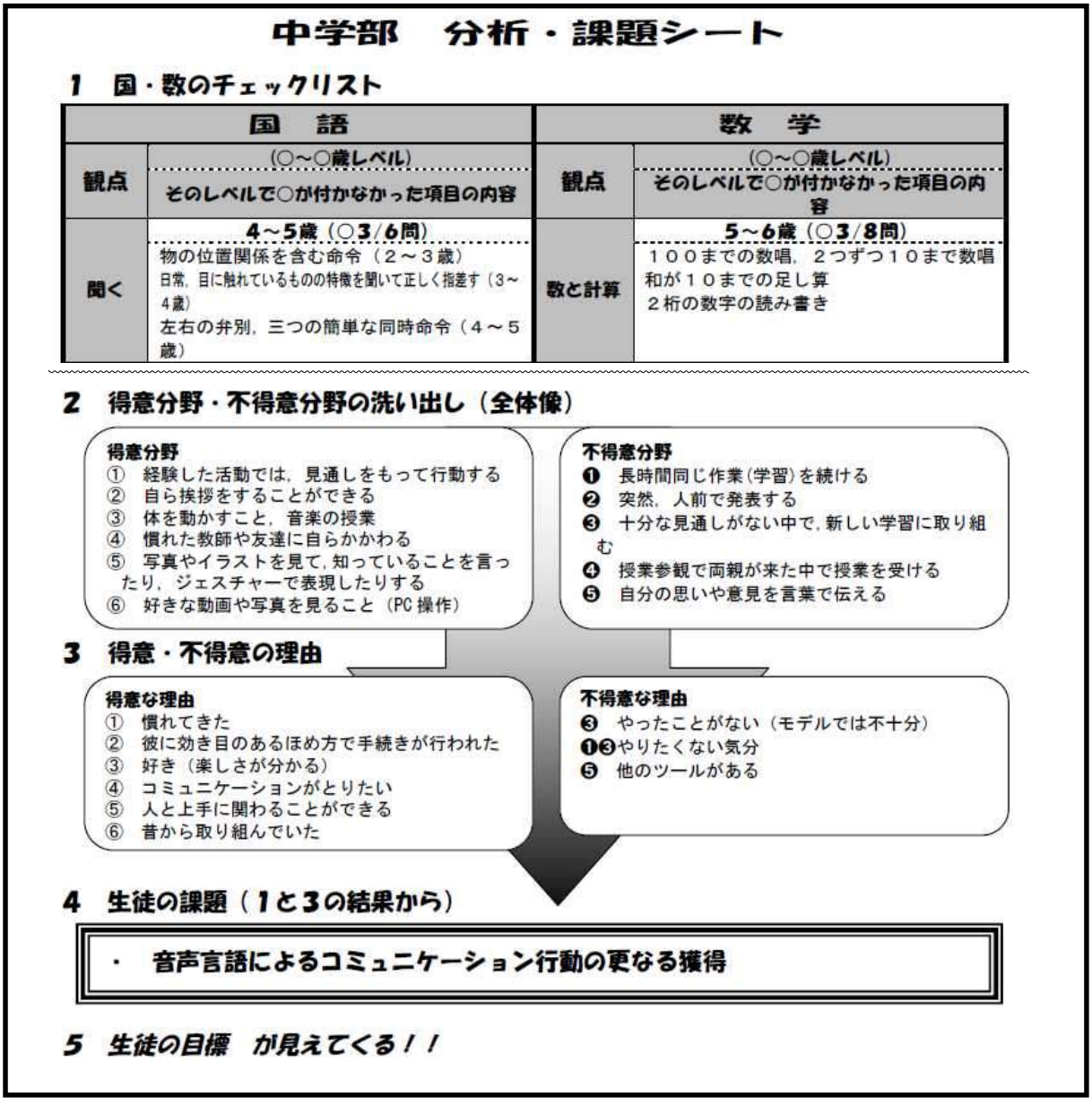
⑴　全体研究

全体研究では，研究テーマの意味（捉え方）や研究の計画について説明を行った。研究テーマへの理解については，全体への説明を通して，一定の理解を得ることができた。しかし，「一人一人の自立と社会参加」,「一貫性・継続性のある指導」の捉え方（定義）については，係内での言葉の整理がうまくいかず，説明が至らなかったことと，全体で議論する場を十分に設定できなかったこともあり，教師の“共通言語”として機能するまでにはならなかった。

一方，アセスメントの一連のプロセス（平成 26 年度は国語，算数・数学について，チェックリストを活用して学び合うことに重点を置いた）については，中学部でのチェックリストを活用した分析（解釈），授業づくりについて，実践例を紹介したことで，全体研修の場が設定でき，「アセスメント」のイメージを具体的にすることにつなげることができた。

⑵　学部研究

検証授業において，対象の児童生徒を設定し，以下に示す分析・課題シートを係から提案し，使用した。（高等部は学部の実態に応じて，若干形式が異なる。）



中学部　分析・課題シート

1　国・数のチェックリスト

国　語		数　学	
観点	(○～○歳レベル) そのレベルで○が付かなかった項目の内容	観点	(○～○歳レベル) そのレベルで○が付かなかった項目の内容
聞く	4～5歳（○3/6問） 物の位置関係を含む命令（２～３歳） 日常，目に触れているものの特徴を聞いて正しく指差す（3～4歳） 左右の弁別，三つの簡単な同時命令（４～５歳）	数と計算	5～6歳（○3/8問） １００までの数唱，２つずつ１０まで数唱 和が１０までの足し算 ２桁の数字の読み書き

2　得意分野・不得意分野の洗い出し（全体像）

得意分野
① 経験した活動では，見通しをもって行動する
② 自ら挨拶をすることができる
③ 体を動かすこと，音楽の授業
④ 慣れた教師や友達に自らかかわる
⑤ 写真やイラストを見て，知っていることを言ったり，ジェスチャーで表現したりする
⑥ 好きな動画や写真を見ること（PC 操作）

不得意分野
❶ 長時間同じ作業（学習）を続ける
❷ 突然，人前で発表する
❸ 十分な見通しがない中で，新しい学習に取り組む
❹ 授業参観で両親が来た中で授業を受ける
❺ 自分の思いや意見を言葉で伝える

3　得意・不得意の理由

得意な理由
① 慣れてきた
② 彼に効き目のあるほめ方で手続きが行われた
③ 好き（楽しさが分かる）
④ コミュニケーションがとりたい
⑤ 人と上手に関わることができる
⑥ 昔から取り組んでいた

不得意な理由
❸ やったことがない（モデルでは不十分）
❶❸やりたくない気分
❺ 他のツールがある

4　生徒の課題（1と3の結果から）

・　音声言語によるコミュニケーション行動の更なる獲得

5　生徒の目標　が見えてくる！！

この検証シートで見えてきた対象児童生徒の課題を基に，以下の指導略案を作成した。指導略案を作成するときに，重点においたことは，個別の指導計画の重点目標を記載することで，個別の指導計画との関連性をもたせること，そして標準化されたチェックリストと前ページで見えてきた実態を基に分析（解釈）した児童生徒の課題を明記することである。このような流れで指導略案を記載することで，目標設定までの関連を教師が意識できるうえに，指導の中で重点目標を確認することができる。そこから目標達成のための指導・支援方法を複数の視点で協議した。この指導略案では，本時の実際は簡潔に書くことを共通理解して研究を進めた。

(1)　個別の指導計画における重点目標

- 友達に対して，正しい言葉遣いでコミュニケーションを図ることができる。
- 休み時間等を利用して，自分のタイミングでトイレに行くことができる。
- 授業中や休み時間において，話している人の目を見て，話を聞くができる。

(2)　標準検査の結果

検査名(実施日)		検査結果　※解釈等は(3)で述べる
S-M社会生活能力検査（H２４．４．２１）		CA21-3，SQ42，SA5-2
WISCⅢ	（H２４．６．１３）	全検査 40 未満，言語性 47，動作性 40 未満
本校チェックリスト	**国語**　聞く(9歳以上)　話す(8～9歳)　読む(6～7歳) 書く(6～7歳) **数学**　数と計算(5～6歳)　量と測定(5～6歳)　図形(6～7歳) 数量関係実務(6～7歳)	

(3)　話し合いでの分析・見えてきた課題(標準検査の解釈等)

・相手の話を聞いて，自分の言葉で説明をしたり，伝言をしたりすることができるが，肝心な要件を落とすことがある。相手の話を聞いて，質問をしたり，話したりすることや関わることに積極性が見られ，学習全般に対する学習意欲は高い。また，筆圧が弱く文字が薄いため文字を見落とすことが多い。文字の大きさに関しても，一文字ずつ枠を与えれば枠内に適した大きさで書くことができる。よって，Bや２Bなどの濃い鉛筆を使用して文字や線をはっきり出すことを活動の中で意識付けさせたい。そして，視覚情報及び聴覚情報から，要点を整理し，上記の内容をふまえて書く力や文章を構成する能力を育くみ，発表を通して，自分で文章化した内容を表現する力を身に付けることをねらいとする。

(4)　本時の個人目標

ア　物語の絵を見たり，楽しく聞いたりして，おおまかな流れを掴むことができる。
イ　物語の世界を味わい，進んで楽しい場面を発表したり，文章で表現したりすることができる。

(5)　個人目標に対する指導及び支援に当たって

アについて

・プリントやテレビで映し出す動画と同じ絵を活用することにより，視覚的・聴覚的におおまかな流れを振り返ることができるようにする。

過程	主な学習活動　※指導及び支援上の留意点は除く	資料・準備
導入 (10 分)	1　始めの挨拶をする。 2　本時の学習内容を知る。 ・(前時の学習を確認) 3　本時の学習目標を知る。 登場人物の気持ちを考えよう。	・ＰＣ ・ＴＶ ・確認カード等一式
展開 (30 分)	4　動画を見る。 5　プリントの吹き出しに台詞を書く。 6　発表をする。	・ＰＣ　・ＴＶ ・プリント　・ﾀｲﾏｰ ・指示棒 ・カード（登場人物） ・カード（表情）
終末 (5 分)	7　次時の学習内容を知る。 8　終わりの挨拶をする。	・ＰＣ ・ＴＶ

4　研究の成果と課題

⑴　成果

- 　アセスメントをチームで取り組み，同じ視点をもって授業に取り組めた。（一貫性）
- 　アセスメントの方法が理解でき，共通実践できた。（理解・共有）
- 　アセスメントを基にした授業づくりの具体的な方法が分かった。（授業づくりに役立った）
- 　アセスメントをすることで，指導の裏付けができた。（客観的なデータ）
- 　全員でアセスメントについて学ぶことができた。（アセスメントの大切さ）
- 　複数の視点（意見）から実態や課題をとられた結果，実践の幅が広がった。（授業に生かせた）
- 　他の先生の意見がとても勉強になった。（実践例の紹介も勉強になった）
- 　各種検査やチェックリストの重要性を感じた。
- 　授業研究でたくさんの意見を聞くことができ，授業改善につながった。
- 　各種検査やチェックリストを用いることで，多方面から児童生徒を見て，新たな気付きがあることが分かった。（深い実態把握）
- 　チェックリストの使い方，活用の仕方について，実践を通して取り組めた。
- 　日々の授業をグループで考える時間が確保できた。（学部内の話し合いの充実）
- 　仲間と一緒に授業づくりをする意識が高まった。

⑵　課題

- 　一貫性・継続性が見えてこない，分かりにくい。（大きなテーマとのつながり）
- 　社会参加と自立にどのようにつなげるか。
- 　アセスメントにかかる時間の設定（確保）は，テーマ研究がないとできない。
- 　様式ややり方を学部独自のものとすると，引継時に一貫性・継続性に難しさが生じる。
- 　分析の資料が多く，限られた児童生徒しか実施できない。
- 　研究授業（授業実践）を全員で見ることができる体制づくり。（授業検討会の参加）
- 　今回の研究の流れをどう継続していくか。
- 　T・T における，CT と ST との共通理解，共通実践（事前の打ち合わせ）
- 　課題は見えてきても，どうしてよいか悩む（経験年数の少ない教師が多い？）
- 　チェックリストの評価基準があいまいで，人のよって評価が変わっている。（正確性）
- 　国語，算数・数学で取り組んだので，一部の教師に授業者が偏った。（負担感）
- 　アセスメント後の実践，改善。
- 　テーマの語義を明確にする必要性。

これらのことから１年目の研究として，アセスメントの一連のプロセスを国語，算数・数学の指導において生かすことができたという成果があった。一方，チェックリストの客観性を高めること，各学部が行う教育の継続性が図られるように年間指導計画を見直しすること，自立と社会参加に必要な能力の洗い出しをすることへの課題が挙げられた。また，テーマを教師間で共通言語として捉えて，研究に取り組むことができるようにすることも次年度への課題となった。

Ⅲ　２年目の研究

「奄美の空」

Ⅲ　２年目の研究

１　研究の方法と組織

□　　研究の方法

１年次（平成 26 年度）の研究で挙げられた解決すべき課題について〝テーマ研究〟の時間を利用し，解決（改善）するという考え方の下，学部を解いた四つチームを編制する。なお，主体的に研究できるように，事前に教師に希望調査を取り，全て第一希望のチームになるようにした。このことにより，学部を解いた教師の同僚性を高めることをめざした。

また，各チームの進捗状況を知り，教師からの意見を取組に反映させるために，プロジェクト研究期間中に「中間報告会」と「実践報告会」を設定した。

以下に，各チームの具体的な研究の方法（ゴール）を示す。

ア　チェックリストチーム

- 全教師が同じ視点で評価できる評価基準を明確にした改訂版を作成する。
- 検査項目と説明書を一体化した様式を作成する。
- 参考にした文献を明記する。
- 年間指導計画との関連を新たに明記したり，修正したりする。

イ　年間指導計画チーム

- 生単：年間指導計画（小－中－高）の単元一覧表を作成する。
  年間指導計画（小－中－高）における目標の系統性を整理する。
- 作業：中学部，高等部の各作業班共通の単元一覧を作成する。

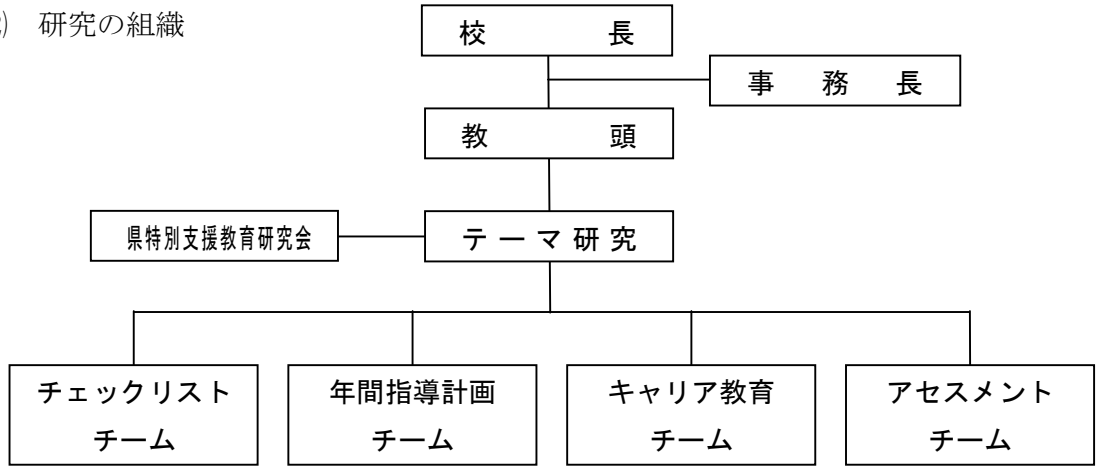
ウ　キャリア教育チーム

- 学部目標から各学部のキーワードを設定する。（それぞれの段階で習得させたい力（目標）の明確化）
- 本校「平成２７年度キャリア教育全体計画」における育てたい力の項目を基に「領域・教科を合わせた指導」の指導内容を整理する。
- 授業改善シートを活用した授業を実践する。

エ　アセスメントチーム

- 文献を基にした発達段階表を作成する。（４グループ）
- 作成した発達段階表を活用し，対象児童生徒の分析（解釈）を実施する。
- 県音研や義務教育課学校訪問で，付せん紙を用いた研究授業及びワークショップ型の授業検討会を実施し授業改善と参加者全員の授業力向上（専門性の向上）を図る。

⑵　研究の組織



2　研究の経過

月	日	曜	主な研究内容		形態
5	19	火		プロジェクト研究について（チームの希望調査）	
	29	金		第１回特別支援学校授業力向上実践協議会 （県総合教育センター）	ﾁｰﾌ出席
6	2	火	テーマ研究①	「かごしま学力向上プログラム」 第２期特別支援学校授業力向上プログラムの概要説明 今年度の研究テーマについて（基調説明） 今年度の研究計画について プロジェクトチーム発表，アンケート	全体
	24	水	テーマ研究②	プロジェクトリーダーを中心に研究のゴールへ向けて課題解決を実施	各チーム
7	24	金	テーマ研究③		
8	27	木	テーマ研究④		
10	1	木	テーマ研究⑤	「中間報告会」 各チームの進捗状況の発表及びアンケート実施	全体
	23	金		第 53 回鹿児島県音楽教育研究大会大島大会 研究授業（中学部）・授業検討会	音楽科 中学部
11	5	木	テーマ研究⑥	研究のゴールへ向けて課題解決を実施	各チーム
	19	木	テーマ研究⑦		
12	16	水		義務教育課　特別支援学校学校訪問 研究授業（中学部），授業検討会	全体
1	7	木	テーマ研究⑧	研究のゴールへ向けて課題解決を実施	各チーム
	28	木	テーマ研究⑨	「実践報告会」 各チームの成果と課題の発表及びアンケートの実施	全体
2	3	水		第２回特別支援学校授業力向上実践協議会 本校研究の事例発表 （県総合教育センター）	ﾁｰﾌ出席
	26	金		各チームの「研究のまとめ」，別冊資料集　原稿提出	
3	7	月		平成 27 年度　「研究のまとめ」，別冊資料集　起案	
	10	木	テーマ研究⑩	研究の成果と課題について 来年度の研究について 校長先生から	全体
	22	火		「研究のまとめ」，別冊資料集発送，HP へアップロード	

3　研究の実際

⑴　チェックリストチーム

本校の財産であるこれまでのチェックリストについてのアンケートを全教師に実施し，課題を集約した。その結果，検査項目の検討・見直しを行い，評価基準を明確にすることを目標とし，五つのグループに分けて検討を行った。

○　国語グループ
○　算数・数学グループ
○　生活習慣・身体運動グループ
○　コミュニケーショングループ
○　家庭生活・職業生活グループ

全グループで共通理解事項として①国語，算数・数学，職業生活グループ以外のチェックリストでは，３段階評価としたこと（評価の客観性），②発達検査等，参考にした書籍や検査名を明記すること（根拠），③重複及び類似項目があった場合には統一することとするが，発達段階を知るうえで必要なときには，重複しているチェックリスト項目を必ず明記することにした。この共通理解事項を踏まえて，チェックするときの評価基準や説明書きを評価項目の横に加えることや，時代を考慮して項目の文章表現を書き換える（ビデオテープ→DVD など）ことに取り組んだ。本校の課題を基に項目内容を増やした部分もあった。

国　語　（話　す）

	1 （0～1歳レベル）	チェック	解　　説	参考文献
①	母音を出す		例:「アー」「ウー」「エー」など。	遠
②	子音を出す		例:「クー」「プー」「ブー」「マ」「バ」「タ」「ダ」など。	ポ
③	泣かずに声を出す		機嫌がよいときに「アー」「ウーウー」「ウァ」「オーオー」などの母音が出せたら○。	遠
④	声を出して笑う		くすぐられたり，あやされたりすると大きな声で笑えたら○。	遠
⑤	人に向かって声を出す		自分から「アッアッ」「ナンナンナン」「パッパッパッ」などという喃語を出せたら○。	遠

コミュニケーション　　○:一人でできる　△:支援があればできる　×:支援ありでもできない

分野	内　　容	中1	中2	中3	高1	高2	高3	特記事項
	1 感情のコントロール							

⑵　年間指導計画グループ

本グループは生活単元学習と作業学習の二つのグループに分けて研究を行った。

生活単元学習のグループ内で課題について協議したところ，小・中・高のつながりを意識した授業づくりを行うことができていないということ，他学部の指導の目標や取組について知ることができていないということが分かった。この課題を解決するために，生活単元学習では各学部の類似性のある単元の目標を照らし合わせて，継続性のある目標を設定すること，各学部の目標のつながりが見えるような形に単元指導計画を改善することにした。

具体的には，それぞれの学部の単元指導計画を持ち寄って，単元の内容が類似しているものでまとめる。そこから，各学部の目標を照らし合わせて，その単元の内容で目標としていることを要約した。各学部の単元指導計画の目標をこの目標の要約部分とすることで，各学部同じ出発点に立つことができ，その目標を達成するために，段階的な手立てを行ったり，方法を変えたりすることで，各学部のつながり（継続性）を意識することができるのではないかと考えた。また，各学部の単元一覧表を作成し，他学部の指導計画が分かるようにした。

表－5　[例]単元の目標

単元【運動会をがんばろう】
○　運動会について知ることができる。
○　運動会の係や役割を決めることができる。
○　運動会に必要な道具の準備をすることができる。
○　運動会の振り返りをすることができる。

作業学習においては，各学部で作業班ごとの題材一覧表があるが，学部内での目標の段階性が見えにくいこと，中学部と高等部のつながりが分かりづらいことが課題として挙げられた。その課題を解決するために，学部内での目標の段階性や中学部から高等部への目標の段階性が見えるような単元一覧表を作成することを目標に研究を進めた。学部内での目標の段階性と，中学部と高等部の系統性が見える単元一覧表の素案を作成し，中学部陶芸班と高等部窯業班の実践を通して，最終版の単元一覧表を提案することができた。

【作業学習】中学部　単元一覧

中学部			
月	単元名		目標
4 12h	『作業学習について知ろう』 『○○の作り方を知ろう』	基礎	・作業学習の目的，作業内容を知る。 ・販売までの主な作業工程を知る。 ・作業の一連の流れ(準備～作業～片付け～反 ・製品の作り方を学ぶ。 ・製品作りに必要な道具の名称と使い方 ・挨拶，返事，報告，質問の仕方や伝えた ・分担された作業に取り組む。 ・作り上げる，やり遂げる達成感をも ・目標の立て方を学ぶ。 ・販売に必要な準備，係を知る。 ・販売での客とのやり取りを学ぶ。 ・働くことで報酬をもらうことを知り，とへの意欲をもつ。
5 12h			
6 16h			
7 8h	『販売をしよう』		

【作業学習】高等部　単元一覧

高等部					
月	単元名			目標	教科等との関連
4	『作業学習について知ろう』 『○○の作り方を知ろう』	I段階	基礎	・作業の目的，各班の作業内容を知り，希望の作業班を選ぶ。(自己選択) ・主な作業工程を知る。 ・様々な製品の作り方を知る。 ・作業の決まりや指示，伝達，注意などを守る。 ・分担された作業に，責任をもって取り組む。 ・掃除の仕方や道具の収納の仕方を学ぶ。 ・製品の良否が分かる。 ●作業に扱う道具，機械などの名称，操作の仕方を知り，安全に正しく扱う。 ●時間を守る。 ●注意を集中し，根気強く作業をする。 ●作業に応じた服装をする。 ●適切な言葉遣いをする。 ●自分の立てた目標を適切に評価する。	生単：働く生活
5					
6	前期 産業現場等における実習		定着		
7			発展		

⑶　キャリア教育グループ

キャリア教育グループは，テーマ研究の初年度に行った教師へのアンケートでもテーマとしたいという意見が多数出されるほど，教師の課題意識が高いものであった。グループ内での話し合いの結果，キャリア教育の視点から各学部で身に付けておきたい力を整理し，共有することを目的とした。本校ではキャリア教育の指導計画があるが，それを活用することで課題を解決しようと考えた。本グループでは三つの小グループに分かれて研究を進めた。

一グループはキャリア教育を進める上での現状や課題を検討し，生活年齢や学部の段階に沿って日頃の実践が進められるようにするための「ツール」として，各学部のキャッチフレーズを決め，意識付けることにした。各学部のキャッチフレーズは以下のとおりである。

小学部「見つけよう　広げよう～教師や友達との多様な体験を通して～」
中学部「みつめよう　高めよう～一歩踏み出し，挑戦しながら～」
高等部「みとめよう　生かそう～社会生活に向けて～」

二グループは指導形態ごとのキャリア教育の視点を明確にするために指導一覧表を作成した。（この結果については H27 年度の「別冊資料集」にまとめてある。）

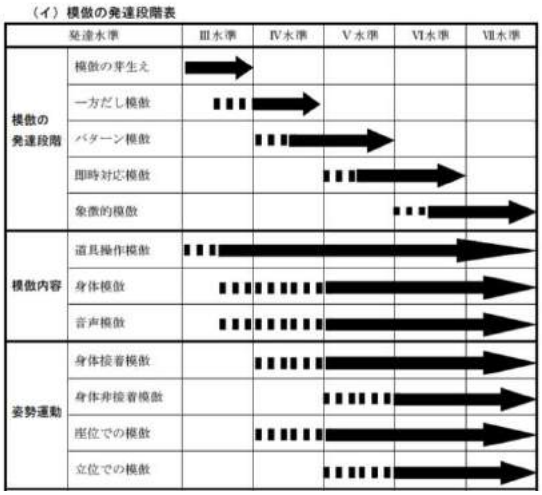
三グループでは国立特別支援教育総合研究所の菊池氏が提案している授業改善シートを用いて授業実践を行って研究を進めた。この授業シートを用いることでキャリア教育の視点を取り入れた授業を展開することができた一方で，ふだん記述する指導案に加えて作成しなければならない煩雑さが明らかになった。

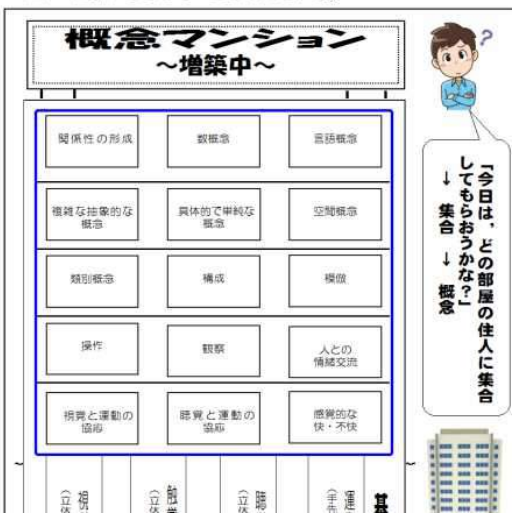
⑷　アセスメントグループ

アセスメントグループは以下の四つの組織に分かれて研究を進めた。

1　社会性グループ
2　コミュニケーショングループ
3　運動・動作グループ
4　概念グループ

これら四つのグループに分かれ，文献を基にした発達段階表を作成することを目的とした。さらに，作成した発達段階表を用いることにより，指導者のアセスメントスキルを向上させることもねらった。





4　研究の成果と課題

本研究では，学部を解いたチームを編制したことで他学部の意見や考え方を取り入れるなど，教師の同僚性を発揮し，継続性のある指導について意識を高めることにもつながった。

その結果，全てのプロジェクト研究において，年度当初に掲げた「研究のゴール」に達成することができた。以下に，各チームの具体的な結果を述べる。

⑴　各チームの結果

ア　チェックリストチーム

- 全教師が同じ視点で評価できるように評価基準を明確にしたチェックリストの改訂版（案）を作成した。
- 数種類のチェックリストの評定基準を統一する，検査項目と説明書を一体化した様式のチェックリストを作成する，検査項目の内容や表現を見直すなど，教師が活用しやすいように工夫した。
- チェックリストを行うことで児童生徒の実態を把握し，目標設定や指導内容を考える際に活用できるような検査項目を作成した。
- チェックリストを今後見直す際に，根拠となった発達検査等が分かるように，参考文献を明記した。
- 年間指導計画との関連を考慮しながら見直すことを意識することで，本校の年間指導計画の課題を認識できた。

イ　年間指導計画チーム

・　単元一覧表や目標の一覧表を作成することで，小・中・高各学部の取組を理解した。
・　他学部の取組を確認したことで，①他学部の取組を意識した授業を展開（一貫性）することや②小・中・高継続した指導へ（継続性）つなげることができた。
・　生単：年間指導計画（小－中－高）の単元一覧表の作成及び目標の系統性を整理した。
・　作業：中学部，高等部の各作業班共通の単元一覧を作成した。（目標，展開のつながりを整理）

ウ　キャリア教育チーム

・　各学部目標からの学部キャッチフレーズ作成を通して，キャリア教育に関する理解を深めた。
・　本校「平成２７年度キャリア教育全体計画」の４領域１６項目を遊びの指導，日常生活の指導，生活単元学習，作業学習ごとに整理することで，現在の指導内容の一つ一つがキャリア教育につながっていることを確認できた。
・　観点位置付け・授業改善シートを用いた授業を行うことで，シートがキャリア教育の観点を意識した授業につながるツールとして有効であることを確認できた。（一方，日々の授業で用いるには負担が大きい）

エ　アセスメントチーム

・　四つのそれぞれのグループが，一つのことについて文献研究をしたり，グループ内で協議したりしたことで，担当した領域の発達段階を熟知することができた。
・　「社会性」，「コミュニケーション」，「運動・動作」，「概念」の四つの発達段階表をチーム全体で共有した。
・　小・中・高各学部で編制されたグループで研究したことで，より広い意見を集約できた。
・　児童生徒の全体像を捉えるのに分かりやすい発達段階表を作成した。（本校独自）
・　作成した発達段階表を活用し，対象生徒の分析を（解釈）実施した。

⑵　成果

・　チェックリストの改訂版によってチェックがしやすくなった。これによって，チェックリストの更なる活用が図られる。
・　今ある資料を見直し，整理することができた。
・　回数が限られた中で，生単，作業の年間指導計画一覧表や発達段階表を作成することができた。
・　分担して研究（作業）ができたので，負担も少なく感じた。
・　各プロジェクト研究を共有でき，指導計画や方法が充実（児童生徒へ還元）される。
・　各チームの取組からたくさんのことを学ぶことができた。
・　各チームの研究は，小・中・高の指導の一貫性につながる。
・　多方面に自立と社会参加を考えることができた。
・　各チームが目的を明確にして，それに対して研究をすることができた。
・　“チーム”として同僚性を発揮し，「研究のゴール」に沿った成果を確実に残すことができた。

・　各チームに分かれて「主体的」に研究に取り組めた。学部を超えた縦割りの研究で間接的にも連携することができた。
・　学部を越えて，一つの課題に対して意見を出し合うことができた。
・　実践的な研究が数年続いていたが，今回，理論面について研究でき，土台が作られたことを実感できた。

⑶　課題

・　一つ一つのプロジェクトが大きい（学校全体で一斉に取り組んでいくような内容）ため，３年目の研究が大変になりそうである。
・　一つ一つが学校全体で取り組むべき内容，レベルのもので，一部の人たちの意見で取り組めるものではない。
・　内容が多すぎた（多岐にわたる）ため，まとまってどうあるべき研究テーマなのかという所が分かりづらい。
・　４チームの関連がうすい。
・　チーム同士の研究の関連性を明確にするとともにチームの数を絞ってもよいのではないか。
・　全員が共有できないと実践へ返すことができないが，今回の研究では可能か疑問である。（シンプルにできないか？）
・　チーム内で成果を共有する時間がほしかった。（実践につなげるための方策を考える時間）
・　全てのチームが作成したものをどう使うのか，児童生徒がどう変容した，という実践研究にしてほしい。
・　今後どのように教育活動（日々の授業や指導等）に生かしていくか。
・　各チームに課題があり，課題だけを見てしまうと増えた感じがする。

「カラオケ」

Ⅳ　３年目の研究

「宿泊学習」

Ⅳ　３年目の研究

１　研究の目標

今年度における研究の目標を次のように整理した。

⑴　これまでの研究の成果をまとめる年度とし，昨年度の研究の成果である「別冊資料集」を用いて，授業実践を行う。

⑵　授業づくりの pdca サイクルの意識を高めるとともに，授業研究で終わらない次時の授業へのつながりを意識して取り組む授業実践を行う。

⑶　付せん紙を用いた授業参観やワークショップ型の授業検討会をこれまでどおり続け，授業力向上を図る。（「かごしま学力向上プログラム」における授業公開，経験年次別研修等）

⑷　３か年の研究の成果をまとめた研究紀要「碧海」を発行する。

２　研究の仮説

先述した研究の目標を達成するために，以下のとおり３点の研究仮説を立てた。

○　個別の教育的ニーズのある児童生徒に対する，一貫性・継続性のある指導において，再検討を行ったチェックリストやアセスメントの方法を用いることで，客観性のある実態把握ができるのではないか。

○　学部共通の単元指導計画に記載された目標を基に授業づくりを行うことで一貫性・継続性のある指導ができ，更にキャリア教育の視点を取り入れた指導を行うことで，児童生徒の自立と社会参加を目指す指導ができるのではないか。

○　児童生徒の実態を基にした授業づくりをチームで行うことで教師全員の pdca サイクルへの意識が高まるのではないか。

これらの仮説を検証することが，主題である「一人一人の自立と社会参加につながる」児童生徒への指導につながるのではないかと考える。

「ピロポロをしたよ」

3　研究の方法

昨年度の研究の中で明らかになった課題を踏まえて，以下に示す方法で研究を進めることとする。

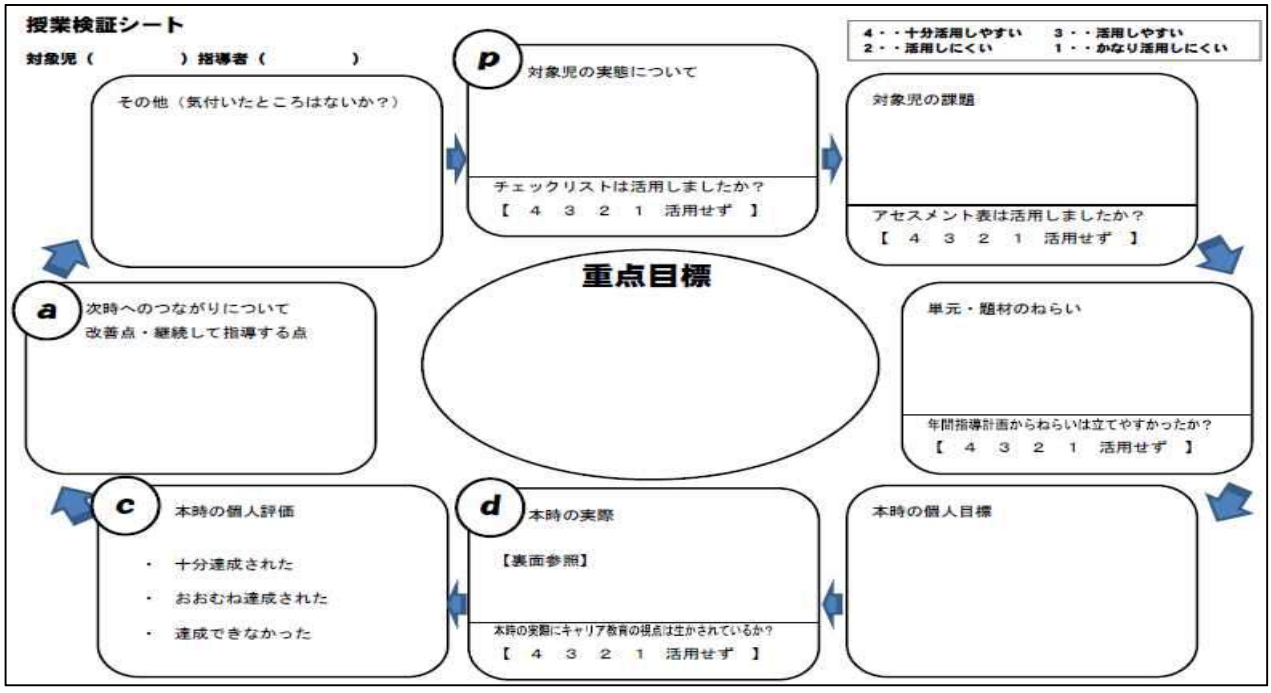
- グループ研究がお互いにどのような研究をしているかが分かる研究であること
- これまでの研究の成果を生かした実践研究であること
- 今後の教育活動に生かす内容であること

これらを踏まえて，今年度は学部ごとのグループに分かれた授業実践を研究の重点取組とした。そして，研究の主題に迫ることができるように，全体研究では過去２年間にわたる研究の概要を説明し，主題の意味を再度確認した。特に，Ｉの研究の概要にも掲載してある「自立と社会参加」と「一貫性・継続性のある指導」の捉え方を確認した。この共通理解の下，昨年度の成果である「別冊資料集」を用いた授業実践を学部ごとに行うことにした。授業づくりを通して，昨年度の四つのプロジェクトチームの成果の検証ができるように，下図のような「授業検証シート」を係から提案した。検証シートを使いながら，授業づくりを行うことで，四つのプロジェクトチームの取組を踏まえた授業づくりができるようにした。

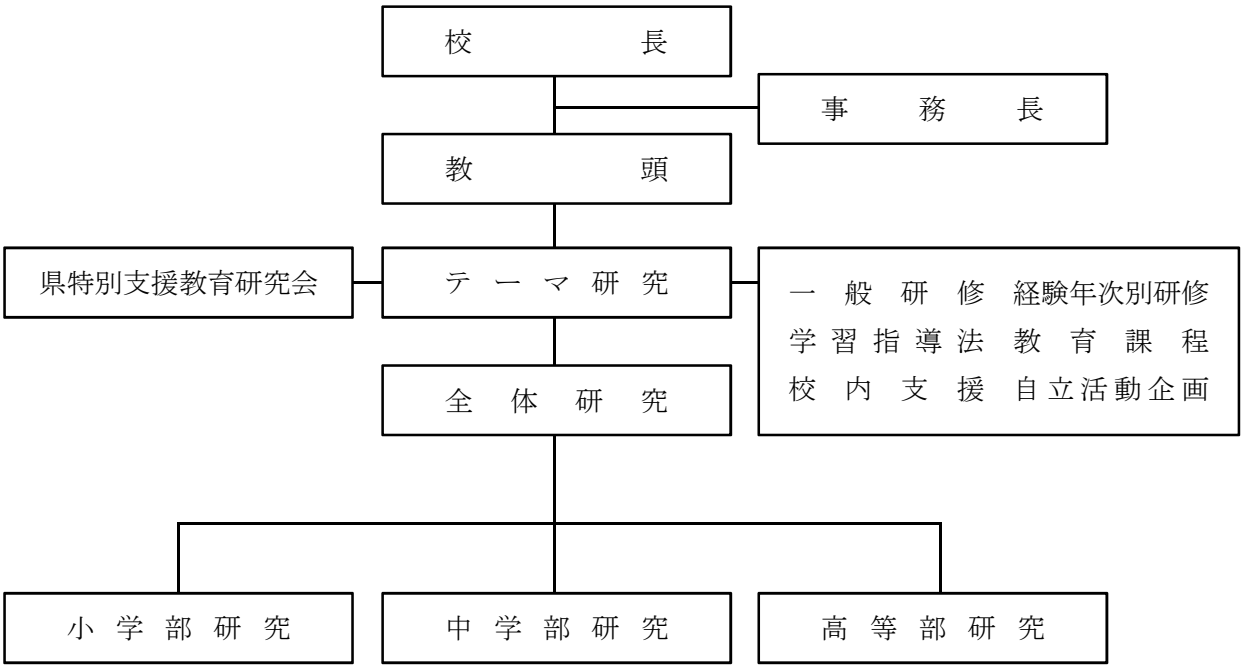
また，本年度は授業実践を重点取組としているため，授業づくりにおける pdca サイクルの意識を高めることも目標に掲げた。授業づくりの pdca サイクルを意識するうえで，おろそかになってしまいがちなのが，授業検討会後の次時の授業でどのように改善していくかという点である。本研究では授業研究の協議項目として，振り返りを踏まえて次時の指導でどのような指導・支援を行っていくかについて，指導グループで統一して取り組むことで，pdca サイクルを回し続けている意識を高めることができるようにした。

なお，授業実践をするに当たり，昨年度のプロジェクトチームの一つである「年間指導計画」との関連を踏まえて，今年度は生活単元学習と作業学習の二つに絞って授業づくりを行った。また，今回はチェックリストやアセスメントチームの発達段階表の妥当性やその活用法について研究を進める目的であるため，対象児童生徒を一人に絞り，課題分析，目標設定を行った。

これまでの研究同様，研究授業と授業検討会では，付せん紙を用いたワークショップ型を行い，研究成果を生かした形で研究を行った。



４　研究の組織



５　研究の計画

月	日	曜	主な研究内容		形態
5	6	金		第１回特別支援学校授業力向上実践協議会	ﾁｰﾌ出席
	17	火	テーマ研究①	「かごしま学力向上プログラム」 第２期特別支援学校授業力向上プログラムの概要説明 今年度の研究テーマについて①（基調説明） 今年度の研究計画について	全体
6	21	火	テーマ研究②	今年度のテーマ研究について② 授業検証シートの提案と活用法 学部ごとに分かれて研究の進め方	全体 ⇒各学部
7	初旬 中旬			学部ごとに授業検証シートを用いた 授業づくり及び授業検討会	
	25	月	テーマ研究③	第１回授業検証シート結果考察まとめ	各チーム 全体
8	30	火	テーマ研究④	授業公開指導案検討	
9	中旬			学部ごとに授業検証シートを用いた 授業づくり及び授業検討会	
	27	火	テーマ研究⑤	第２回授業検証シート結果考察まとめ	
10	6	木	テーマ研究⑥	授業公開前係会及び準備等	全体
	14	金	テーマ研究⑦	「かごしま学力向上プログラム」における授業公開	各チーム
1	6	金	テーマ研究⑧	紀要の原案作成　⇒　紀要項立発表　アンケート	各チーム
1	26	木	テーマ研究⑨	研究の成果と課題について 来年度の研究についてアンケート	全体
2	7	火		第２回特別支援学校授業力向上実践協議会 本校研究の事例発表	ﾁｰﾌ出席
2	10	金		研究紀要「碧海」　原稿起案	
3	8	水	テーマ研究⑩	アンケート結果公表 来年度の研究について	全体

６　研究の実際

小学部

夏休みの思い出「すいか」

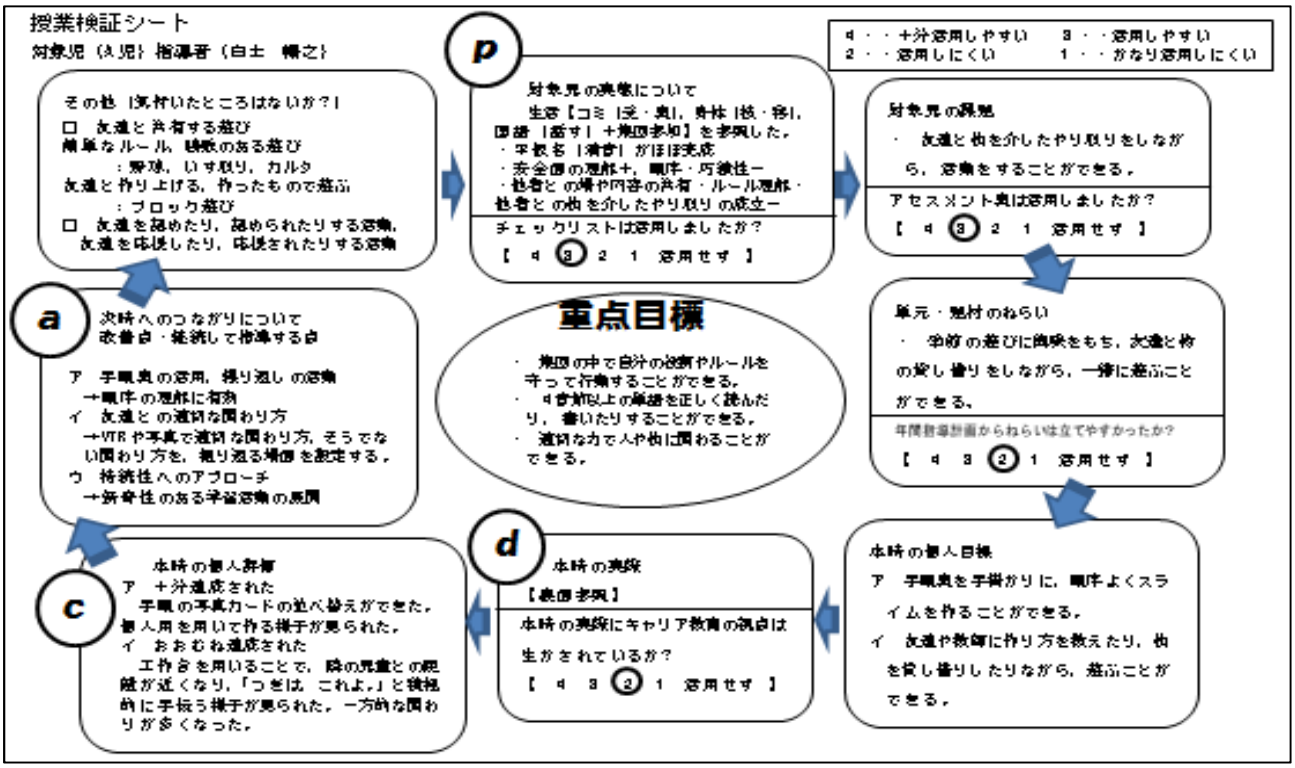
１回目の検証授業

単元名「なつのあそびをしよう」

授業者：白土　暢之，藤尾　友香

対象児：A 児

１　授業検証シートと指導略案



１　単元名　「なつのあそびをしよう」
２　本時の全体目標
　○　スライムの感触を楽しんだり，好きな色のスライムを作ったりして遊ぶことができる。
　○　友達と場や活動を共有したり，道具を貸し借りしたりしながら遊ぶことができる。
３　本時の個人目標
　○　手順表を手掛かりに，順序よくスライムを作ることができる。
　○　友達や教師に作り方を教えたり，物を貸し借りしたりしながら，遊ぶことができる。
４　本時の実際

時間	学習活動	指導上の留意点	キャリア教育の視点
導入	１　始めの挨拶をする。 ２　本時の学習内容を話し合う。 なかよく　あそぼう ・「どうぞ」，「こうたい」 ・スライムは，口に入れない。	・多目的室に集合する。 ・写真や具体物から前時の活動の様子を想起できるようにする。 ・イラストなどを用いて，本時の活動でも，仲良く遊んだり，安全面について確認したりして，意識できるようにする。	友達と同じ場で活動する。
展開	３　色水マジックを見る。 （1）赤・青・黄色の色水	・実際にCTがスライムを作る様子を見ることで，活動への見通しをもつことができるようにする。	
	４　スライム遊びをする。 （1）作り方を考える。 （2）好きな色の色水を選ぶ。 （3）スライムを作る。 CT：A児，C児，D児 ST：E児，F児 ５　片付けをする。	・考える際には，手順カードを順番に並べ替える活動を取り入れ，作り方を確認できるようにする。 ・個人用の手順カードを準備し，必要に応じて使用するようにする。 ・CT,STグループに分かれ,児童が十分に活動できるようにする。 ・C，D，E，Fは，感覚的な遊びとして楽しむことができるように,その感触を言語化したり,教師がスライムの遊び方を提示し広げたりする。 ・ホウ砂液の取り扱いには十分注意し，児童に指導する。 ・作ったスライムを透明の容器にまとめたり，机を拭いたりして，遊びの終わりを意識できるようにする。	遊びを通して友達と関わる。 自分の使った道具を片付ける。
まとめ	６　活動を振り返り，感想を発表する。 ７　終わりの挨拶をする。	・楽しかったことや仲良く遊べたことを確認したり，その様子を教師が称賛したりすることで，本時の達成感や次時への期待感を高めるようにする。	楽しかったことや頑張ったことを自分なりの方法で伝える。

授業検証シートは，授業者がA児を対象に記入した。A児の重点目標を踏まえ，チェックリスト，アセスメント，単元の年間指導計画，キャリア教育（指導略案に記入）の視点などの活用についても確認した。本時の個人評価，次時へのつながりについて，その他の項目については，授業後の複数教師での授業研究後に記入した。

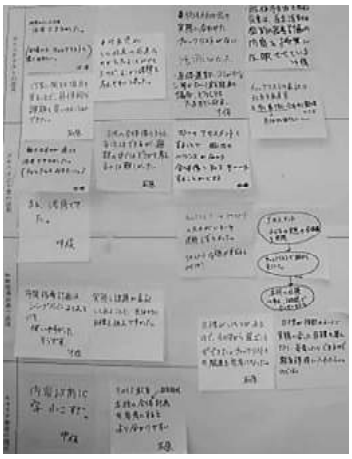
２　授業の実際

実際の授業場面では，作り方の手順表を用いたり，繰り返し作ることができるように準備したりすることで，スライムの作り方を覚え，自ら活動に取り組むことができた。

また，人との適切な関わり方を目標とするA児が，工作台を用いて，自分や友達の活動場所を分かるようにすることで，隣に座る児童に作り方を教えようとしたり，一緒にスライムの感触を味わいながら遊んだりする姿も見られた。一方的な関わりになる場面も見られたが，友達と関わりたいというA児の気持ちを大切にしつつ，遊びの内容や場所を共有しながら，友達との適切な関わり方について，A児と一緒に考えながら取り組んでいきたい。

３　授業研究

計六つの授業の検証シートと略案を用いて，チェックリスト等の活用について検討した。



チェックリストの活用について

○　多くの視点から授業で身に付けられる力を考えやすい。
○　対象児の発達の姿を捉え，そこから課題を考えやすい。
△　肢体不自由児の実態に合ったチェックリストではない。
△　チェックリストとアセスメント表の活用法の違いが分からなかった。

アセスメント表の活用について

○　アセスメントをすることで個人内のバランスが分かり全体像を知る手掛かりになった。
○　個人目標や学習活動の具体的な変更の手掛かりになった。
△　子供の全体像を捉えることはできるが，学習の中でどう生かすかが難しかった。

年間指導計画の活用について

○　個人目標を立てるときの参考にした。
○　実態と課題が表記してあり，具体的に目標を捉えやすかった。

キャリア教育の視点

△　どちらかというと後から考えたようになってしまった。
△　別冊資料集の表より教育課程の全体計画を参考にするとより分かりやすい。

＜まとめ＞

- チェックリストとアセスメント表の活用方法（いつするか，どのような目的でするか）を意識したい。
- キャリア教育について授業立案時から意識するようにしたい。

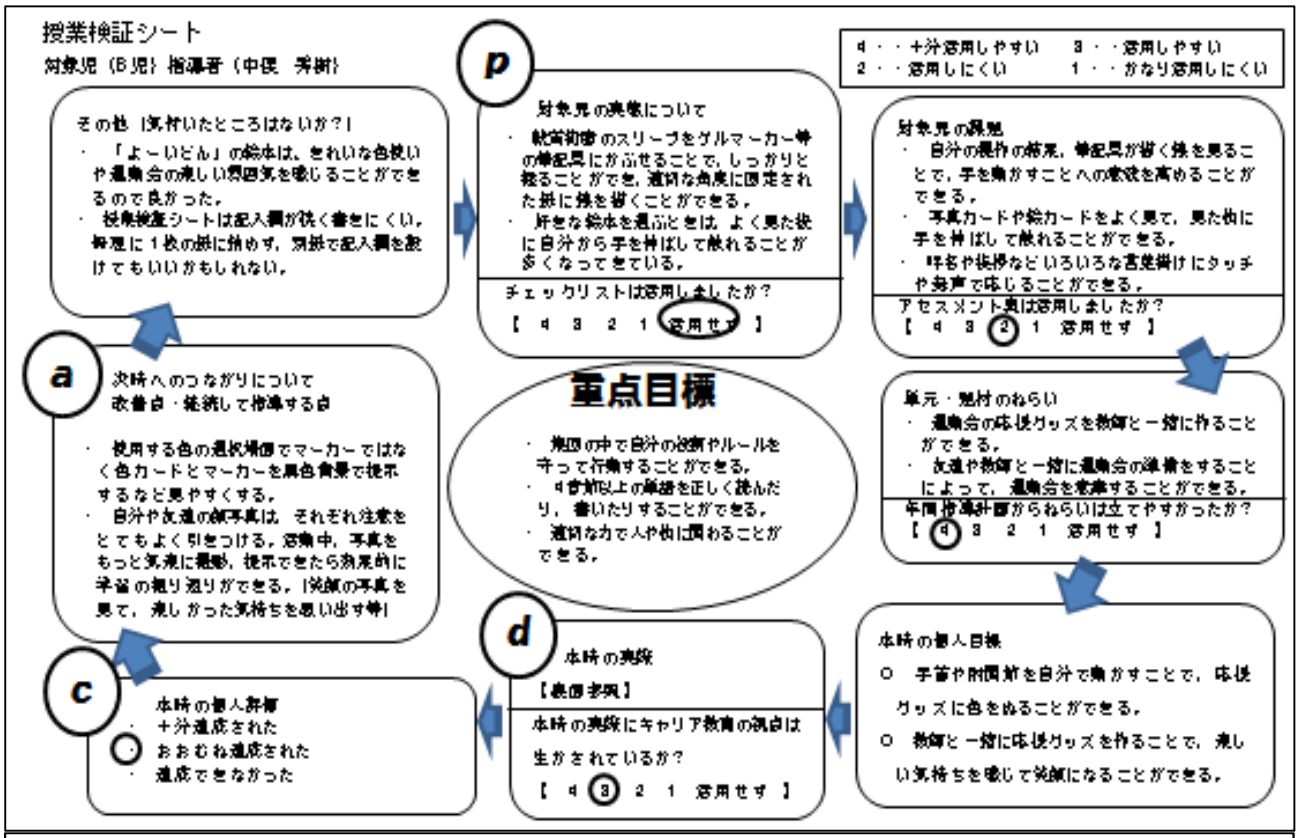
２回目の検証授業

単元名「うんどうかいをがんばろう」

授業者：中俣　秀樹，今村　三枝子

対象児：Ｂ児

１　授業検証シートと指導略案



１　単元名　「うんどうかいをがんばろう」
２　本時の全体目標
　○　運動会の応援グッズを教師と一緒に作ることができる。
　○　友達や教師と一緒に運動会の準備をすることによって，運動会を意識することができる。
３　本時の個人目標
　○　手首や肘関節を自分で動かすことで，応援グッズに色をぬることができる。
　○　教師と一緒に応援グッズを作ることで，楽しい気持ちを感じて笑顔になることができる
４　本時の実際

時間	学習活動	指導上の留意点	キャリア教育の視点
導入	１　始めの挨拶をする。 ２　絵本を読む。 「よーい　どん」 ３　本時の学習内容について知る。 おうえんぐっずを　つくろう！	・　教師と一緒に挨拶をすることで学習の始まりを意識できるようにする。 ・　絵本を読むことで，運動会の応援グッズを作ることがより意識できるようにする。 ・　昨年度の写真や具体物から，本時の活動を連想できるようにする。	習慣形成 様々な情報への関心
展開	４　うちわ（応援グッズ）を作る。 (1) クレヨン，ゲルマーカー等で色をぬる。 (2) うちわに紙を貼り付け，顔写真をはって完成させる。 (3) 手に持ってみる。	・　写真を使用した手順カードを提示することで，見通しをもつことができるようにする。 ・　児童にどの色を使うか選択させる。また，必要な補助具等使用して，自由に模様を描けるように支援する。 ・　「きれいだね。」「すずしいね。」など，感覚や気持ちを表す言葉掛けをして，児童の表情や言葉を引き出す	はたらく喜び 自己選択 意思表現 人とのかかわり
まとめ	５　完成したうちわを互いに見せ合う。 ６　終わりの挨拶をする。	・　作成した応援グッズと，作成中の画像を見ることで，学習を振り返り，児童の表情や言葉による反応を引き出す。 ・　頑張った点を確認したり，その様子を称賛したりすることで，達成感を高めるようにする	振り返り 肯定的な自己評価

１回目の検証同様，本校のチェックリストが肢体不自由児の実態に合致しなかったため，個別の指導計画の自立活動の内容を授業に反映させた。単元の年間指導計画，キャリア教育（指導略案に記入）の視点なども考慮した。授業後に主に記録 VTR にて授業研究を行い，教師の働き掛け方や対象児の反応について複数教師で確認を行った。

２　授業の実際

実際の授業場面では，運動会の応援グッズ（うちわ）の制作を行った。これまでの制作活動をする際の授業の手順を踏襲することで，児童に見通しがもてるように配慮した。昨年の運動会で撮影された写真や運動会を題材とした絵本「よーい どん！」で制作活動への関心・意欲を高めるようにした。写真や絵本を注視することができていた。制作活動の際は，座位保持装置を使用して姿勢を安定化，肘を支点とするよう支援を行うことで，上肢を自ら動かして模様を描くことができた（写真）。

（写真）

３　授業研究

計六つの授業の検証シートと略案を用いて，チェックリスト等の活用について検討した。

チェックリストの活用について

○　チェックリストは，重点目標設定の際に使用し，重点目標を日々の授業に生かすことで活用することができるのではないか。

△　肢体不自由児の実態に合ったアセスメントではないため，年度当初に設定した重点目標を生かして，児童の実態を捉えるようにした。

アセスメント表の活用について

○　一単位時間の目標として捉えるのは難しいが，年間の重点目標を設定する際に活用することができるのではないか。

△　１回目の検討を受けて，授業前に見るようにしたが，対象児の課題設定に活用するまでには至らなかった。

年間指導計画の活用について

○　単元の具体的な指導内容についても参考になる内容があり，活用できた。

△　実際に活用する場合，学習集団の実態に応じて学習活動の順番や内容などの見直しが必要である。

△　小・中・高で同じ目標であり，個別の目標を柔軟に立てられる利点はあるが，学部での目標や系統的な指導を考えると，目標も変化していく必要があるのではないか。

キャリア教育の視点

○　前回の検討を受けて，より意識して取り組むことができた。

○　別冊資料を活用することで，キャリア教育が日常生活全般に関係していることが分かり，キャリア教育に対する見方が変わった。

＜まとめ＞

・　チェックリストやアセスメントの活用では，児童の実態によっては，実態をより細かく捉えるために，重点目標などその他の資料を活用する必要があると考えられる。

・　年間指導計画の活用は，個人目標や学習内容の設定場面などで行われていた。

・　キャリア教育については，１回目の検討を受けてより意識できていた。

３回目の検証授業（小学部　生活単元学習　公開授業）

生活単元学習指導案

平成２８年１０月１４日金曜日２校時
小学部３年１組　男子１人　女子４人　計５人
場　所　小　学　部　３　年　１　組　教　室
指導者　野口憲代（ＣＴ）　中水教仁（ＳＴ）

１　単元名　「運動会をがんばろう」

２　単元について

(1)　単元設定の理由

〈児童の実態〉

本学級には，男子１人，女子４人の児童が在籍している。休み時間には，友達と一緒に音楽を聴きながら踊ったり，自転車に乗ったり，遊具で遊んだりと，体を動かすことを楽しみながら遊ぶことが好きな児童である。３年生になってから体力づくりの時間が設定され，毎日体操やリトミック，ダンスをする中で，集団が苦手な児童もみんなと一緒に体を動かす姿が多く見られるようになった。

学習場面では，友達の意見をもとに自分の考えを思い付いて発表したり，友達と競争して高め合ったり，困っている友達に答えを教えてあげたりと，相互に影響を与え合いながら学習に取り組んでいる。また，同じ流れで繰り返し学習することで学習への見通しをもち，一つの課題に集中して時間いっぱい取り組んだり，意欲的に発表したりすることができるようになってきている。

しかしながら，児童によっては大きな集団での新しい学習に意欲的に参加できず場を離れたり，新しい活動に前向きに取り組めなかったりすることがある。また，競争で負けたことを認められずけんかになったり，気持ちを切り替えて次の活動にスムーズに取り組むことができなかったりする児童もいる。これらは，興味・関心の幅が狭く，新しいことに対して不安傾向が強いこと，成功経験が少ないことや，結果にばかり目が向いて友達の気持ちに意識が向きにくいことなどが要因として考えられる。

〈単元の意義・価値〉

そこで，本単元「運動会をがんばろう」を設定する。運動会は，学校全体で取り組み，家族や地域の方々などが見に来る大きな行事の一つであり，体を動かすことが好きな児童にとって，期待感をもって取り組むことができる行事である。その行事に向けて期日や組分け，出場種目を調べたり，必要な道具や招待状を作ったりすることで，運動会への見通しをもち，意欲的に参加できるようになると考える。また，かけっこやダンス，団体種目などに教師や友達と一緒に参加し，体を動かす楽しさや達成感を味わったり，友達の応援をしたり応援してもらったりすることで友達と認め合う経験をしたりすることができると考える。

〈ねらい〉

そこで本単元では，運動会までの学習計画表や出場種目表，運動会に必要な道具などを作成することを通して，運動会への見通しや期待感をもち，練習や予行，当日の活動に主体的に取り組むことができるようにする。また，教師や友達と一緒に体を動かしたり，精一杯応援したりする活動を通して，教師や友達と一緒にやり遂げたり，頑張ったりしたという達成感を味わえるようにするとともに，友達の頑張りに気付き，認め合う経験ができるようにしたい。

〈指導観〉

具体的には，単元の始まりに小学部全員で昨年度のＤＶＤを見て思い出したり，期日や場所，赤白の組分けや種目，係について知ったりして，運動会に対する興味・関心や意欲を高めたり，学習活動に見通しをもったりできるようにする。学級では，大きなカレンダーにイラスト付きの学習内容を貼った学習計画表を作成し，毎時間の始まりに確認しながら学習を進めていく。そして，学習計画表はふだんから児童の目に付く場所に掲示し，自分たちで学習計画を確かめ，見通しをもてるようにしたい。

また，ダンスの道具（ボンボン）や応援グッズ，招待状を作る際に，一人一人の実態に合わせて道具や材料，手順書を工夫したり，作業量を調整したりして，なるべく教師の支援を減らし，自分の力で完成できるようにすることで，達成感を味わえるようにしたい。練習時は，教師も一緒に大きく体を動かして楽しんだり，「楽しいね。」と言語化して伝えたり，児童ができたことを一緒に喜んだりすることで，一緒に頑張ったという達成感を味わえるようにしたい。

さらに，制作後に一人一人の頑張ったことや工夫したことを具体的に称賛したり，練習で友達を応援したり，単元の終わりにＤＶＤや写真などを見て振り返ったりするなど，お互いの頑張りを認め合う場面を多く設定し，友達と認め合う経験ができるようにしたい。

〈展望〉

このような学習を通して，運動会という大きな行事をやり遂げたという達成感や満足感を味わい，成功経験を積み重ねていくことで，今後の学校生活や行事に見通しをもち，様々な活動に主体的に取り組んでいけるようになると考える。

(2) 児童の実態

	A児（男）	B児（女）	C児（女）	D児（女）	E児（女）
運動会への興味・関心	・自分から運動会に関する質問をするなど,運動会への興味・関心はとても高い。	・運動会への興味・関心が高く,「まけないぞ。」などの発言が聞かれ,とても楽しみにしている。	・運動会などの行事が大好きで楽しみにしている。 ※９月に体調を崩し,運動会の参加には配慮が必要である。	・１年生のときは運動会への参加を苦手としていたが,友達の練習の様子を見たり成功経験を重ねたりすることで,参加できるようになった。	・運動会への興味・関心が高いとは言えないが,教師と一緒に参加することができる。
集団参加・他者との関わり	・集団での決まりを守って行動することができる。 ・自分の気持ちをうまく伝えられず泣いたり,イライラしてたたいたりすることがあるが,友達が頑張っていることを応援したり,困っているときに手伝ったりすることができる。	・競争心が強く,友達の頑張りを認められなかったり,負けた悔しさから次の活動にスムーズに取り組めなかったりするが,落ち着いて話をすると,友達を認めたり,次の活動に意欲的に取り組んだりすることができる。	・離席したり,決まりを守れなかったりすることがあるが,教師や友達との関わりを楽しみながら集団学習に参加することができる。 ・友達の様子を見て集合場所や活動内容を理解し,一緒に行動しようとする。	・集合場所や並ぶ順番,合図などを理解し,集団での決まりを守って行動しようとすることができる。 ・休み時間は一人で行動することが多いが,友達をとても意識していて,「負けたくない。」という気持ちをもっている。	・大きな集団が苦手ではあるが,信頼する大人を支えにして学習に向かうことができる。 ・特定の大人との関わりを好むが,学級の友達の名前を言うなど,友達を意識した行動が増えつつある。
活動への見通し	・教師の話を聞いたり,計画表を見たりして,確実に見通しをもつことができる。 ・時間的な見通しがもてず,時間内に終わらせるのが難しいこともあるが,一つ一つの活動に丁寧に取り組むことができる。	・教師や友達の話と過去の経験を結び付けて,大まかな見通しをもって活動することができる。	・教師の話を聞いたり,友達の様子を見たりして,大まかな見通しをもつことができる。 ・日常生活の中で繰り返し経験していることは見通しをもって,主体的に活動することができる。	・自分でカレンダーや計画表などを見て情報収集し,見通しをもって活動することができる。 ・「うまくいった」という経験がない活動に対しては前向きな見通しがもてず,活動に消極的になる。	・新しい活動に対して見通しがもてず,集団の場から離れることがあるが,繰り返し経験すると徐々に見通しをもち,友達と一緒に参加することができる。
文字の読み・書き	・平仮名や片仮名,１年生で習う漢字で書かれた単語や簡単な文を読んで,意味を理解することができる。 ・１０センチ四方の大きさの文字をなぞり書きすることができる。	・平仮名と片仮名で書かれた文字を読み,簡単な文の意味を理解することができる。 ・自分の名前を平仮名で書くことができる。それ以外の平仮名と片仮名の視写やなぞり書きができる。	・平仮名で書かれた自分や身近な友達の名前を,まとまりとして読むことができる。 ・文字を書くことは難しいが,クレヨンや色鉛筆,ペンなどを使って,丸をかいたりなぐり書きをしたりして楽しむ。	・平仮名と片仮名で書かれた文字を読み,簡単な文の意味を理解することができる。 ・助詞の使い方や文末表現を間違うことがあるが,平仮名と片仮名で簡単な文を書くことはできる。	・平仮名のマッチングができつつある。 ・自分の名前が書かれた物を選んで取ることができる。 ・クレヨンや色鉛筆を使ってなぐり書きをしたり,丸をかいたりすることができる。
制作に関する実態	・右手に麻痺があり,主に左手ではさみやのりなどの道具を持って作業する。	・はさみで直線を切ったり,のりで貼り合わせたりして,作品を完成させることができる。	・教師の支援を受けながらはさみで直線を切ったり,のりで貼り合わせたりすることができる。	・焦って作業が雑になることがあるが,はさみやのりを使って一人で制作することができる。	・シールを貼ったりスタンプを押したりなど,好きな作業は意欲的に取り組むことができる。

3　単元目標

(1) 全体目標

ア　学習計画表や応援グッズ，招待状作りなどを通して運動会への見通しをもち，期待感や意欲を高めることができる。

イ　教師や友達と一緒にかけっこやダンスをしたり，お互いに応援し合ったりすることで，一緒に体を動かす楽しさを味わったり，お互いの頑張りを認め合ったりすることができる。

(2) 個人目標

A児（男）	ア　学習計画表を活用して運動会への見通しをもち，自分で道具を準備して練習や本番に参加することができる。 イ　大きな声で友達の応援をしたり，友達の頑張りを称賛したりすることができる。
B児（女）	ア　教師と一緒に学習計画表や出場種目表を確認したり，応援グッズや招待状を作ったりすることで，運動会の期日や出場種目を理解することができる。 イ　友達が頑張っている様子を見たり，応援したりして，友達の頑張りを認めることができる。
C児（女）	ア　出場種目表を見ながら自分の出場種目を言ったり，学習計画表を指差して運動会の期日を伝えたりすることができる。 イ　教師や友達と一緒に体を動かす楽しさを味わったり，大きな声で友達を応援したりすることができる。
D児（女）	ア　学習計画表を活用して運動会への見通しをもち，自分で道具を準備して練習や本番に参加することができる。 イ　教師と一緒に友達の応援をし，友達の頑張りを称賛することができる。
E児（女）	ア　出場種目表の絵や，競技や演技で使用する音楽を手掛かりにして，出場種目を理解することができる。 イ　教師や友達と一緒にダンスや団体種目の練習に参加し，体を動かす楽しさを味わうことができる。

４　指導計画（総時数２１時間）

次	主な学習活動・内容	時数	資料・準備
一 見通し 計画 目的意識	１　運動会について知る。 (1)　昨年の運動会のＤＶＤを見る。 (2)　運動会の日時や場所について知る。 (3)　赤白の組分けを知る。 (4)　出場種目などについて知る。 (5)　運動会までの学習計画を作る。 (6)　運動会の目標を考える。	４	・ＤＶＤ ・写真 ・イラスト ・組分け表 ・プログラム
二 準備 制作	２　必要な道具などを作る。 (1)　ポスターを作る。 (2)　ダンスで使う道具を作る。 (3)　万国旗を作る。 (4)　応援グッズを作る。 (5)　家族に招待状を作る。 (6)　家族以外の相手に招待状を作る。	７ 本時 （６／７）	・画用紙，色画用紙など ・ペン，色鉛筆，クレヨン，はさみ，のり，両面テープなど ・うちわ，リボン，シールなど
三 実践	３　運動会の練習に参加する。 (1) 全体練習に参加する。 (2) 予行練習に参加する。	８	・練習計画ボード ・応援グッズ ・ボンボン
四 反省 振り返り	４　運動会を振り返る。 (1)　運動会のＤＶＤを見て，振り返る。 (2)　運動会で頑張ったことや楽しかったことなどを発表する。 (3)　思い出の絵を描く。	２	・ＤＶＤ ・写真 ・画用紙，クレヨン，絵の具など

５　本時の学習（１０／２１）

(1)　全体目標

招待状に必要な内容（期日，場所，出場種目など）について話し合い，招待状を作成し，渡す練習をすることができる。

(2)　個人目標

A児（男）	・　招待状に必要な内容（期日，場所，頑張る種目など）について考えて発表し，招待状に書くことができる。 ・　「運動会に来てください。」などの言葉を言いながら，保護者役の教師に作った招待状を渡すことができる。
B児（女）	・　学習計画表を手掛かりにしながら運動会の期日を書いたり，頑張る種目を書いたりして，招待状を作ることができる。 ・　「運動会に来てください。」などの言葉を言いながら，保護者役の教師に作った招待状を渡すことができる。
C児（女）	・　教師と一緒に運動会の期日を確認して数字シールを貼ったり，頑張る種目名を言いながら絵カードを貼ったりして，招待状を作ることができる。 ・　教師の言葉掛けを受けて，「運動会に来てください。」などの言葉を言いながら，保護者役の教師に作った招待状を渡すことができる。
D児（女）	・　招待状の見本と手順書を手掛かりにしながら，一人で招待状を完成させることができる。 ・　提示されたカードの中から自分で選んだ言葉を言いながら，保護者役の教師に作った招待状を渡すことができる。
E児（女）	・　マッチングしながら文字シールや数字シールを貼ったり，絵カードを見て頑張る種目名を言ったりしながら招待状を作ることができる。 ・　教師の言葉掛けを受けて，保護者役の教師に作った招待状を渡すことができる。

(3)　指導及び支援に当たって

児童たちは前時までに，昨年度のＤＶＤを見たり，イラスト付きの学習計画表や出場種目表を作成したりすることである程度運動会への見通しをもち，万国旗やポスター，ダンスで使うボンボンなどを作る活動を通して，運動会への期待感も高まってきている。

そこで，本時では，これまでの学習を手掛かりにしながら自分の家族への招待状を作成する。家族に招待状を作ることで運動会についての認識を深めるとともに，家族が運動会の応援に来てくれるという期待感から，運動会への意欲が更に高まっていくと考える。

導入では，学習計画表を活用して前時までを振り返り，作った応援グッズや万国旗を提示して頑張りを称賛することで，本時の学習への意欲を高められるようにしたい。

展開では，教師が作った招待状の見本を提示しながら招待状に書く内容（日時，場所，出場種目など）を確認していく。その際，見本は穴埋めにすることで，児童が学習計画表や出場種目表を手掛かりにしながら考え，発表し，数字や文字を書いたりシールを貼ったりするなど，児童の主体的な活動を引き出していきたい。

そして，招待状を作成する場面では，主に文字を書いたりなぞったりする児童，主に数字や文字のマッチングをしたり，絵カードを貼ったりする児童など，個に応じたものにし，なるべく一人で作成できるようにする。早く終わった児童は裏面にイラストを描いたりシールを貼ったりして飾り付けをするように事前に言葉掛けをすることで，時間いっぱい活動できるようにする。また，完成した招待状を渡す練習をすることで家族に渡すことを意識できるようにし，運動会への期待感を更に高められるようにしたい。

学習の振り返りでは，完成した招待状を友達に見せながら，頑張ったことや工夫したことを実態に応じた方法で発表できるようにする。頑張りを十分に称賛することで満足感や達成感を得られるようにする。さらに，次時では家族以外の好きな相手に招待状を作ることを伝え，次時への意欲と見通しをもてるようにしたい。

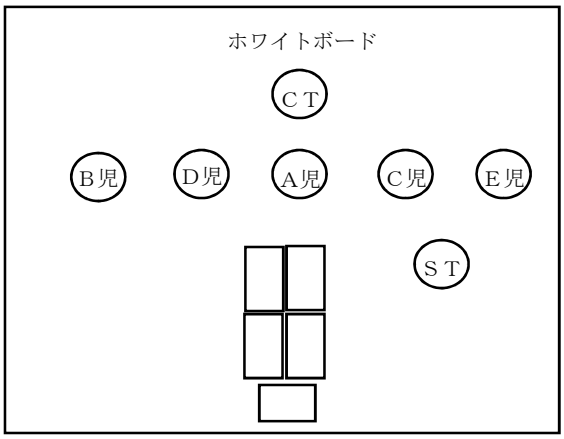
（4） 実際

時間	学習活動	指導上の留意点					キャリア教育の観点
		A児	B児	D児	C児	E児	
導入 (10 分)	1　始めの挨拶をする。 2　前時までの学習を振り返る。 3　本時の学習について知る。 うんどうかいのしょうたいじょうをつくろう。	・　良い姿勢をするように言葉掛けをし，学習の始まりを意識することができるようにする。 ・　学習計画表に着目できるように言葉掛けをして，児童が自分で気付いたり，考えたりすることができるようにする。 ・　前時までに作った万国旗や応援グッズを提示し，これまでの頑張りを称賛することで，本時への意欲を高められるようにする。 ・　本時の学習内容をホワイトボードに提示し，教師も児童と一緒に読むことで，本時の学習内容に見通しをもつことができるようにする。 ・　他校の友達からもらった招待状を提示することで，招待状のイメージをつかむことができるようにするとともに，招待状をもらった喜びを思い出すことができるようにする。 ・　渡す相手（家族）の写真カードを提示することで，学習への意欲を高められるようにする。					【挨拶・清潔・身だしなみ場に応じた言動】 【様々な情報への関心　情報収集と活用】
展開 (25 分)	4　招待状の作り方を確認する。 (1)　内容の確認 ・　期日，場所，出場種目等 (2)　作り方の流れの確認 5　招待状を作る。 (1) 材料の準備をする。 (2)「しょうたいじょう」と書く。 (3) 宛名を書く。 (4) 期日と場所を書く。 (5) 出場種目又は頑張ることを書く。 (6) 飾りを付ける。	・　見本に着目するように言葉掛けをすることで，見本を手掛かりにしながら，招待状に必要な内容（期日，場所，出場種目または頑張る種目など）について考えられるようにする。 ・　見本の期日や場所の内容は空欄にしておき，学習計画表や出場種目表を手掛かりにしながら児童が考えて発表したり，記入したりすることができるようにする。 ・　全員に必要な大まかな流れを確認し，個別に必要な内容については個別の手順書を見ながら確認する。 ・　椅子を移動させたら材料を自分で取りに行くことができるように，台紙とペン，シールなど，個別に必要な物はトレイにまとめて準備しておく。 ・　飾りのシールやスタンプは好きな物を選択できるように，作業台に置いておく。 ・単語をなぞり書きできるように台紙を準備しておく。なぞらなくても書ける文字は空欄にしたり，視写ができるようにしたりして，国語の学習の成果を生かせるようにする。 ・書く姿勢や筆記用具の持ち方に気を付けて書けるように言葉掛けをする。		・文章で招待状を書けるように台紙を準備する。	・文字はマッチングできるようにシールを準備する。 ・頑張ることは，教師と一緒に絵カードを見ながら種目名を言い，枠の中に貼ることができるようにする。		【様々な情報への関心　情報収集と活用】 【人とのかかわり自己理解・他者理解】 【意思表現】 【夢や希望】 【集団参加，協力・共同】

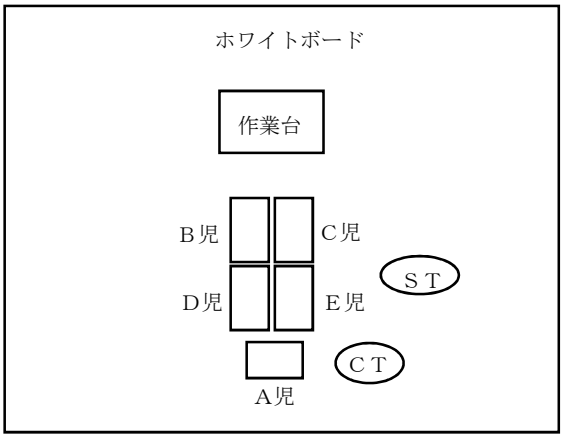
		・「お母さんはどんな物がすき？」などの会話をしながら作ることで，渡す相手が喜ぶような飾りを工夫できるようにする。 ・友達の作業に着目できるように働き掛けるなど，友達の頑張りを認める場面を設定するようにする。 ・作業行程を細かく書いた手順書を渡し，自分で確認しながら作業ができるようにする。 ・事前に「丁寧に書こうね。」と言葉掛けを行うことで，丁寧に書くことを意識できるようにする。 ・時間いっぱい取り組めるように，終わりの時間を伝えておく。 ・できていることを称賛することで意欲を高め，一つの作業に長く取り組めるようにする。 ・作業に飽きてきたら，招待状の内容を教師と一緒にリズムよく言うなどして，気分転換を図る。 ・意欲的に制作に取り組めるように，好きな色や形のシールを準備する。 ・途中で落ち着かなくなり，席を離れたときは，自分で戻って来るまで待つようにする。時間が掛かるときは，様子を見ながら言葉掛けをしたり好きな物を提示したりして着席を促す。 ・　ＣＴはＡ，Ｄ，Ｅ児を，ＳＴはＢ，Ｅ児を中心に指導に当たる。 ・　道具や材料の貸し借りの場面を設定し，教師が「かして。」「どうぞ。」「ちょっとまってね。」などのモデルを示し，やり取りができるようにする。	
	6　招待状を渡す練習をする。	・　「応援に来てください。」など，一言添えて渡すことができるように保護者役のＳＴに渡す練習をする。ＣＴが手本を見せてから練習をすることで，どのように渡せば良いかを理解できるようにする。	【人とのかかわり自己理解･他者理解】 【意思表現】
終末 （10 分）	7　本時の学習を振り返る。	・　頑張ったことや工夫したことなどを発表することで，一人一人の頑張りを具体的に称賛し，達成感を味わえるようにする。	【意思表現】 【やりがい】
	8　次時の学習内容の確認をする。	・　学習計画表の本時の欄にはなまるシールを貼ることで本時の学習が終わったことが視覚的に分かるようにするとともに，次時の学習に意識を向けられるようにする。 ・　学習計画表に注目するように言葉掛けをし，次時は，家族以外の相手に招待状を作ることを伝え，次時への見通しがもてるようにする。	【人とのかかわり自己理解･他者理解】 【様々な情報への関心　情報収集と活用】
	9　終わりの挨拶をする。	・　良い姿勢ができるように言葉掛けをし，学習の終わりを意識できるようにする。	【挨拶･清潔･身だしなみ場に応じた言動】

(5) 場の設定

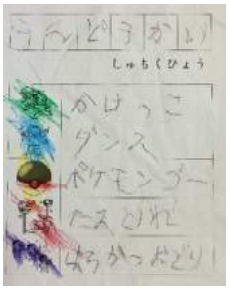
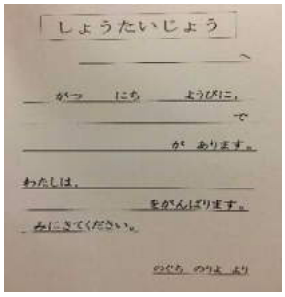
ア 話し合う場面



イ 制作する場面



(6) 教材・教具

学習計画表	出場種目表	招待状の見本
		
これまでの学習を振り返り，自分たちの頑張りを確かめたり，本時や次時の学習を確認したりするときに用いる。	招待状に出場種目を書く際に，手掛かりとして用いる。	招待状に書く内容について話し合う際の手掛かりとして活用する。

(7) 評価

ア 全体評価

・ 招待状に必要な内容（期日，場所，出場種目など）について話し合い，招待状を作成し，渡す練習をすることができたか。

イ 個人評価

児童	個人目標	評価
Ａ児 (男)	・ 招待状に必要な内容（期日，場所，頑張る種目など）について考えて発表し，招待状に書くことができたか。 ・ 「運動会に来てください。」などの言葉を言いながら，保護者役の教師に作った招待状を渡すことができたか。	
Ｂ児 (女)	・ 学習計画表を手掛かりにしながら運動会の期日を書いたり，頑張る種目を書いたりして，招待状を作ることができたか。 ・ 「運動会に来てください。」などの言葉を言いながら，保護者役の教師に作った招待状を渡すことができたか。	
Ｃ児 (女)	・ 教師と一緒に運動会の期日を確認して数字シールを貼ったり，頑張る種目名を言いながら絵カードを貼ったりして，招待状を作ることができたか。 ・ 教師の言葉掛けを受けて，「運動会に来てください。」などの言葉を言いながら，保護者役の教師に作った招待状を渡すことができたか。	
Ｄ児 (女)	・ 招待状の見本と手順書を手掛かりにしながら，一人で招待状を完成させることができたか。 ・ 提示されたカードの中から自分で選んだ言葉を言いながら，保護者役の教師に作った招待状を渡すことができたか。	
Ｅ児 (女)	・ マッチングしながら文字シールや数字シールを貼ったり，絵カードを見て頑張る種目名を言ったりしながら招待状を作ることができたか。 ・ 教師の言葉掛けを受けて，保護者役の教師に作った招待状を渡すことができたか。	

◎：十分達成できた　○：ほぼ達成できた　△：達成できなかった

＜授業研究及び研究協議記録＞

1　授業研究

⑴　授業反省

「運動会を頑張ろう」という単元で，一か月間学習に取り組んできた。これまで，運動会のグッズやポスターなどを作って気分を盛り上げてきた。

当初は招待状を家族に出そうということで計画していたが，「おかあさん」に向けて招待状を出すということに限定した。相手を一人に決めたことで，児童が伝えたい気持ちや書きたいことが明確になった。

研究テーマ「自分のことは自分で」を意識して，自分で道具を取りに行くことや自分の道具を片付ける」ことに取り組んできたが，繰り返し取り組む中でできるようになってきている。

単元を通して「友達と頑張りを認め合う」ということをねらいとして取り組んできた。本時の授業の中で，他の児童が励ましながら待っていたり，落ち着かず離席した児童を黙って待っていたりする姿が見られたことから，ねらいを達成できたと感じる。

⑵　グループ討議・発表

- 実態に応じた教材を準備し，タイミングよく提示することで，児童の集中力が高まっていた。
- 実態に応じた言葉掛けや教材の工夫がされていた。
- 招待状を渡す練習の場面で母親の顔写真をお面にして使用したことで，自分が作った招待状を渡すイメージをもつことができていた。
- 板書について，一つ一つの項目は分かりやすかったが，全体的な流れが分かりにくかった。
- お互いを認め合う姿があり，温かい関係だった。

⑶　全体協議

〈保護者との連携〉

- 招待状を渡す練習をしたことを連絡帳で伝え，渡す時の児童の様子を教えてもらうようにしている。自分が招待状を渡した結果，応援に来てもらえたという達成感につなげていきたい。

〈授業中教室の外に児童が出た時の対応〉

- 外に出る理由を観察し，教師間が連携をとりながら臨機応変に対応する。

〈場の設定について〉

- 話を聞く場面と手紙を書く場面で机や椅子の並べ方を変えていたことで，児童の集中力は高まっていたが，机と椅子の距離や導線などは今後検討が必要である。
- 学習の流れが一目で分かるような板書ができれば，児童の活動の助けになるのではないか。
- 残り時間の示し方等，時間の伝え方については今後も工夫が必要である。

⑷　指導助言

授業の中で児童が積極的に活動できるポイントとして，「問う」，「見通しをもたせる」，「イメージをもたせる」，「個に応じた準備」，「自己選択・自己決定」が挙げられる。教師の支援を減らして自分の力で達成させたい。「自分のことを自分でできる」ための支援とは，与えるだけの支援ではなく，ぎりぎりのところで，これがあればできるという支援を，実態に応じて変えていきながら，教師が共感的に語り，お互いの頑張りを認める言葉掛けが大事である。

2　研究協議

協議の柱：『自分のことは自分で』できるための生活単元学習

⑴　グループ討議・発表

・　授業の中で選ぶ活動を設定する，支援を減らす，児童ができるのを待つなどを，実態に応じてどこまで自分でできるのか，どれだけ支援が必要なのかを見極めることが必要である。
・　自己肯定感・自尊感情を育む。
・　低学年の児童が高学年の児童の行動に憧れの気持ちをもつことが向上心につながる。
・　視覚化，実態に応じたルールの設定，スモールステップなど，自分でやることを明確にしながら活動に取り組む。
・　学校全体で見守り，複数の教員で共通理解をして働き掛けることで，それぞれの成長に気付き，お互いを認め合う存在になっていく。
・　重度・重複障害の児童においては，将来的な姿を見据えての実態把握が必要である。
・　保護者や関係機関との連携，地域との連携を通して，多くの経験が大事である。

⑵　全体協議

・　できることで自信が高まり，認められていることを実感し，そのことで人を認めることができる。
・　中学部（中学校）との連携をとりながら，中学校段階を見通した指導を目指したい。
・　障害の特性をしっかり見極めて実態を把握する必要がある。

⑶　指導助言

ア　自己理解，他者理解

児童が自分のことを自分のこととして捉えられているかなど，自己理解，他者理解をどのような段階であるかを整理していく。

イ　生活単元学習として

生活上の望ましい習慣・態度の形成を図り，実際の生活を踏まえた上で，自己理解・他者理解をどのように学ばせていくか。

ウ　他者を意識するためのポイント

子供との対等な関係や優秀な友達としての関係を築くことが大切である。

小学部の実践における成果と課題

1　成果

・　別冊資料集の活用については，一回目の授業検証で，お互いの意見交換をしたことで活用方法が分かり，二回目の授業でより活用されていた。
・　個人目標を立てる時に一番活用されていたのは「年間指導計画」だったが，それぞれの視点から児童の姿を見ることで，具体的な目標を立てることができた。また，改善点や継続指導についても具体的な姿をイメージして考えることができた。

2　課題

・　アセスメントシートとチェックリストを本時の目標に生かすことが難しく，また，重複障害の児童の実態に合ったものではなかった。

中学部

「カラオケと空港に行ったよ」

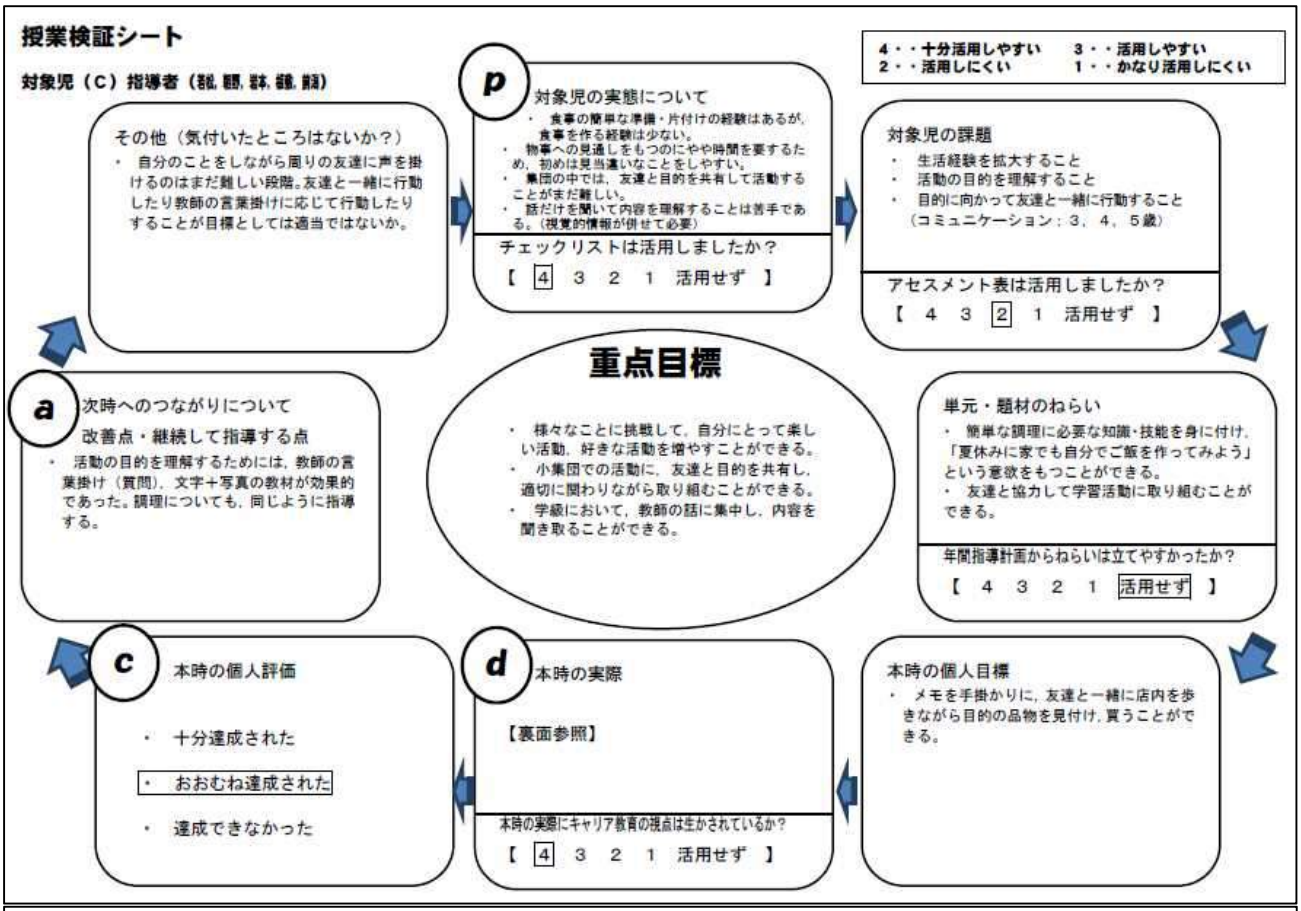
１回目の検証授業

単元名「夏のくらし」

授業者：若松，朝野，岩本，板敷，前潟

対象生徒：C

１　授業検証シートと指導略案



１　単元・題材名　「夏のくらし」　（７月１５日実施分）

２　単元の全体目標
- 簡単な調理に必要な知識・技能を身に付け，「夏休みに自分でご飯を作ってみよう」という意欲をもつことができる。
- 友達と協力して学習活動に取り組むことができる。

３　本時の全体目標
- メモを手掛かりに，同じ班の友達と協力して目的の品物を買うことができる。

４　本時の個人目標
- メモを手掛かりに，友達と一緒に店内を歩きながら目的の品物を見付け，買うことができる。

５　本時の実際

時間	学習活動	指導上の留意点	キャリア教育の視点
導入	1　はじめのあいさつをする。【10:35】 2　本時の学習を確認する。 「タイヨーに買い物に行こう」 →７月１９日の調理に必要な材料を買うため。 3　本時の目標を知る。 メモを見ながら友達と協力して買い物をしよう。 【バス移動　10:40～11:05】	・玄関前集合し，班ごとに整列する。 ・単元の学習計画表やイラスト，写真を使って，買い物学習の目的を説明する。 ・班で整列させたり，「○班は何を買いますか」と質問したりすることで，「本時は誰と何をする時間なのか」を理解することができるようにする。 ・各班の会計係に財布を渡す。 ・各班のリーダーに買い物メモを渡す。 ・校外学習における注意点を話すことで，友達と一緒に安全に行動することができるようにする。	人とのかかわり 自己理解・他者理解 集団参加，協力・共同 挨拶・清潔・身だしなみ 場に応じた言動

授業者が授業立案時に，対象生徒Ｃの重点目標を踏まえて検証シートを作成し，授業前に担当教師で事前打ち合わせや確認を行った。授業後に同じ担当教師で授業研究を行い，別冊資料集（チェックリスト，アセスメント，単元の年間指導計画，キャリア教育）の活用状況を振り返りながら本時の評価，次時へのつながり，その他について話し合い，記入を行った。

２　授業の実際

対象生徒Ｃの重点目標である「友達との関わり」や中学部の研究のキーワードである「仲間と一緒に」を考え，実際の授業では友達と一緒に活動する場面を取り入れた。見て分かるメモを準備したり教師の言葉掛けを手掛かりにしたりすることで，購入するものが分かり，食材を見付け，買い物をする姿が見られた（**写真１**）。

写真１

３　授業研究　（〇　良かった点，△　気になる点，☆　改善点）

計三つの授業と検証シートと略案を用いて，チェックリスト等の活用について検討した。

チェックリストの活用について

〇　関連する項目を係がピックアップしていたため使いやすかった。

〇　（算数・数学のチェックリスト項目を見たときに）国語のように解説があると分かりやすい。

△　別冊資料集に掲載されているチェックリスト項目と年間指導計画の関連項目が対応していない。

△　授業づくりにおいては，個別の指導計画にある生徒の課題や重点目標を基に授業をしたので，改めて見返す必要を感じなかった。

☆　指導計画に掲載されていないチェック項目も参照する。

アセスメント表の活用について

〇　コミュニケーション面で活用できる点も多い。

〇　検証シートで活用され，「課題」で〇才〇か月と客観的だった。「～なのは，～だから」と説明できる。

△　授業づくりのレベルでは使用しにくい。

☆　重点目標などの個別の指導計画を立てるときに使用するのが良い。

年間指導計画の活用について

〇　小中高の一覧表があって他学部とのつながりが分かった。

〇　なぜこの学習をするのか？本時の目標は何かをみんなで話し合い，一つに絞り込むことができた。

△　学年の生徒自体の学習経験，対象，課題から単元を設定したので，年間指導計画の目標はそのまま活用しなかった。

△　年間指導計画の資料と，実際の授業のつながりが気になった。

キャリア教育の視点

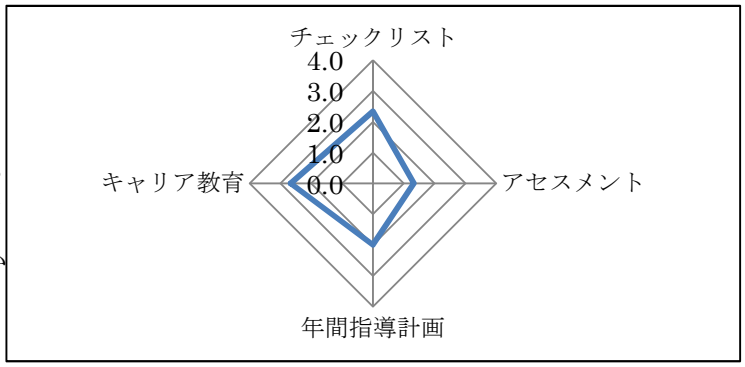
〇　キャリア教育の視点を見て，指導案に反映させることで，キャリア教育の意識が高まって良い。

△　文字が小さくて見にくい。

△　キャリア教育をメインとするのではなく，教師がキャリア教育の視点をもって授業を行うことが大切であると感じた。

＜まとめ＞

・　別冊資料集の活用度が比較的低かった。授業立案時に，別冊資料集をどのような目的で，どの場面で活用することができるかを意識しながら取り組んでいきたい。



別冊資料集の活用度（中学部）

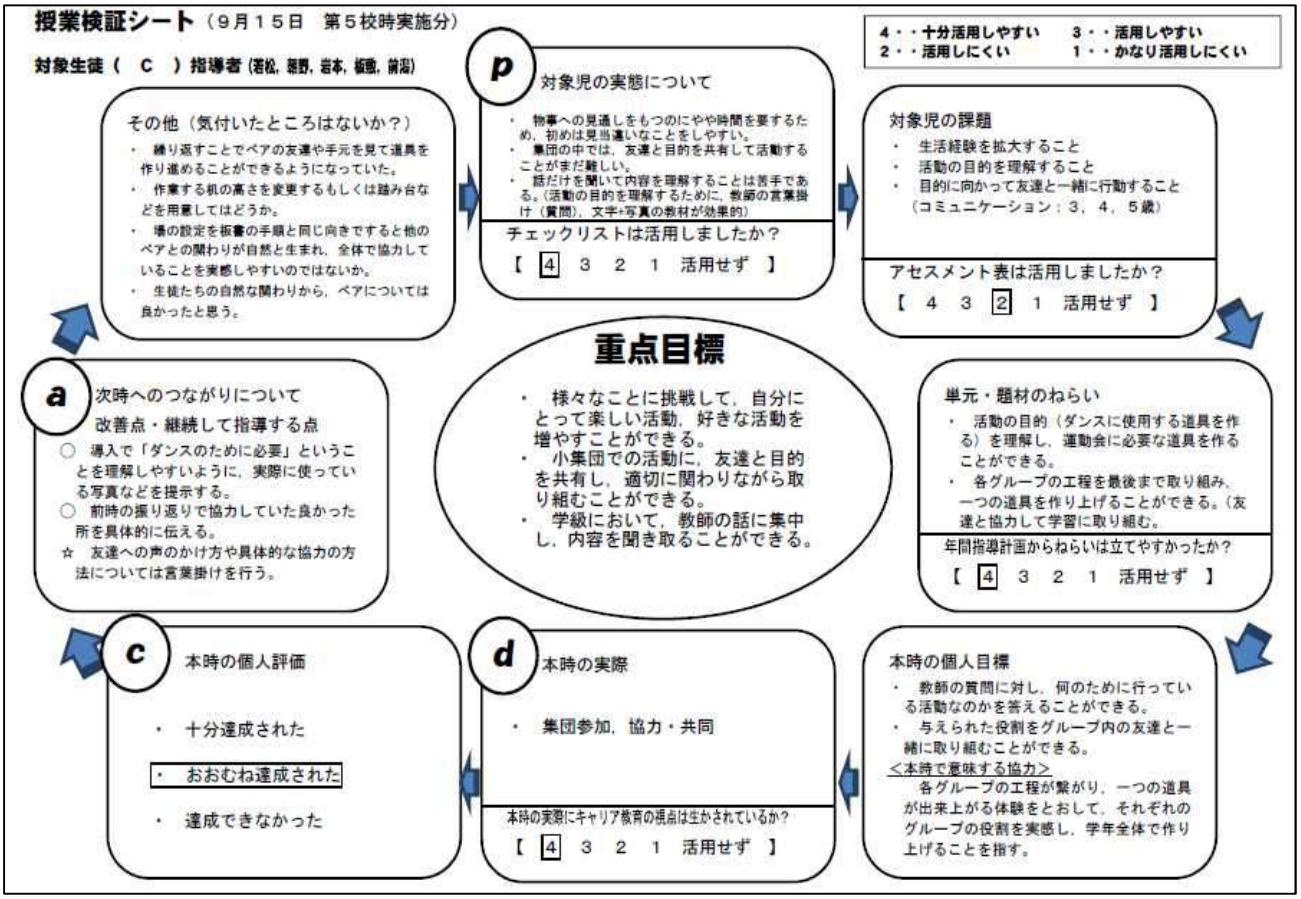
２回目の検証授業

単元名「運動会」

授業者：若松，朝野，岩本，板敷，前潟

対象生徒：C

１　授業検証シートと指導略案



１　単元・題材名　「運動会」　（９月１５日　第５校時実施分）

２　単元の全体目標
- 活動の目的（ダンスに使用する道具を作る）を理解し，運動会に必要な道具を作ることができる。
- 各グループの工程を最後まで取り組み，一つの道具を作り上げることができる。（友達と協力して学習に取り組む。

３　本時の全体目標
- 活動の目的を理解することができる。
- 取り組む工程（役割）を理解し，グループ内の友達と一緒に道具を作ることができる。

４　本時の個人目標
- 教師の質問に対し，何のために行っている活動なのかを答えることができる。
- 与えられた役割をグループ内の友達と一緒に取り組むことができる。

＜本時で意味する協力＞
各グループの工程が繋がり，一つの道具が出来上がる体験をとおして，それぞれのグループの役割を実感し，学年全体で作り上げることを指す。

５　本時の実際

時間	学習活動	指導上の留意点	キャリア教育の視点
導入	１　初めのあいさつをする。（１組） ２　道具作成の必要性に気付く。 ダンスに必要な道具を作りたい	・ 各グループで座るように，座る場所を写真で示す。 ・ カレンダーで行事を確認したり，現在の保体や体力つくりの学習内容を思い出したりする発問を行う。 ・ 完成した道具を見せる。	
	３　取り組むメンバーや各グループの内容（工程）について簡単に知る。	・ 手順に沿って，各グループが取り組む内容を示す。	

対象生徒については，１回目の検証と同じとした。１回目同様，授業者が授業立案時に検証シートを作成し，授業前に担当教師で事前打ち合わせを行った。前回の取組もあったので，生徒の実態や様子を踏まえて本時の目標や支援方法について話し合うことができた。授業後に授業研究を行い，生徒の様子から次時につなげる学習の進め方や支援方法について具体的に意見が出された。

２　授業の実際

実際の授業場面では，ダンスの手具作りを行った。友達とペアとなり繰り返し活動を行うことで作り方を覚えることができた。友達の言葉掛けや様子を手掛かりに，一緒に数を数えたり道具を用意したりと協力して手具を作る姿が見られた（**写真２**）。

写真２

３　授業研究　（○　良かった点，△　気になる点，☆　改善点）

計三つの授業と検証シートと略案を用いて，チェックリスト等の活用について検討した。

チェックリストの活用について

○　現段階での到達度を知ることができる。
○　目標設定する際に有効だった。（対象生徒も同じであったため）
△　全体のチェックリストやアセスメント表を把握しておかなければならない点に難しさを感じる。
△　必ずしも日々の授業で活用するべきものではないのでは？

アセスメント表の活用について

○　現段階での到達度を知ることができる。
△　授業づくりのレベルでは使いづらい。アセスメントの活用がどの学年も２となっている。
△　必ずしも日々の授業で活用するべきものではないのでは？

年間指導計画の活用について

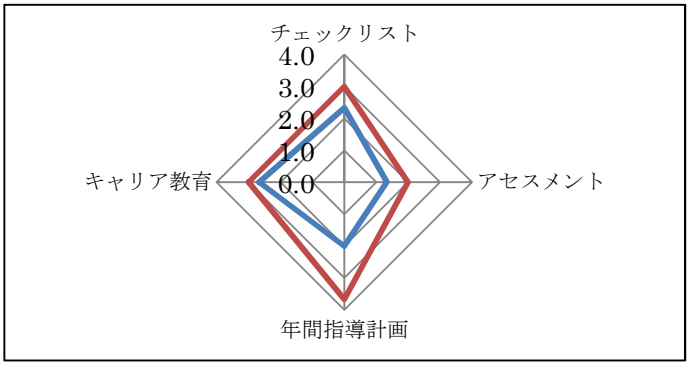
○　目標や指導内容を考える上で，参考になった。
○　運動会などの行事生単は目標がはっきりしているので，活用しやすい。
△　目標設定に幅があるため，目指すところがぶれる。
△　現状の計画に入っていない単元をどうするか。
☆　招待状，プログラムなどの作成を単元指導計画に挿入する。

キャリア教育の視点

○　話し合い（シートのＰのところ）のときに，どの視点を柱とするか，その捉え方を共通理解することができた。
△　キャリア教育で示された視点で，年間指導計画上に外されたような視点をどのように取り入れていくのか。
△　キャリア教育の視点を指導案に書くことで，いろいろな視点があることに気付くのは良いが，どこがメインなのかが分かりにくくなるというデメリットもある。
☆　キャリア教育の視点を年間指導計画に入れることで教師自身が知ることができるのでは？
☆　キャリア教育の視点，重点目標や単元題材目標に関連するところのみを記載すれば良いのでは？

＜まとめ＞

・　単元は異なるが，７月と９月の２回検証シートを活用したことで，pdca サイクル，特に c(チェック)から a（アクション）の部分を意識しながら授業に取り組むことができた。



別冊資料集の活用度（中学部）

３回目の検証授業（中学部　生活単元学習　公開授業）

生活単元学習指導案

平成２８年１０月１４日金曜日　　２校時
中学部１～３年　男子１４人，女子８人　計２２人
場所　管理棟　視聴覚室
指導者　岩本真由美（ＣＴ），川村雄一郎他中学部全職員（ＳＴ）

１　単元名　「働く生活Ⅱ（校内実習をしよう）」

２　単元について

(1)　単元設定の理由

＜生徒の実態＞

１学期の「働く生活Ⅰ（職場体験をしよう）」の単元では，中学部１年生から３年生までの生徒全員で一般企業及び福祉施設等の職場を実際に見学した。生徒たちは間近に従業員や施設利用者等が働く姿を見て，質問をする中で「いろいろな仕事がある。」，「自分もやってみたい。」，「働くって大変。」，「長い時間働くので，びっくりした。」など，働くことの楽しさだけでなく，厳しさなどを感じた生徒も多く見られ，少しずつ働く生活へのイメージを膨らませることができている。一方で，これまでの校内実習への取り組みでは，１年生は初めて経験するために実習への具体的なイメージがもてず，興味・関心のない作業に消極的だったり，働く場面での言葉遣いや態度，友達との関わり方，体力など多くの面で未熟さが見られたりする。また，２年生は１年時の経験から大まかな見通しをもち，働くことへの興味・関心や作業への積極性などは少しずつ高まりつつあるが，働く場面での状況に応じた言葉遣いや態度，関わり方などについてはまだ不十分な面が見られる。そして，３年生は１・２年時の経験からある程度の見通しをもち，１・２年生に比べると進んで作業に取り組み，集中して働くことができつつあるが，働く場面でのリーダーシップの発揮や自分の役割を自覚し，主体的に行動したり，友達に進んで協力し，相互に関わり合ったりすることなどについてはまだ不十分な面が見られる。

＜単元の意義・価値＞

以上のような実態を踏まえて，２学期，本単元「働く生活Ⅱ（校内実習をしよう）」を設定する。本校中学部における校内実習では，学部を実際の事業所等に近い環境にし，模擬会社の各支店社員として生徒が四日間集中して作業に取り組む体験をすることで，働くことへの興味・関心を高めたり，働く楽しさ・厳しさなどを体感したりすることができるようにする。また，その中で働く際の決まりや注意を守ること，働く場面に合った望ましい言葉遣いや態度，報告・連絡・相談の仕方，友達との協力の仕方等を学んだり，働く場面で自分の課題に気付いたりしながら，今後の学校・家庭生活に身に付けたことを生かしていくことができると考える。

＜ねらい＞

そこで，まず，校内実習の意義や目的，学習計画等について知ったり，実習日誌の作成等の必要な準備を各支店でしたりするなどの事前学習を通して，実習への見通しや意欲を高めながら，生徒が実習に取り組むことができるようにする。そして，実習終了後は振り返りや反省等の事後学習を通して，校内実習に参加して身に付けたことや今後身に付けていきたいことなど働く上で必要な知識や技能，望ましい態度に気付いたり，今後の学校生活や家庭生活に生かしていこうとする気持ちをもったりすることができるようにする。さらに，「実習がんばろう会」や「実習反省会」の準備・片付けをしたり，自分の目標や反省を積極的に発表したりすることを通して，友達と一緒に協力したり，自分の役割に主体的に取り組んだりすることができるようになると考える。

＜指導観＞

具体的には，昨年度の学習の様子や各支店の写真，仕事内容等をビデオや写真を用いて視覚的に提示し，校内実習への興味・関心を高め，実習への期待感を高めるようにする。また，組織図や実習日誌を用いて自分の支店やメンバー，勤務時間，仕事内容等を確認し，実習への見通しをもつことができるようにする。２・３年生には，昨年度の日誌や目標・反省カードを提示したり，１年生には作業学習の様子を振り返らせたりして，実習の目標や評価を担当教師と一緒に確認し，自分で決定できるようにし，目標達成に向けて意欲的に取り組んだり，自分に必要な課題を見付けるなどの反省をしたりできるようにする。校内実習の前後には，「実習がんばろう会」や「実習反省会」を設定し，会の準備・片付けを友達と協力して行ったり，自分の支店や目標，反省を発表したり，友達の発表を聞いたりする活動を通して，友達同士で励まし合ったり，お互いを認め合ったり，客観的な意見や助言を出し合ったりする態度も育てたい。学習の際は，挨拶や返事，丁寧な言葉遣い，適切な関わり方，報告・連絡・相談など働く際の決まりやマナー，望ましい習慣，態度を自然に意識できるように，担当教師が率先して模範を示したり，掲示物で日常的に生徒が確認したりできるようにする。

＜展望＞

以上のような学習を通して，元気のよい挨拶や返事，質問，報告等ができたり，最後まで目標達成に向けて見通しや意欲をもって仕事に取り組んだりしながら，今後の販売活動等で働く喜びや達成感を知るとともに，自分の課題に気付き，課題を解決するために必要な知識や技能を身に付け，望ましい自己を実現するための意欲につながっていくのではないかと考える。その中で，自分への理解を深め，自分や友達の頑張りを認め合うことで，よりよい社会集団への一員として相互に意識し合い，今後も努力し合っていくことができるような態度を育むことができると考える。

⑵　生徒の実態

３人についてはＣＴが担当する支店の中から，障害の状態や発達段階，学年，性別等を考慮し，決定した。

観点 / 生徒	働く生活に関する興味・関心，意欲，態度	働く生活に関する社会性・対人関係，コミュニケーション	働く生活に関する知識・技能（決まり，身だしなみ，準備・片付け，作業等）	これまでの学習に関する状態像（言語・数量等の理解度，見通し，参加態度等）
Ａ（１年，女）	・職場見学の事前学習では身の回りの職業に興味・関心があり，２０種類以上の職業を発表することができた。 ・将来，給食を作る調理員になりたい夢があり，料理番組などに興味がある。 ・働くために今からどんなことが必要であるかについては，今から学習していく必要がある。	・自分がやりたい気持ちを抑えられず，情緒が不安定になることがある。自分でも気持ちを落ち着かせようとする言動は見られる。 ・興味のあることは色々な教師に進んで話し掛けることができ，友達にも，慣れてくると話し掛けることができる。 ・挨拶やお礼を言うことができるが，気分のムラで言わないときもある。 ・サンゴの箸置き作りを友達と協力して行っている。	・決まりを守ることは分かるが，情緒が不安定なときは，守らないこともある。 ・身だしなみは，髪の毛を整えることができる。 ・準備や片付けは，作業に取り掛かろうとする気持ちを高めるために時間が必要であり，言葉掛けが必要である。 ・アクリルたわしの編み方を覚えて編んだり，サンゴの箸置きを作ったりできるが，細かい部分は教師の確認が必要である。	・小学校１年生程度の漢字混じりの文章を書くことができる。 ・会話で自分の気持ちを伝えたり，相手の意見を聞いたりすることはできる。 ・時間の計算や繰り上がり・繰り下がりのある２桁の足し算，引き算をすることができる。 ・数量や時間を手掛かりにどの程度行ったら終わりかが見えると，意欲が高まりやすい。 ・療育手帳Ｂ１
Ｂ（２年，男）	・職場見学では教師の言葉掛けを聞いたり，指差しの方向を大まかに見たりして，働いている人を見ることができた。 ・機関車トーマスや新幹線など，乗り物への興味・関心がある。 ・働くことへの興味・関心は薄いが，繰り返し取り組む作業では，気持ちが乗っているときには「やった。できた。」と言って喜ぶことがある。 ・身に付いたことや見通しがもてることには自分から行動することができる。	・知っている教師や友達には自分から手を伸ばすなどして関わることができる。 ・教室の掃除のときに，友達や教師の言葉掛けを聞いたり，一部支援を受けたりしながら，少しずつ取り組んでいく。 ・友達や教師が挨拶やお礼をするのを聞いて，自分のタイミングで「お願いします。」や「ありがとうございました。」と言うことができる。 ・教師や友達と同じ空間で一緒に，作業に取り組むことができる。	・決まりの意味理解は難しく，教師の支援が必要である。 ・衣服の着脱や身だしなみは，教師の一部支援や確認が必要である。 ・物を持って運んだり，ごみをチリ箱に捨てたりするなど簡単な作業準備や片付けは周りの動きを見たり，教師の言葉掛けを聞いたりしてできる。 ・紙粘土を両手でこねたり，ビーズを１つずつ通したりできる。常に教師の言葉掛けや一部支援が必要である。	・自分の名前を聞いて返事をしたり，友達や教師の名前の一部や身の回りの簡単な単語を言ったりすることができる。 ・１～２語文程度の簡単な指示理解や意思表示ができる。 ・教師と一緒に１から５程度の数字を声に出して数えることができる。 ・教師の言葉掛けを聞いたり，指差しを見たりして大まかな場所にシールを貼ることができる。 ・療育手帳Ａ１
Ｃ（３年，女）	・職場見学では事業所の方に自分から質問をするなど，意欲的に学ぼうとする姿勢が見られた。 ・将来は郷里で，美容師をしたいという夢がある。 ・生徒会役員としての仕事（募金活動の呼び掛けやお礼状書き，月目標の呼び掛け）など与えられた仕事や依頼された仕事を最後までやすることができる。 ・賃金についての学習がこれから必要である。	・集団の場や人前では緊張や恥ずかしさで行動が遅くなることがある。 ・他者と積極的に関われるが，状況に応じた話し方（敬語等）に課題があり，適宜指導・支援が必要である。会話の進め方がちぐはぐになったり，会話場面の無視があったりするので，教師が会話の筋道を付けると会話が成立してくる。 ・刺し子の作業は共同で作業できており，友達に「お願いします。」などの言葉掛けをすることができる。	・生活リズムは確立しており，時間を意識して行動できる。 ・着替えは自分で速やかにできるが，身だしなみに課題があり，練習中である。（髪の手入れ・鏡での確認等） ・仕事の見通しが立ち，手順が理解できていると自分から準備や後始末ができる。 ・刺し子の作業は基本的な縫い方を覚えて，最後まで取り組む。 ・班長として毎回，始まり・終わりの進行を務めている。	・数量等の理解度は小学校３年生終了程度で，分数・小数の計算，筆算もできる。 ・金銭に関しては千円程度の買い物ができる。 ・言語に関しての理解は小学校２～３年生程度で，漢字の読み書き，会話についても同等と考えられる。漢字はこれまで２年生を学習していたが，自分から３年生の漢字を学習したいと言うなど学習意欲もある。 ・自信がないと，答えないことがある。 ・療育手帳Ｂ２

3　単元目標

(1)　全体目標

ア　校内実習の事前学習を通して，実習について知り，実習に向けて必要な準備をしたり，目標を立てたりして，実習に対する見通しをもち，意欲を高めることができる。

イ　校内実習の事後学習を通して，実習で身に付いたことを確認したり，反省をしたりして，働く上で必要な知識や技能，望ましい態度について気付き，今後の学校生活や家庭生活に生かしていこうとする意欲を高めることができる。

ウ　「実習がんばろう会」や「実習反省会」の準備・片付け，発表などを通して，友達と一緒に協力して活動したり，自分の役割に主体的に取り組んだりすることができる。

(2)　個人目標

生　徒	個　人　目　標
A（1年，女）	ア　自分の支店の仕事内容や実習の流れ，決まりなどが分かり，実習へ見通しをもち，目標を教師と一緒に考えて決定し，実習への意欲をもつことができる。 イ　写真などを見て実習したことを思い出したり，反省を教師と一緒に考えたりして，働くことへの気持ちを高めることができる。 ウ　自分の支店の友達と一緒に協力して準備や片付け，発表練習をしたり，他支店の友達の前で落ち着いて発表したりすることができる。
B（2年，男）	ア　自分の支店名や仕事内容を知り，教師と一緒に目標を複数から選んで決定し，教師の言葉掛けを聞いて，実習への見通しや興味・関心をもつことができる。 イ　写真などを見て実習したことを思い出したり，反省を教師と一緒に考えたりして，働くことへの興味・関心をもつことができる。 ウ　自分の支店の友達や教師と一緒に協力して準備や片付け，発表練習をしたり，他支店の友達の前で教師の支援を受けながら，発表したりすることができる。
C（3年，女）	ア　自分の支店の仕事内容や実習の流れ，決まり，班長としての役割などが分かり，実習への見通しをもち，目標を自分で考えて決定し，実習への意欲を高めることができる。 イ　写真などを見て実習したことを思い出したり，反省を自分で考えたりして，働くことへの気持ちを高めることができる。 ウ　自分の支店友達と一緒に協力して進んで準備や片付け，発表練習をしたり，他支店の友達の前で自信をもって発表したりすることができる。

4　指導計画（総時数１２時間）

次	主な学習活動・内容	時数（学習形態）	資料・準備
一	1　実習について知る。 ・　実習の目的や期間，「たいよう株式会社」や各支店，メンバー，学習計画などについて知る。 ・　昨年度の実習の様子などについてビデオや写真で思い出したり，知ったりする。	1（本時1／1） （全体）	・　パソコン ・　プロジェクター ・　ビデオや写真 ・　学習計画表 ・　組織図
二	2　実習に向けての準備をする。 ・　実習日誌の作成をする。 ・　各支店の勤務時間や仕事内容，準備や決まり，気を付けることなどを確かめ，必要な準備をする。 3　校内実習に向けての目標を立てる。 ・　支店ごとの目標や自分の目標を考えて，決定する。	5 （各支店）	・　実習日誌 ・　タイムカード ・　広幅用紙 ・　目標カード
三	4　「実習がんばろう会」の準備をする。 ・　各支店で，「実習がんばろう会」に向けての発表準備や発表練習をする。 5　「実習がんばろう会」をする。 ・　支店ごとに，個人目標を発表する。	1 （準備：各支店） 2 （会：全体）	・　パソコン ・　プロジェクター ・　書画カメラ ・　各支店目標 ・　目標カード
校内実習（作業学習） 11月8日（火）～11日（金）			
四	6　「実習反省会」の準備をする。 ・　各支店で，「実習反省会」に向けての発表準備や練習をする。 7　「実習反省会（Ⅰ・Ⅱ部）」をする。 ・　Ⅰ部ではビデオなどで実習を振り返る。 ・　Ⅰ部では支店ごとに，個人反省を発表する。 ・　Ⅱ部ではボーナス券を使って，飲み物や少量のお菓子などと交換し，会食をして働く喜びを分かち合う。	1 （準備：各支店） 2 （会：全体）	・　パソコン ・　プロジェクター ・　書画カメラ ・　反省カード ・　ボーナス券 ・　飲み物や少量のお菓子

５　本時の学習（１／１２）

⑴　全体目標

ア　ビデオや学習計画表等を手掛かりに校内実習までの見通しをもち，各支店名や実習内容を知ることができる。

イ　自分の支店の友達と協力して校内実習の組織図を作成し，校内実習への意欲を高めることができる。

⑵　個人目標

生　徒	個　人　目　標
Ａ（１年，女）	ア　自分から教師の顔を見て話を聞いたり，ビデオや学習計画表，組織図を見たりして，自分の支店名やメンバーを覚えることができる。 イ　自分の支店の友達の動きを見たり，友達の言葉掛けを聞いたりしながら，一緒に組織図作りに取り組み，写真カードを貼るなどして完成することができる。
Ｂ（２年，男）	ア　教師の言葉掛けを聞いて，教師やビデオ，学習計画表，組織図に視線を向けたり，自分の顔写真をもとに自分の支店名やメンバーを言ったりすることができる。 イ　教師の言葉掛けを聞いて，自分の支店の友達と一緒に組織図作りに取り組み，顔写真カードを貼ることができる。
Ｃ（３年，女）	ア　正しい姿勢で教師に注目して集中して話を聞いたり，ビデオ視聴や組織図作成をしたりして自分の支店名やメンバー，仕事内容などが分かり，教師や友達に説明することができる。 イ　自分の支店の友達に進んで言葉掛けをしながら，協力して活動し，組織図作りに取り組み，完成することができる。

⑶　指導及び支援に当たって

＜対象生徒＞

・　Ａ（１年，女）については，学習計画表や写真，ビデオ等に注目できるように担当ＳＴを中心に適宜言葉掛けをし，視覚的理解を促すとともに，校内実習への興味・関心を高め，自分から学習に取り組めるようにする。

・　Ｂ（２年，男）については，担当ＳＴを中心に学習全般を通して言葉掛けや一部支援をしながら，支店の友達と一緒に興味・関心をもって学習に取り組むことができるようにする。

・　Ｃ（３年，女）については，支店の班長（リーダー）としての役割を自覚できるように担当ＳＴを中心に適宜言葉掛けをし，進んで支店の友達で言葉掛けをしたり，協力して活動したりして，学習に取り組むことができるようにする。

・　対象生徒については，ＣＴは発問や指示等を行うことで，理解や活動への参加等を促していく。ＳＴは場の形態に応じて，各場担当のＳＴが見守りや支援を適宜行うことで，理解や活動への参加を促していく。

＜全体生徒＞

・　事前にスライドで座席図を提示しておくことで，各自イスを準備し，学級ごとに分かれて速やかに着席し，学習の始まりを意識できるようにする。

・　各支店での活動がしやすいように，事前に視聴覚室内の隅の方に長机を６個用意し，生徒が速やかに机を移動できるようにしておく。

・　教師の話や友達の発表の聞き方，自分の発表・返事の仕方，活動の際の決まりなどの注意事項を事前に示す。

・　昨年度までのビデオや今年度の学習についてのスライドを見たり，写真付きの学習計画表を提示したり，組織図を作成したりすることを通して，学習についての見通しをもつことができるようにする。

・　ビデオやスライドを視聴する際は，生徒が注目できるように適宜言葉掛けし，注目することで実習への理解を促すようにする。

・　支店ごとの活動の際には，ＣＴの指示を聞いて，各支店のメンバー同士がお互いに協力し合って行動する場面を設定し，自分たちの力だけ（一部生徒を除く）で課題に取り組むことができるかを体験できるようにする。その際，ＳＴ（一部ＳＴを除く）は活動を見守り，担当生徒の様子を観察しておき，良い点，課題点を適宜ＣＴに伝える。また，できたことは称賛し，実習への意欲が高まるようにする。

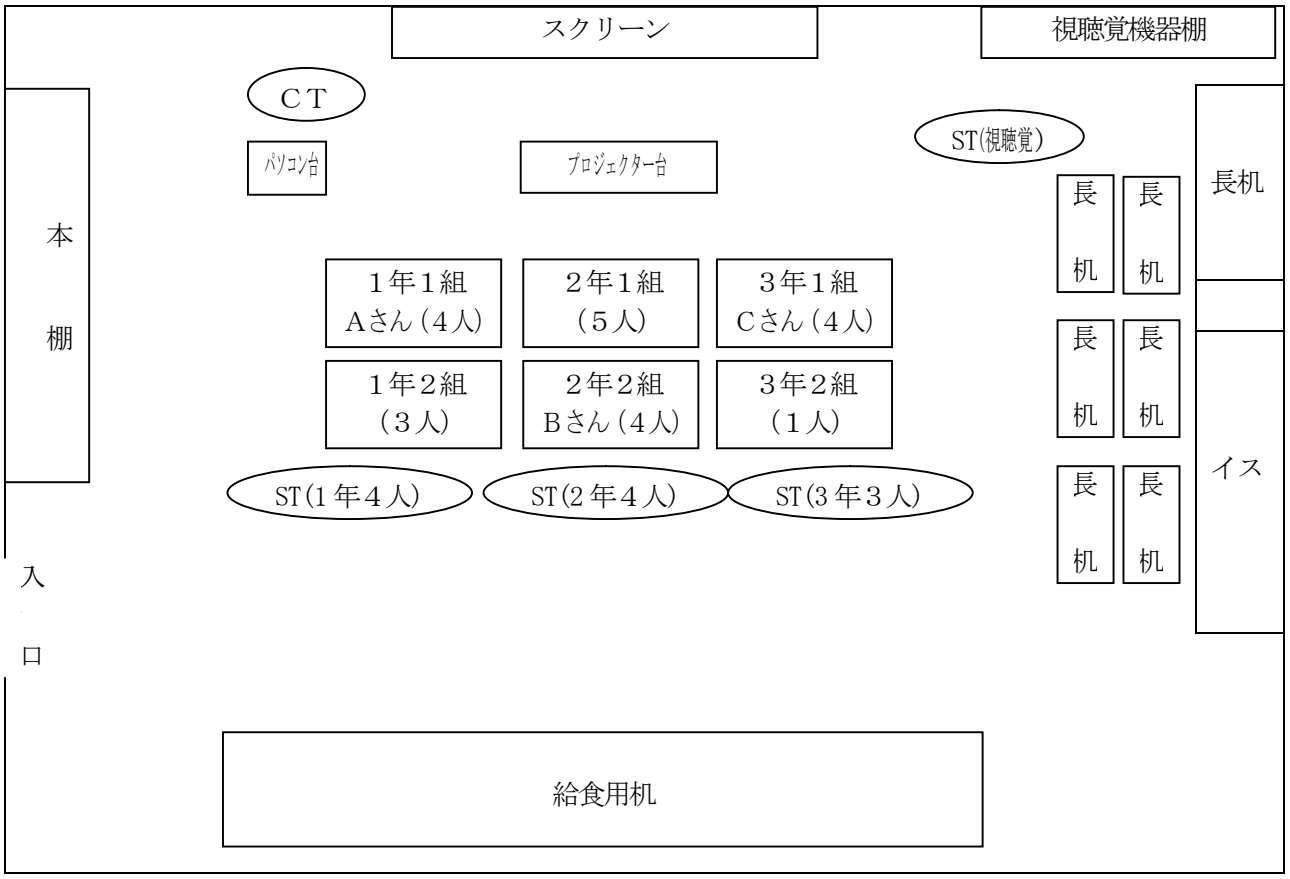
・　ビデオやプロジェクターの操作，掲示物準備，各支店での活動の際の必要に応じての支援，担当生徒に関する姿勢や話を聞く態度などの言葉掛けなど教師間で役割分担を明確にする。

(4) 実際

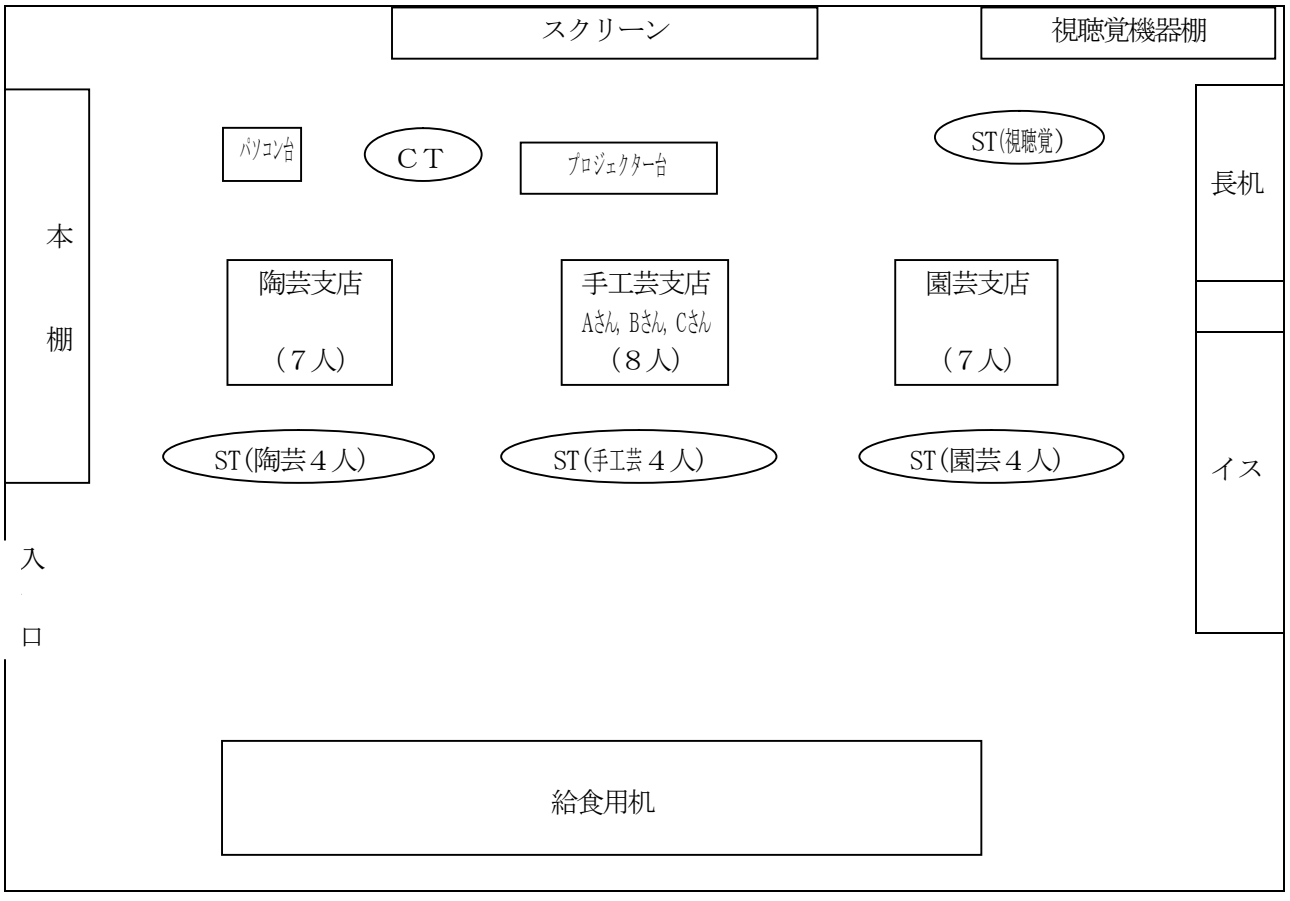
時間	学習活動	指導上の留意点	キャリア教育の視点
開始 直前		・ 事前にスライドで座席図を示し，各自イスを準備し，学級ごとに分かれて着席できるように言葉掛けをし，学習の始まりを意識できるようにする。	
導入 (5 分)	1 始めの挨拶をする。 2 本時の学習について知る。 実習について知ろう ～組織図を作ろう～	・ 1では，姿勢を正して，元気よく挨拶することができるように言葉掛けする。 ・ 2では，本時の学習内容や学習の流れを事前にホワイトボードにも提示しておき，学習への見通しをもつことができるようにする。	【挨拶・清潔・身だしなみ，場に応じた言動】 【進路計画】 【様々の情報への関心，情報収集と活用】
展開 (40 分)	3 実習の目的や実習期間，学習計画などについて知る。 4 昨年度の実習の様子をビデオで視聴する。 5 自分たちの支店名や仕事場所，仕事内容などを知る。 (1) 「たいよう株式会社」の仕組みを知る。 (2) 各支店の仕事内容，メンバーなどを知る。 6 支店ごとに集合し，組織図（メンバー表）を作成する。 (1) 活動場所を作る。 (2) 組織図（メンバー表）を作る。 (3) 出来上がった組織図（メンバー表）を全員で確認する。 7 実習の決まりや約束ごとを知る。 ☆ 元気のよいあいさつをする。 ☆ 時間いっぱい取り組む。 ☆ すすんで仕事をする。 ☆ みんなで協力する。	・ 3及び4では，実習の目的や実習期間，学習計画，通常の作業学習や職場体験の違いなどを簡潔に説明し，写真提示やビデオ視聴（5分程度）によって実習への理解を促すようにする。 ・ ビデオ視聴では，自分や先輩がどのような態度で実習に取り組んでいるかに注目できるように適宜言葉掛けをする。 ・ 6では，スライドで座席図を示し，支店ごとに長机を出して，協力して活動場所を作ったり，組織図（メンバー表）の作成をしたりするようにＣＴは指示を出し，ＳＴは担当生徒の行動観察をする。 ・ ＳＴは活動中の良い点や課題点をＣＴに伝え，活動終了後に称賛したり，励ましたりして実習への意欲を高めることができるようにする。 ・ 7では，社長（学部主事）の話を聞き，「たいよう株式会社」の社員としての自覚を高めるように，生徒と一緒に読み合わせをする。	【進路計画】 【人との関わり，自己理解・他者理解】 【習慣形成】 【夢や希望】 【働く喜び，役割の理解と働くことの意義】 【意思表現】 【集団参加，協力・共同】 【進路計画】 【意思表現】 【集団参加，協力・共同】
まとめ (5 分)	8 本時の学習を振り返り，今後の学習計画を知る。 (1) 感想発表をしたり，聞いたりする。 (2) 次時の学習内容について聞く。 9 終わりの挨拶をする。	・ 8では，生徒が頑張った点などを紹介したり，生徒が感想を発表したりして，生徒の頑張りを称賛し，満足感や達成感を高めることができるようにする。 ・ 次時の学習内容（実習日誌の作成）について知らせ，期待感を高めることができるようにする。 ・ 9では，姿勢を正して，元気よく挨拶ができるように言葉掛けする。	【進路計画】 【振り返り，肯定的な自己評価】 【意思表現】 【挨拶・清潔・身だしなみ，場に応じた言動】

(5) 場の設定

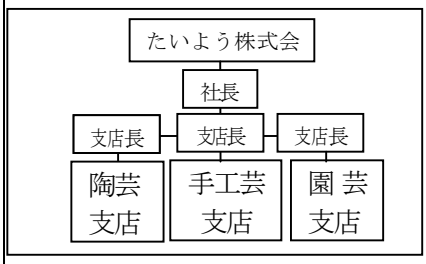
ア 学級ごとの配置図



イ 実習先（各支店）ごとの配置図



(6) 教材・教具

学習計画表（日程表）	組織図表	社　訓
月日 / 主な活動内容 / 場所 10/14 校内実習オリエンテーション 視聴覚室 10/21 実習準備① (実習日誌作り他) 各支店 10/28 実習準備② (目標を立てる他) 各支店 11/7 実習がんばろう会 視聴覚室 11/8 校内実習 各支店		たいよう株式会社　社訓 1　元気のよいあいさつをする。 2　時間いっぱい取り組む。 3　すすんで仕事をする。 4　みんなで協力する。
学習計画（日程表）を文字と写真等で表示し，学習が終わるたびに斜線を引く。	たいよう株式会社の組織図を顔写真と名前カードで表示する。	校内実習時の決まりや約束ごとを文字で表示する。

(7) 評価

ア　全体評価

(ア)　ビデオや学習計画表等を手掛かりに校内実習までの見通しをもち，各支店名や実習内容を知ることができたか。

(イ)　自分の支店の友達と協力して校内実習の組織図を作成し，校内実習への意欲を高めることができたか。

イ　個人評価

生　徒	個　人　目　標	評　価
A（1年，女）	ア　自分から教師の顔を見て話を聞いたり，ビデオや学習計画表，組織図を見たりして，自分の支店名やメンバーを覚えることができる。 イ　自分の支店の友達の動きを見たり，友達の言葉掛けを聞いたりしながら，一緒に組織図作りに取り組み，写真カードを貼るなどして完成することができる。	
B（2年，男）	ア　教師の言葉掛けを聞いて，教師やビデオ，学習計画表，組織図に視線を向けたり，自分の顔写真をもとに自分の支店名やメンバーを言ったりすることができる。 イ　教師の言葉掛けを聞いて，自分の支店の友達と一緒に組織図作りに取り組み，顔写真カードを貼ることができる。	
C（3年，女）	ア　正しい姿勢で教師に注目して集中して話を聞いたり，ビデオ視聴や組織図作成をしたりして自分の支店名やメンバー，仕事内容などが分かり，教師や友達に説明することができる。 イ　自分の支店の友達に進んで言葉掛けをしながら，協力して活動し，組織図作りに取り組み，完成することができる。	

◎：十分達成できた。　○：ほぼ達成できた。　△：達成できなかった。

＜授業研究及び研究協議記録＞

1 授業研究

⑴ 授業反省

校内実習に向けての事前学習で，見通しをもったり意欲付けをしたりすることを目標に授業を行った。今回は「見る」「聞く」活動が多くなりがちな事前学習の１回目だったので，動く活動を取り入れて工夫をした。生徒たちは，緊張した様子も見られたが，積極的な学習態度であった。対象生徒については，ST との連携もあり，落ち着いて取り組む姿が見られた。

［全体目標に対する評価］

ア　ビデオや学習計画表等を手掛かりに校内実習までの見通しをもち，各支店名や実習内容を知ることができる。◎

理由：聞く，見る，読む，発表する，分かる，自分から動くなど，学ぶ姿が見られたから。

イ　自分の支店の友達と協力して校内実習の組織図を作成し，校内実習への意欲を高めることができる。○

理由：組織図は完成しなかったものの，組織図の内容を生徒たち同士で確認し合いながら作ることができていたから。

⑵ グループ討議・発表

良かった点として，視聴覚教材の活用，生徒たちへの称賛などの言葉掛けや関わり，生徒一人一人の実態に応じた対応などが挙げられた。課題点としては，校内実習の見通しが十分であったか，組織作りの提案や教材の提示の工夫等が挙げられた。また，２・３年生が体験談を発表する機会を設けることや，「働く＝お金」だけでなく，働くことの楽しさや喜びを学ぶことができると良いという意見もあった。

⑶ 研究協議

協議の柱：『本時における学習活動の在り方』

組織図を作るときに，グループで進め方が異なっていた。組織図を作ることが評価に直結する内容だったので，進め方が異なる中で，どのように客観的評価につなげていくのか。組織図を作るに当たって，ST がどういった指導・支援ができたのか。

「組織図を作ろう」という目標を達成するためには時間が少なく，目標を達成するための指導・支援が必要であったのでは等の意見が出された。

⑷ 指導助言

指導案全般に関して，とても丁寧に書き込まれており，対象生徒の細かな実態把握を基にした指導・支援，学習活動の展開が計画されていた。授業の中では，思春期ならではの言動もあったが，ST が適切に対応するなど，CT と ST との連携がきちんとできており，授業が作り上げられていた。授業では，生徒が何をするかが分かり，困り考えながら取り組んだり，生徒の主体性，意欲を生かした発問の仕方をしたりすることが大切である。

授業研究に関しては，今回の単元（生活単元学習「働く生活」）を行う意義や授業の意図まで考えることができた充実したものであった。また，ワークショップ型の話し合いの中で，他校の先生方からの鋭い指摘や評価があり，ありがたかった。センター的機能となっている大島養護学校の取組を所属する学校に持ち帰ってほしい。

２　研究協議

協議の柱：『仲間と一緒に学習に取り組むための生活単元学習の在り方』

⑴　グループ討議・発表

特別支援学校での取組だけでなく，中学校や特別支援学級での取組事例などが発表された。「仲間と一緒に学習する」ために，領域・教科を合わせた指導，教科はもちろん学校行事など様々な学校活動全体において役割分担やグループ作り，雰囲気作り，場の設定，学習活動等を工夫していることや，生徒と教師の関わりについて意識していること，気を付けていることが挙げられた。また，支援学級から交流学級へ活動の場を広げるなど，スモールステップでの学習の積み上げを大切にしていることや友達の良さに気付くための取組を行っているなどの事例も出された。課題としては，支援学級だけでは仲間作りの幅が広がりにくいことや，不登校，集団への参加が難しい生徒への対応などが出された。

⑵　全体協議

協議の柱：『「仲間と一緒に」とはどのような姿か』

グループ討議や発表で出された意見から『「仲間と一緒に」とはどのような姿か』ということについて全体協議を行った。子ども同士の関わりに慣れていない生徒が，どのようにして「仲間と一緒に」学習を進めていくのか，教師はどういった指導・支援を行えば良いのか等について意見が出された。

⑶　指導助言

仲間をどれだけ意識して生きていくか，人との関わりが，これからの生きる力となっていく。中学部段階の生徒は，自己理解と他者理解を深める大切な時期であり，興味・関心のあるものを題材に，仲間作りを広げていく必要がある。まずは個々のつながりから学級作りにつなげていけると良い。教師は，表現方法自己選択や自己決定，意思表明の機会を設定したり，自分の発する表現が相手にどのように伝わるのかを指導したりするなど，支援を要する子供の仲間作りをどう支援するのかを考えていかなければならない。教師のポジティブな姿勢が子供たちへの一貫性・継続性のある指導・支援につながるので大切にしてほしい。今回得たヒントを明日からの授業実践に生かしていってほしい。

中学部の実践における成果と課題

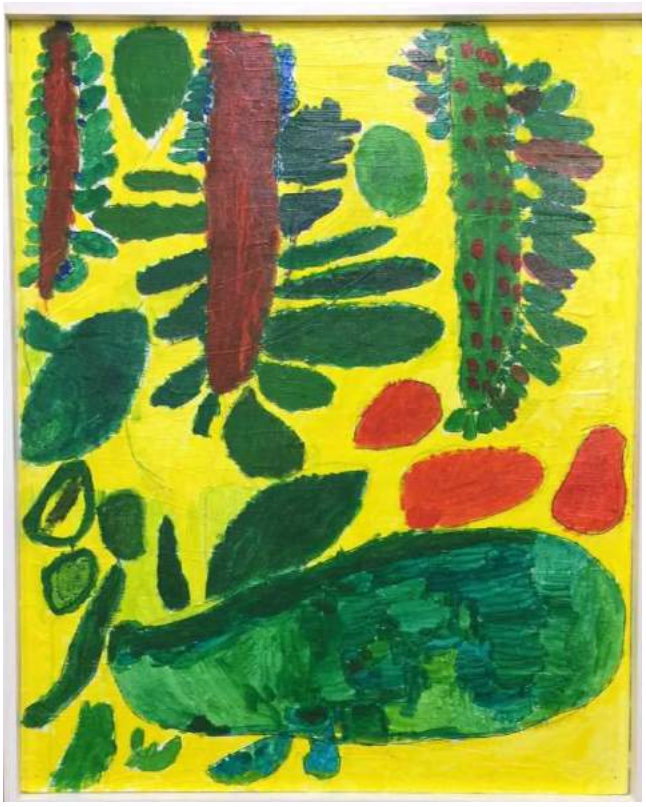
１　成果

- 別冊資料において，チェックリストやアセスメントに関しては，生徒の実態において現段階での到達度を知ることができた。年間指導計画に関しては，目標の設定がしやすかった。特に，運動会などの行事生単は目標がはっきりしているので活用しやすかった。
- 検証シートを用いることで，授業の pdca のサイクル，特にチェックからアクションの部分を意識しながら取り組むことができたので，次時の授業につなげやすかった。

２　課題

- 別冊資料集に関しては，日々の授業では活用しにくかったという意見があり，活用に至るにはチェックリスト，アセスメント，年間指導計画，キャリア教育の視点の全てにおいて改善が必要であった。

高等部



「ゴマとバッタ」

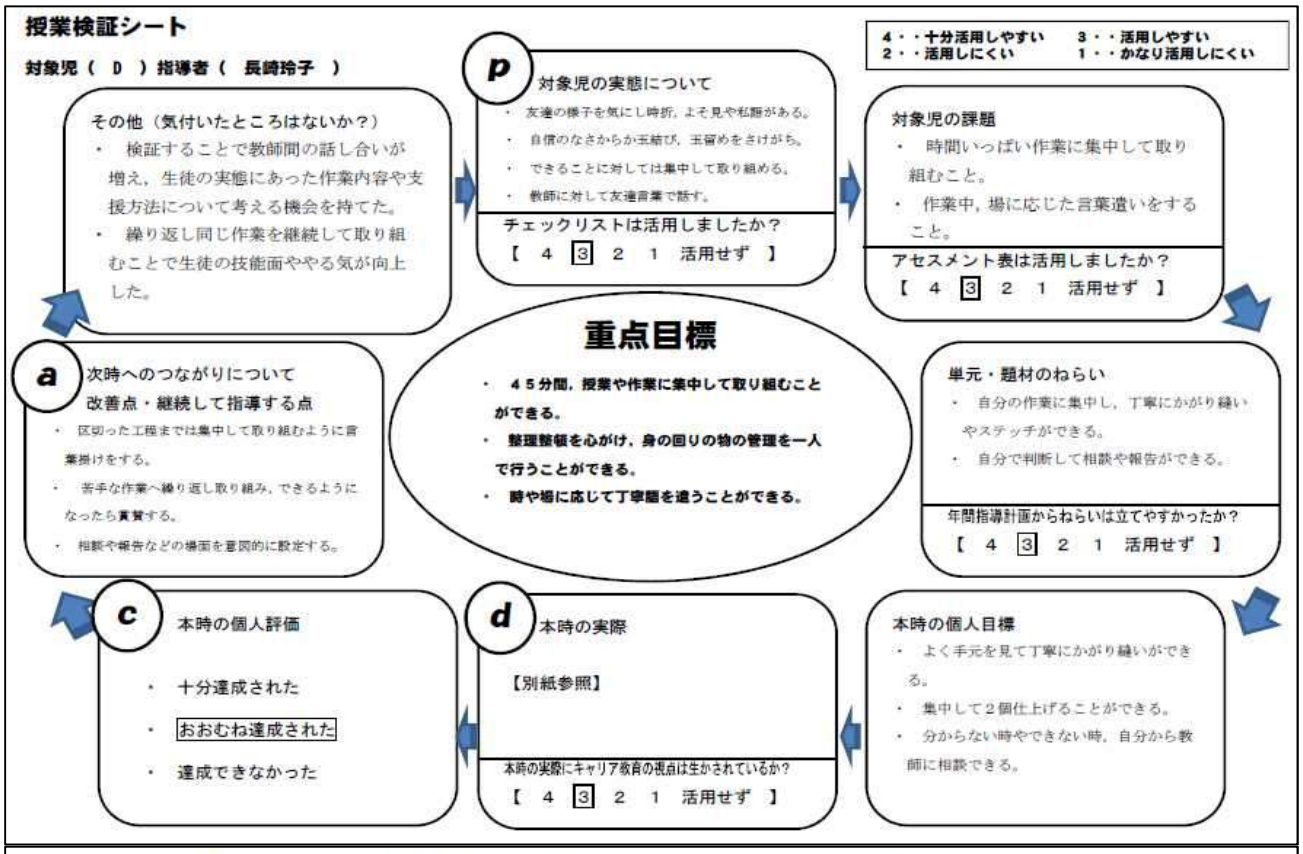
１回目の検証授業

単元名「つるし飾りを作ろう」

授業者：日髙，長崎，菊田，栗山

対象生徒：D

１　授業検証シートと指導略案



１　単元・題材名　「つるし飾りを作ろう」　（縫製班）　９／２１（月）　２校時

２　本時の全体目標

○　自分の作業を丁寧に，時間いっぱい取り組むことができる。

○　必要なときに自分から進んで報告，連絡，相談をすることができる。

３　本時の個人目標

○　縫い目の長さをそろえてかがり縫いができる。

○　周囲に気をとられずに集中して飾りを３個，仕上げることができる。

４　本時の実際

時間	学習活動	指導上の留意点	キャリア教育の視点
導入	１　始めの会をする。 （１）　出席，体調の確認をする。 （２）　役割分担の確認をする。 （３）　めあてを確認する。 丁寧に作業に取り組もう	・　姿勢と声の大きさに気を付けて進行するように班長に言葉掛けする。 ・　作業の見通しが持てるように，前時と同様の役割分担にする。 ・　目当てを意識できるように具体例を挙げて「丁寧な作業」について説明する。 ミシン班→印から逸れない。 さをり班→糸を切らない。 ろう花班→紙を破らない。 手縫い班→縫い目を小さく。	・挨拶・清潔・身だしなみ場に応じた言動 ・目標設定 ・集団参加，協力・共同
展開	２　それぞれの班に分かれて製作する。 ・ミシン班（K，M） ・さをり班（I） ・ろう花班（M，S） ・手縫い班（D，F，T，S，T） ①　材料，道具の準備をする。 ②　作業上の注意を聞く。 ③　フェルトの縁をかがり縫いする。 ④　縫い終わりに近付いたところで報告する。 （①～④の繰り返し）	・　さをり班とミシン班の場所を近くし，指示が出しやすいようにする。 ・　集団になじめない生徒については，自分で作業しやすい場所を選ぶことで，責任を持って作業を進められるようにする。 ・　対象生徒にはかがり縫いの仕方や手順について教師と確認をする。 ・　ひとつのはなびらのかがり縫いが終わるまで集中して取り組むように言葉掛けをする。	・意思表現 ・働く喜び役割の理解と働くこと

授業者が授業立案時に，対象生徒の重点目標を踏まえて検証シートを作成し，授業前に担当教師で事前打ち合わせや確認を行った。授業後に同じ担当教師で授業研究を行い，別冊資料集（チェックリスト，アセスメント，単元の年間指導計画，キャリア教育）の活用状況を振り返りながら本時の評価，次時へのつながり，その他について話し合い，記入を行った。

２　授業の実際

対象生徒の重点目標である「集中・丁寧・言葉遣い」と高等部の研究のキーワードである「主体的に判断・行動する」を考え，作業前に一つの工程が終わるまでは，集中して取り組むことを目標にした。

座席配置や作業工程を工夫したことで，決められた時間は集中できスキル面でも曲線や複雑な線を安定して縫えるようになった。また，目標を意識する姿勢も見られるようになった。（写真１）

３　授業研究　（○　良かった点，△　気になる点，☆　改善点）

五つの作業学習班の検証シートと略案を用いて，チェックリスト等の活用について検討した。

チェックリストの活用について

○　重点目標（個別の指導計画）を立てるときに活用できた。
○　職業生活に関するチェックリストを次回は活用していきたい。
☆　情報としてあったほうがよいが，情報量が多く，活用しにくく，見やすさの点に欠けた。
☆　評価の観点で「活用しやすい・しにくい」から「参考になった」にすると評価が上がるのではないかと思う。
☆　あゆみ（通知表）の目標との関連付けをすると活用しやすくなると考えた。

アセスメント表の活用について

△　課題と合わせてアセスメント表のどこを見ればよいのか分からない。生徒との接し方を見直すとき，活用できるように思えた。
△　アセスメント表の活用の仕方が分からなかった。
☆　乳幼児期と小・中・高の実態を踏まえてコミ二ケーションレベルで活用したら良いと思う。
☆　発達段階が７歳程度以上の人に活用可能か疑問である。活用できるかどうかは，対象者の発達段階によると考えられる。

年間指導計画の活用について

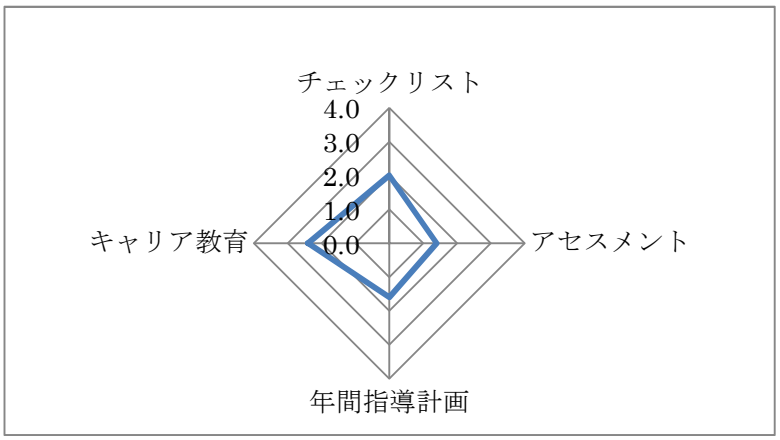
○　対象生徒の習熟度段階を，一覧表を見ることで確認でき，活用することができた。
△　作業全体の指導計画と作業班毎の指導計画がリンクしていないので活用が難しい。
△　活用しやすいようにたたき台を作ることで活用を図った。
☆　年間で植える野菜や花を固定すると見通しをもって年間指導計画を活用しやすい。
☆　教育課程の指導計画と併せて見ていく必要がある。目標設定の根拠など参考になる。

キャリア教育の視点

○　指導内容とキャリア教育の項目との関連を調べるのに活用した。
○　指導内容抽出表は活用しづらいがキャリア教育の視点を入れながら指導していくことは非常に大切だということを感じた。
△　年間指導計画と併せて見る必要があった。
☆　資料集に関しては，字が小さくて読みづらかった。
☆　年間指導計画と一緒に表記してあると分かりやすいのではないかと感じた。
☆　研究のまとめ（資料２）を見て，指導内容抽出表を使うとキャリア教育の内容が掴めた。

＜まとめ＞

アセスメントと年間指導計画の数値が低い結果になった。これは「活用の仕方が分からない」「活用しにくい」「系統性が無い」等のことが理由と思われる。次回は，活用の仕方や各シート項目の取り扱いを学部で共通理解し，別冊資料集が充実するように進めていきたい。



別冊資料集の活用度１回目検証結果（高等部）

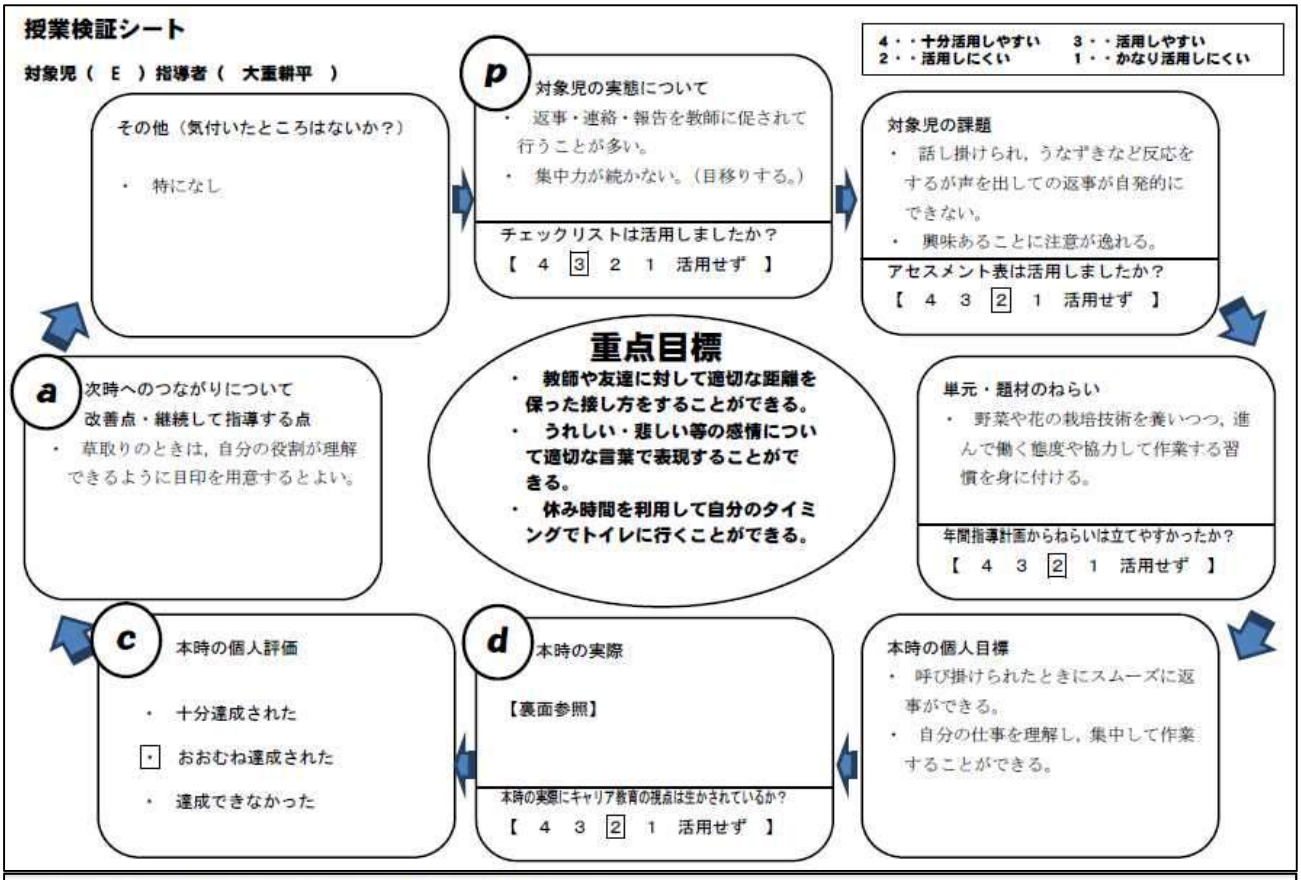
２回目の検証授業

単元名「秋まき野菜の栽培」

授業者：大重，平，真辺，里

対象生徒：E

１　授業検証シートと指導略案



１　単元・題材名　「　秋まき野菜の栽培　」

２　本時の全体目標
○　先生の指示を聞き，集中して丁寧に作業に取り組むことができる。

３　本時の個人目標
○　一つの作業が終わったら「終わりました。」と報告をすることができる。
○　自分の役割に集中して作業に取り組むことができる。

４　本時の実際

時間	学習活動	指導上の留意点	キャリア教育の視点
導入	１　はじめのあいさつ ２　ねらいの確認 「ていねいな作業をしよう」 ３　園芸班の心得復唱	・本時で何をすべきか理解できるようにホワイトボードを利用して，「ねらい」「ながれ」について確認する。	「情報活用能力」
展開	４　作業準備 ・A班（畑の撤去） ・B班（草取り） ５　作業開始	・必要な道具を思い出せるように「ジェスチャー」や「写真」を使って促す。 ・集中して作業できるように役割を明確に与える。	「人間関係形成能力」 「意志決定能力」

１回目の検証と同じ方法で，授業者が授業立案時に検証シートを作成し，授業前に担当教師で事前打ち合わせを行った。２回目の取組もあったので，生徒の実態や様子を踏まえて本時の目標や支援方法について話し合うことができた。授業後に授業研究を行い，生徒の様子から次時につなげる学習の進め方や支援方法について具体的に意見が出された。

２　授業の実際

「秋まき野菜の栽培」で職員とペアになり決められた場所と時間の「草取り」を担当した。場所はフープで円を決め，時間はタイマーを活用し視覚的な情報を提供したことで円滑に作業を進めることができた。また作業工程に見通しがもて「終わりました」の報告を伝えようとする姿勢も見られた。（写真２）

３　授業研究　（○　良かった点，△　気になる点，☆　改善点）

五つの作業学習班の検証シートと略案を用いて，チェックリスト等の活用について検討した。

チェックリストの活用について

○　生活（職業生活）を参照にした。
○　実態把握のためには必要である。
△　個人差や習熟度の差があり，対象児によっては活用性が高い。
☆　手指活動や動作性が入っているとよかった。
☆　生活面が９歳以上の子供にも対応できるようなチェックリストにするとよかった。
☆　社会に対応した内容なら活用の頻度も増えた。

アセスメント表の活用について

△　細かな作業の見極めが難しい。
△　普段の作業の実態を記入した。
△　使い方が分からなかった。
△　アセスメントの社会性，コミュニケーション，運動・動作（模倣），数概念，統一性がなかった。
△　言語面が強く出ている。上手く活用できない。実態によって使えない。
☆　簡単なアセスメントで見やすければ活用率も上がる。

年間指導計画の活用について

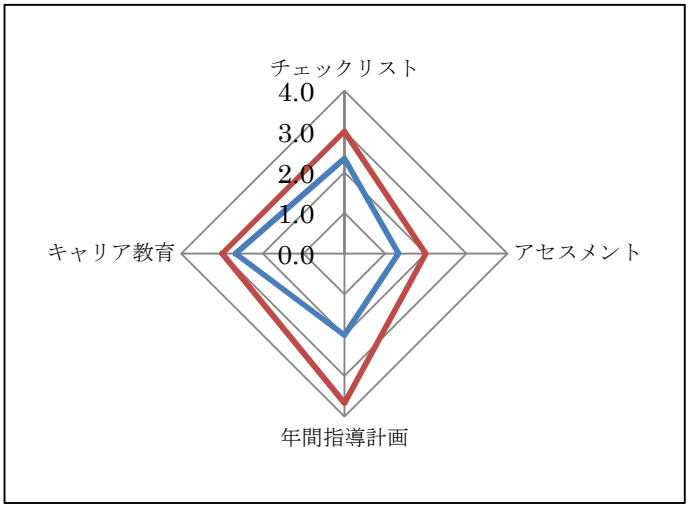
△　単元一覧から題材名の関連性が分かりづらかった。
△　別冊資料集（テーマ研）と教育課程の年間指導計画の繋がりが活用しづらかった。
☆　資料集の単元名から指導案に活用することが難しかった。

キャリア教育の視点

○　研究のまとめに書いてある課題の解決が具体的に理解できた。
☆　題材を細かくすると分かりやすいと感じた。

＜まとめ＞

・　課題であった年間指導計画とアセスメントが前回より活用された。「活用しにくい」「活用の仕方が分からない」という点で「話し合い」を行い，共通理解したことで改善されたと考える。今後もこの別冊資料集が継続して，活用されるように取り組んでいきたい。



別冊資料集の活用度２回目検証結果（高等部）

３回目の検証授業（高等部　作業学習　公開授業）

作業学習（木工）学習指導案

平成２８年１０月１４日（金）２校時
高等部木工班　本立てグループ
男子２人　女子３人　計５人
場所　木工室
指導者　小野　恭一(CT)　岩元　美紀(ST1)
朝廣　洋一(ST2)　島田　理香(ST3)

１　題材名「地域素材を生かした木工製品を作ろう」

２　題材について

(1) 題材設定の理由

＜生徒の実態＞

木工班は，１年生３人，２年生４人（うち１人は重複障害学級の女子生徒），３年生３人で構成される。木工班では生徒の実態に応じて製作する製品を選び，年間を通して「ベンチ，椅子の製作」,「お盆の製作」,「本立ての製作」等の題材に取り組んでいる。そして，働くことへの意欲を高めるとともに，機械や道具を安全に使用する力，報告・連絡・相談の習慣などの働く上で必要な知識や技能，態度を身に付けられるようにしている。

本立てグループの生徒たちは，製品作りの興味・関心が高く，意欲的に取り組むことができている。また，教師や生徒同士で,「終わりました。」,「はい，分かりました。」など，作業に必要な言葉を用いながら作業に取り組んでいる。そして，１学期の作業学習を通して，のこぎりや金づちなどの道具の正しい使い方を知り，けがをすることなく，安全に道具を使用することができている。

しかし，集中力が続かず，別の作業に興味をもってよそ見をする生徒や，持続力が弱く，作業速度が遅くなる生徒がいる。このことは，生徒にとって見通しがもちにくかったり，苦手な作業工程であったりすることによるものと考えられる。また，報告や相談のときに声が小さかったり，短い単語だけの言葉で伝えたりする様子が見られる。このことは，語彙の少なさや相手にどのように伝えてよいか分からないことなどによるものと考えられる。そして，釘を真っ直ぐに打ったり，ニスをむらなく塗ったりすることに課題のある生徒もいる。このことは道具を使いこなせていない，力加減や量を判断する能力が十分に備わっていないなどの要因が考えられる。

＜題材の意義・価値＞

このような生徒の実態を踏まえて，題材「地域素材を生かした木工製品を作ろう」を設定した。本題材は，２月のバザーに向けた本立て製作で，９月の販売活動の反省を生かして，製品の精巧さ（丁寧な作業），販売量の確保（作業速度）を意識しながら作業に取り組むことができる。本立て製作は，いくつかの作業工程に分けられ，それぞれの作業工程は明確である。そのため，見通しをもちやすく，生徒の実態に応じて得意な技能を生かした作業工程を構成することで，集中して取り組め，生徒の主体的な製品作りができる。また，流れ作業による工程間でのやり取りや，報告，確認等の場面で，コミュニケーションの課題に取り組めるものである。そして，同じ工程での継続的な作業を通して，道具の使い方やニスの塗り方を指導しやすい。さらに，地域素材として用いる奄美大島産のスダジイ材と，本場大島紬に発想を得た「木の泥染め」技法は，製品に独特の色合いを生み出し，製品価値を高められる。そして，生徒たちもこの製品に興味・関心をもっていることから，製品作りの意欲につなげることができると考える。

＜ねらい＞

そこで，本題材では本立て作りを通して，作業工程に見通しをもち，最後まで集中して作業に取り組めるようにする。また，報告・連絡・相談など，作業に必要なコミュニケーションを適切に行えるようにするとともに,道具や機械を安全に正しく扱うことができるようにしたい。そうすることで，生徒が主体的に作業学習に取り組むことをねらいたい。

＜指導観＞

具体的には，①切断，②やすり掛け，③泥染め，④洗浄，⑤穴あけ，⑥組み立て，⑦ニス塗りといった本立て製作の作業工程を設け，それぞれの工程と担当者を，写真入りで表にまとめて掲示することで見通しをもてるようにする。また，生徒の興味・関心や技能等の実態に応じて作業を分担し，継続的に同じ工程を担当することで意欲的に集中して作業に取り組めるようにする。そして，個に応じた治具を用意することで，ボール盤で正確に穴をあけたり，両手で電動ドライバーを操作してねじ留めをしたりできるようにし，一人でできた達成感を味わえるようにする。

また，作業の一部を流れ作業として構成することで，次の工程に渡すときの「ニス塗りをお願いします。」や教師への「確認をお願いします。」など，作業上必要なコミュニケーションの場面を設定する。そして，場面に応じた声の大きさや，報告や相談時に使う言葉について分

かる視覚的な情報を作業台の側に貼り，それを活用して自ら適切な表現を身に付けられるようにする。その際，生徒の気付きを大切にするため，教師の言葉掛けは最小限に留めたい。

そして，本立て製作では様々な機械を使用するため，安全には十分に注意し，生徒の実態に応じた使い方のモデリングや確認を通して，正しい扱い方を身に付けられるようにしたい。また，作業台に各工程の完成品を提示し，作業の中で良否の判断をする場面を繰り返し設定することで，作業の知識や技能も高めていきたい。

作業の全般において，一人でできたこと，完成品の良いところ，目標の達成に対して，個別に称賛することで，生徒が自信をもち，作業の意欲を高められるようにしたい。

＜展望＞

このような活動を通して，生徒が主体的に作業に取り組むことで，自ら自立と社会参加の実現に向けて，働くことへの自信や意欲を高め，仕事に責任をもったり，自分の役割を理解して仕事を進めたりすることができるようになることを期待したい。

(2) 生徒の実態

生徒（学年，性別）取り組む工程			A（１年，男）組み立て（穴あけ）	B（２年，男）切断（糸のこ）	C（２年，女）泥染め，洗浄
本題材に関する実態	興味・関心		・ 機械などの工具を使った作業に関心が高く，意欲的に取り組むことができる。	・ 初めて扱う道具には躊躇するが，使い慣れてくると意欲的に取り組むことができる。	・ 水遊びが好きで，泥に木片を付けたり，洗ったりする作業に意欲的に取り組むことができる。
	作業態度（集中力）		・ 次にやる仕事が分からないときや，作業が早く終わってしまうと，座って指示を待つ傾向があるが，好きな作業には集中して取り組むことができる。	・ ４５分間，時間いっぱい集中して取り組むことができる。	・ 短い時間で区切って休憩をはさみながら作業を進めることで，集中して取り組むことができる。
	社会性・対人関係（挨拶・言葉遣い）（報告・連絡・相談）		・ 挨拶をして入退室することができる。 ・ 言葉は不明瞭であるが挨拶や返事をすることができる。 ・ 任された作業が終わると報告することができる。 ・ 日誌記入や発表など，一人で難しいときは，「一緒に」のサインを教師に出すことができる。	・ 大きな声で挨拶をして入退室することができる。 ・ 敬語や丁寧な言葉遣いが苦手であるが，作業が終わると自ら報告をし，困ったときには相談することができる。 ・ 仕事を頼まれたときに，素直に「分かりました。」と言うことが難しいが頼まれたことはしっかり行うことができる。	・ 「お先に失礼します。」の教師の声に合わせてみんなの前で礼をすることができる。 ・ 疲れたときは「お願い」のサインを教師に出して，休息を求めることができる。
	作業能力（安全面）（体力面）（知識・理解）		・ 慎重に道具を扱うことができる。 ・ 疲れやすく椅子や床に座って作業をしようとする傾向があるが，道具が高い位置に固定されていると，立ち仕事を継続することができる。 ・ 手順を理解し，手順通りに作業を進めることができる。	・ 慎重に道具を扱うことができる。 ・ 十分な体力があって，長時間の立位の作業や，重たい荷物を運ぶことができる。 ・ 手順を理解し，手順通りに作業を進めることができる。	・ 教師との一対一で，作業を行っている。 ・ 休息をはさみながら４５分程度の軽作業をすることができる。 ・ 教師の言葉掛けを受けながら，教師と一緒に作業を進めることができる。
	技能	切断（糸のこ）	・ 教師が手を添えることで一緒に切断することができる。	・ 材料を線に沿って切断することができる。 ・ 一人で糸のこの刃を交換することができる。	・ 安全に作業を行うことが難しい。
		やすり掛け	・ 仕がりの見極めは難しいが教師の指差しで必要な箇所をやすり掛けすることができる。	・ 仕がりの見極めは難しいがやすり掛けをする箇所が分かる。	・ 教師が手を添えることで一緒にやすり掛けをすることができる。
		泥染め	・ 泥に手を入れることに抵抗感があるが，一人で材木を泥に漬けることができる。	・ 泥に手を入れることに抵抗感があるが，一人で材木を泥に漬けることができる。	・ 教師から材木を受け取って一端を泥に漬けることができる。
		洗浄	・ 泥の落ち具合を判断することが難しいが，一人で材木を水洗いすることができる。	・ 泥の落ち具合を見極め，一人で材木を水洗いすることができる。	・ 材木を持って流水で約１０秒間水洗いすることができる。
		穴あけ（ボール盤）	・ 固定治具を用いることでほぼ正確に穴をあけることができる。	・ 鉛筆で印を付けることで正確に穴をあけることができる。	・ 安全に作業を行うことが難しい。

		ねじ留め (電動ドライバー)	・ 教師が手を添えることで一緒にねじ留めをすることができる。	・ 固定治具を用いて，一人で真っすぐにねじ留めをすることができる。	・ 安全に作業を行うことが難しい。
		ニス塗り	・ ニスの量が多くなり，玉やむらなどの判断が難しいが，一人で塗ることができる。	・ ニスの量を調整し，一人で塗ることができる。	・ 教師が手を添えることで塗られていないところに，はけを当てることができる。
テーマ研究に関する実態 （チェックリスト） （主体的な作業学習）			・ 作業手順を早く覚えて作業できる。 ・ 細かな作業や丁寧さは苦手であるが，材料が大きく，粗大な手作業はできる。 ・ 興味・関心の高い作業工程を，治具を用いながら，一人で行うことができる。	・ 作業習慣が確立し，指導者なしでも一定のペースで作業を続けることができる。 ・ 素直な言葉を言うことが苦手であるが，まじめに取り組むことができる。 ・ 自分から報告や相談などを適切な言葉で行うことができる。	・ 簡単な指示や要求に応じることができる。 ・ 目と手の協応動作は確立していないが，指や手の動きを注視又は追視できる。 ・ 好きな感触や活動を取り入れ，簡単な動作を使って作業を行うことができる。
個別の指導計画における重点目標			・ 休み時間と授業時間のけじめを付けて，決められた時間内で活動に取り組むことができる。 ・ 語彙を増やし，簡単な言葉やジェスチャーで，自分の気持ちや考えを伝えることができる。	・ 指導を受けたり，説明を受けたりしている際に，素直に返事をしたり，相手の顔を見て話を聞いたりすることができる。	・ 授業で関わる担任以外の教師にも，「ねえ。」と肩をたたいて呼び掛け「お願い。」などのサインを出すことができる。

※ 下線部は，研究キーワード「主体的に判断・行動するための作業学習」から捉えた生徒に期待される姿。

生徒 （学年，性別） 取り組む工程			D （２年，女） 組み立て（ねじ留め）	E （３年，女） ニス塗り
本題材に関する実態	興味・関心		・ アマミノクロウサギのデザインを気に入っており新製品にも関心がある。	・ いろいろな作業工程に興味があり，難しいと思うものでも積極的に挑戦しようとする。
	作業態度 （集中力）		・ ４５分間，時間いっぱい集中して取り組むことができる。	・ 気が散りやすいが，関心の高い作業工程に対しては，集中して取り組むことができる。
	社会性・ 対人関係 (挨拶・言葉遣い) (報告・連絡・相談)		・ 挨拶をして入退室することができる。 ・ 任された作業が終わると，確認をしてから報告することができる。 ・ 声は小さいが，困ったときや分からないときには，自分から相談することができる。	・ 大きな声で挨拶をして入退室することができる。 ・ 言葉は不明瞭であるが，自分から「先生終わった。」と報告をしたり，「先生これ。」などと相談したりすることができる。言葉カードを用意することで適切な表現で伝えることができる。
	作業能力 （安全面） （体力面） （知識・理解）		・ 説明をしっかり聞いて糸のこを安全に正しく使うことができる。 ・ 体調不良で保健室に行くことが多くあり，十分な作業量を確保できていない。 ・ 手順を理解し，手順通りに作業を進めることができる。	・ 焼印を押すときには，手袋を装着するなど，慎重に道具を扱うことができる。 ・ 気分不良で保健室に行くことがあり，十分な作業量を確保できないことがある。 ・ 手元を見るように言葉掛けをすると，手元を見て作業をすることができる。
		切断 (糸のこ)	・ 材料を糸のこで線に沿って切断することができる。 ・ 糸のこの刃を交換するときは教師に依頼できる。	・ 教師が手を添えることで一緒に切断することができる。

	技能	やすり掛け	・ 時間は掛かるが，仕上がりが分かり，一人でやすり掛けをすることができる。	・ 仕がりの判断は難しいがやすり掛けをする箇所が分かる。
		泥染め	・ 泥に手を入れることに抵抗感があるが，一人で材木を泥に漬けることができる。	・ 泥に手を入れることに抵抗感があるが，一人で材木を泥に漬けることができる。
		洗浄	・ 泥の落ち具合を見極め，一人で材木を水洗いすることができる。	・ 泥の落ち具合を見極め，一人で材木を水洗いすることができる。
		穴あけ（ボール盤）	・ 鉛筆で印を付けることで正確に穴をあけることができる。	・ 鉛筆で印を付けることで正確に穴をあけることができる。
		ねじ留め（電動ドライバー）	・ 固定治具を用いて，一人で真っすぐにねじ留めをすることができる。	・ 教師が手を添えることで一緒にねじ留めをすることができる。
		ニス塗り	・ ニスの量を調整し，一人で塗ることができる。	・ ニスの適量を判断することが難しく，むらができたり玉ができたりすることがあるが板の目に沿って，ニスを塗ることができる。
テーマ研究に関する実態（チェックリスト）（主体的な作業学習）			・ 体力や持続力に課題があるが，細かな作業が得意である。 ・ まじめで素直に，友達と協調して作業に取り組むことができる。 ・ 自分から報告や相談などを場に応じた声の大きさで行うことができる。	・ 一人での作業は，集中力に課題があるが，積極的に作業を行うことができる。 ・ 作業の準備や片付けを一人で行うことができる。 ・ 集中して一人で正確に作業を行うことができる。
個別の指導計画における重点目標			・ 教室全体に伝わる声で挨拶や返事をすることができる。 ・ 今何をするべきか自分で考えたり，次は何をするべきか教師に尋ねたりして意欲的に活動することができる。	・ ゆっくり文字を書いたり落ち着いて話をしたりすることで，相手に自分の意思を伝えることができる。

3　題材目標

(1) 全体目標

ア　自分の作業工程に見通しをもち，最後まで集中して作業に取り組むことができる。
（作業態度及び作業習慣の形成）

イ　報告・連絡・相談等，作業に必要なコミュニケーションを適切に行うことができる。
（作業態度及び作業習慣の形成）

ウ　道具や機械を安全に正しく扱うことができる。　（作業等に必要な知識及び技能の習得）

(2) 個人目標

生徒	個人目標
A （１年，男）	**ア**　作業手順が分かり，最後まで集中して作業に取り組むことができる。 **イ**　作業が終わったときには，「終わりました。」と伝えることができる。 **ウ**　手元をよく見て，ボール盤を安全に正しく扱うことができる。
B （２年，男）	**ア**　目標の個数を意識して，最後まで集中して作業に取り組むことができる。 **イ**　言葉遣いに気を付けて，報告・連絡・相談をすることができる。 **ウ**　手元をよく見て，糸のこを安全に正しく扱うことができる。
C （２年，女）	**ア・ウ**　教師の「おしまい。」の言葉掛けを受けて，木材から手を離し，洗う作業を終えることができる。 **イ**　困ったときは，教師の肩をたたき，「お願い。」などのサインを出すことができる。
D （２年，女）	**ア**　目標の個数を意識して，最後まで集中して作業に取り組むことができる。 **イ**　声の大きさに気を付けて，報告・連絡・相談をすることができる。 **ウ**　手元をよく見て，電動ドライバーを安全に正しく扱うことができる。
E （３年，女）	**ア**　作業手順が分かり，最後まで集中して作業に取り組むことができる。 **イ**　言葉カードを見ながら，適切な言葉で報告・連絡・相談をすることができる。 **ウ**　はけに付いた余分なニスを容器の縁で落としてから，適量のニスを塗ることができる。

4　指導計画（総時数２９時間）

次	主な学習活動・内容	時数	準備等
一	1　しおかぜ市場を振り返る ・　アンケートを見て振り返る。 ・　バザーでどのような製品を売るか考え，発表する。	1	・　しおかぜ市場のアンケート
二	2　製品作り（本立て，ＣＤラック） ・　切断 ・　加工 ・　泥染め ・　洗浄 ・　組み立て ・　仕上げ 3　振り返り ・　製品の確認をする。 ・　グループでの製品作りの反省をする。	28 （本時 21/28）	・　スダジイ材 ・　泥 ・　糸のこ ・　サンドペーパー ・　治具 ・　ボール盤 ・　電動ドライバー

5　本時の学習（２２／２９）

(1) 全体目標

ア　集中して決められた個数の作業に取り組むことができる。（作業態度及び作業習慣の形成）
イ　作業が終わったときの報告や,分からないことがあるときの相談を適切に行うことができる。（作業態度及び作業習慣の形成）
ウ　道具や機械を安全に正しく扱うことができる。　（作業等に必要な知識及び技能の習得）

(2) 個人目標

生徒	個人目標
Ａ （１年，男）	**ア**　集中して，正確にボール盤で穴をあけることができる。 **イ**　一ケース分の作業が終わったときには,「終わりました。」と伝えることができる。 **ウ**　手元をよく見て，ボール盤を安全に正しく扱うことができる。
Ｂ （２年，男）	**ア**　集中して，決められた個数の木材を切断することができる。 **イ**　切断が終わったときは，言葉遣いに気を付けて，報告することができる。 **ウ**　手元をよく見て，糸のこを安全に正しく扱うことができる。
Ｃ （２年，女）	**ア・ウ**　教師の「おしまい。」の言葉掛けを受けて，木材から手を離し，洗う作業を終えることができる。

※　本時の学習では，治具の工夫で意欲的に取り組むＡ児，コミュニケーション面に課題のあるＢ児，重度重複障害のあるＣ児の３人に焦点を当てる。

(3) 指導及び支援に当たって

ア　見通しをもつために
(ｱ)　学習の流れや作業内容，作業手順等をホワイトボードに写真入りで提示することで，見通しをもって活動できるようにする。
(ｲ)　日誌の目標と反省の項目を活用して，完成目標個数を意識しながら取り組むことができるようにする。
(ｳ)　基本的にはグループで学習を進めるが，必要に応じて重複障害学級の生徒は一対一で対応して作業を進める。

イ　主体性をもたせるために
(ｱ)　生徒の得意な活動や好きな活動を生かして作業工程を分担することで，作業への意欲を高め，主体的に取り組めるようにする。
(ｲ)　治具を工夫し，安全に一人で穴開けや組み立ての作業を行うことができるようにする。
(ｳ)　材料や道具の場所を分かりやすく表示することで，自分から材料や道具を準備することができるようにする。

ウ　報告・連絡・相談を適切に行うために
(ｱ)　生徒同士又は教師に対する報告や依頼，相談等の作業上必要なコミュニケーションを意図的に設定する。
(ｲ)　場面に応じた声の大きさが分かる視覚表示や，報告や相談時に使う言葉について分かるカードを用意する。

エ　教師の関わり方について
(ｱ)　生徒の気付きを大切にするため，言葉掛けは必要最小限に留める。
(ｲ)　完成の報告を受けたときは,「きれいに穴を開けられたね。」などと完成品の良いところや目標の達成について，笑顔で称賛する。

オ　安全に作業を行うために

(ｱ)　機械や道具が安全に使用できるか，作業の始まる前と終わった後に確認を行い，安全に作業が行えるよう留意する。

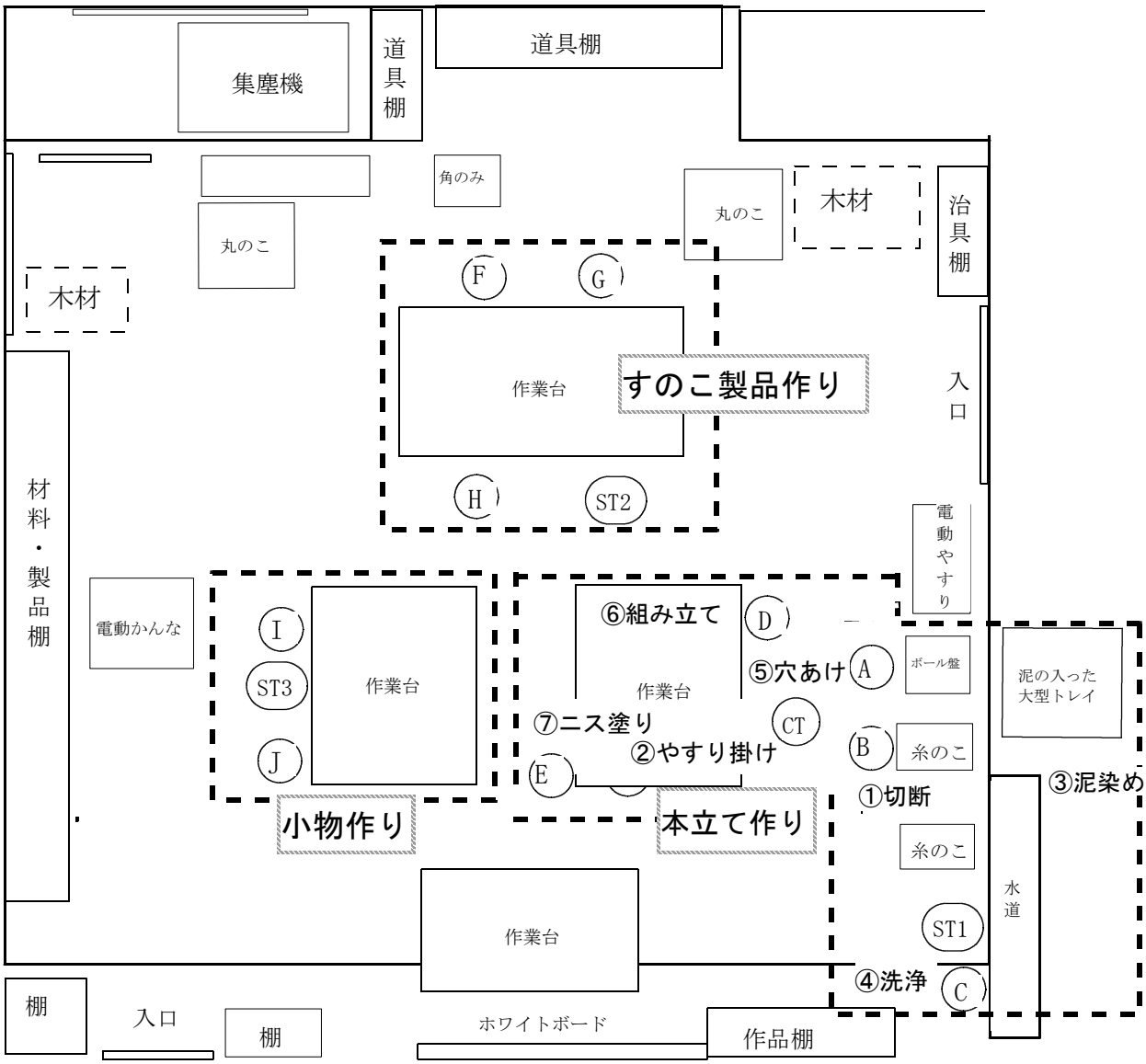
(ｲ)　機械や道具の使い方について，生徒の実態に応じたモデリングや確認を行い，安全に機械や道具を使用できるようにする。

(ｳ)　作業の終わった後は，手洗いとうがいを入念に行うように，班長が呼び掛けるようにする。

(4) 本時の実際　別紙のとおり

(5) 場の設定

木工室内外の配置図



(6) 教材・教具

教材・教具名	穴あけ用枠	組み立ての固定治具	作業日誌
画像			
使用目的	・　枠に木材を入れて，ボール盤の台にセットすることで，木材を固定して必要な個所に穴を開けることができる。	・　組み立てるときに，木材を固定することができ，電動ドライバーを両手で操作できる。	・　毎回の作業の目標や出来高，反省を記入して振り返りができる。

(7) 評価

ア　全体評価

(ｱ)　集中して決められた個数の作業に取り組むことができたか。
（作業態度及び作業習慣の形成）

(ｲ)　作業が終わったときの報告や，分からないことがあるときの相談を適切に行うことができたか。
（作業態度及び作業習慣の形成）

(ｳ)　道具や機械を安全に正しく扱うことができたか。（作業等に必要な知識及び技能の習得）

イ　個人評価

生徒	個人目標	評価	教師の手立て	評価
A （１年，男）	ア　集中して，正確にボール盤で穴をあけることができたか。		ア　作業量を十分に確保し，継続して作業を行えるようにできたか。	
	イ　一ケース分の作業が終わったときには，「終わりました。」と伝えることができたか。		イ　ケースの底に貼り付けた報告の絵カードが，有効だったか。	
	ウ　手元をよく見て，ボール盤を安全に正しく扱うことができたか。		ウ　手順と注意するポイントを示した絵カードは，分かりやすかったか。	
B （２年，男）	ア　集中して，決められた個数の木材を切断することができたか。		ア　これまでの出来高を確認して，目標を設定するようにできたか。	
	イ　切断が終わったときは，言葉遣いに気を付けて，報告することができたか。		イ　言葉遣いを意識するための絵カードの掲示が，有効だったか。	
	ウ　手元をよく見て，糸のこを安全に正しく扱うことができたか。		ウ　糸のこの正しい使い方について，確認することができたか。	
C （２年，女）	ア・ウ　教師の「おしまい。」の言葉掛けを受けて，木材から手を離し，洗う作業を終えることができたか。		ア・ウ　１０を数えた後の教師の「おしまい。」という言葉掛けが有効だったか。	

◎：十分達成できた。　○：ほぼ達成できた。　△：達成できなかった。

別紙　（4）　本時の実際

時間	学習活動	指導上の留意点			キャリア教育の視点
	生徒	A	B	C	
	作業工程	組み立て（穴あけ）	切断（糸のこ）	着染め，洗浄	
	指導者	CT	CT	ST1	
9:45		・ 生徒が入室する前に，木工室の環境や機械の動作・安全確認を行い，使わない機械は白布で覆う。			
	1 日誌に日付と目標を記入する。	・ 記入箇所の上部に文字を書いて視写するようにする。	・ これまでの出来高を確認し，教師と一緒に目標を設定するようにする。	・ 写真カードを見ながら，作業の流れや内容を教師と一緒に確認するようにする。	・ 習慣形成 ・ 目標設定
導入（10分）	2 朝礼をする。 (1) 始まりの挨拶をする。 (2) 木工班の標語を復唱する。 (3) 出席の確認をする。 (4) 健康観察をする。 (5) 教師の話を聞く。 ・ 本時の目標を確認する。 集中して目標の個数を完成させよう。	・ 朝礼は班長を中心に進める。 ・ 班長がスムーズに司会を務められるように，司会進行カードを用意する。 ・ 挨拶・返事・姿勢など，生徒にモデルを提示する。 ・ 木工班の標語を声に出して復唱することで，「安全に気を付ける。」，「報告・連絡・相談をしっかりする。」などの目標を意識できるようにする。 ・ 健康観察では，生徒の自己申告だけでなく，教師が生徒の健康状態を十分に観察し，把握する。 ・ 目標を意識できるように，生徒が目標を復唱するようにする。 ・ 安全に作業を行うことを確認する。			・ 挨拶・礼儀・身だしなみ等に応じた言動 ・ 習慣形成
9:55	・ 作業内容を確認する。				
9:55	3 作業に必要な道具を準備する。	・ 班長の「作業に取り掛かってください。」という指示を聞き，それぞれの作業に必要な道具を準備して作業を開始する。 ・ 道具の安全を確認し，壊れている物があれば取り替える。			・ 習慣形成
展開（50分）	4 作業をする。 ・ け書き ・ 切断（糸のこ） ・ 洗浄 ・ 穴あけ（ボール盤） ・ 組み立て ・ ニス塗り	・ 一人で道具を準備できるように写真入りのカードを準備する。 【ボール盤による穴あけ】 ・ 板を治具の枠にはめ込み，ボール盤で穴をあけるようにする。 ・ 手順と注意するポイントを絵カードで掲示する。 ・ 一ケース分の作業が終わったら，ケースの底に貼った報告の絵カードを見て，教師に「終わりました。」と伝えるようにする。 ・ 正確に穴をあけられたときは，称賛する。	【け書き】 ・ 切り取り線を書くための型を準備し，下書きの線を描けるようにする。 【糸のこによる切断】 ・ 刃が折れたときは，コンセントを抜いてから交換するなどの手順を確認する。 ・ 終わったり，失敗したりしたときは，教師に報告するようにする。 ・ 線に沿ってきれいに切断できたときは，称賛する。	【木材の洗浄】 ・ 教師の「お願いします。」の言葉掛けを受けて，木材を受け取るようにする。 ・ 教師が１０を数え，「おしまい。」の言葉掛けを受けて，木材から手を離し，洗う作業を終わるようにする。 ・ 洗い終わった後は，作業を頑張ったことを称賛する。	・ 習慣形成 ・ 意思表現 ・ 場面参加，協力・共同 ・ 挨拶・礼儀・身だしなみ等に応じた言動 ・ 働く意欲・役割の理解と働くことの意義 ・ やり抜く・生き抜く
10:35	研究授業の終了				
	5 材料や道具の後片付けをする。	・ 当番の「作業を止めて片付けに入ってください。」という指示を受けて，作業を止め，片付ける。			・ 習慣形成
10:50		・ 片付け忘れている道具がある場合は，言葉掛けをするようにする。			
10:50	6 日誌に反省を記入する。	・ 教師と一緒に作業を振り返り，確認した内容を，記入箇所の上部に教師が書き，視写するようにする。	・ 日誌に教師のコメントを書くときは，平仮名を用い，できたことを称賛する。	・ 写真カードを見ながら，教師と一緒に作業を振り返り，できたことを称賛する。	・ 振り返り肯定的自己評価
終末（10分）	7 終礼をする。 (1) 反省を発表する。 (2) 教師の話を聞く ・ 目標の反省をする。 ・ 出来高を確認する。 ・ 次時の作業について知る。	・ 終礼は班長を中心に進める。 ・ 班長がスムーズに司会を務められるように，司会進行カードを用意する。 ・ 挨拶・返事・姿勢など，生徒にモデルを提示する。 ・ 反省や出来高の確認では，達成できたことや頑張ったこと等を大いに称賛する。 ・ 安全に作業を行えたか確認し，けがや体調の悪い生徒がいないか健康観察も行う。 ・ 生徒の退室後，道具が安全に収納され，機械が安全に動作するか確認を行う。			・ 人とのかかわり自己理解・他者理解 ・ 習慣形成 ・ 挨拶・礼儀・身だしなみ等に応じた言動
11:00	(3) 終わりの挨拶をする。				

＜授業研究及び研究協議記録＞

1　授業研究

⑴　授業反省

○　地域素材について

補足資料をもとに説明。スダジイ（イタジイ）を活用。大島紬の泥染めも取り入れる。奄美ならではの工法として授業に取り入れた。

○　主体的に行動することについて

興味・関心がもてる作業，見通しをもたせること，集中できることをねらいとした。９月に販売活動を行い，市場調査を経て，作業学習の時間に作る製品も決めてきた。

○　課題提起

重度重複の生徒について課題を感じている。他校の取組について教えてほしい。

⑵　グループ討議・発表

良かった点として，生徒への支援カード，出来上がり製品があったこと，黙々と作業に取り組む姿が挙げられた。気になった点について，作業が止まっている生徒への支援，作業の終わりが見えるような環境整備があったほうがよい，安全面への配慮，生徒の主体性を引き出す工夫があればよいといった意見が出された。

⑶　研究協議

協議の柱：『重度重複障害者の作業学習』『自立活動との関連（動作，コミュニケーション）』

腕や手先などを使って操作できる機械・モーターを使い，職員が支援しながら生徒が好きな作業ができるように支援しているといった実践や，重度重複生徒だけの学習集団を編成し，作業を行っており，作業スピードを集団の実態に応じて行えるメリットがあるといった方法も挙げられた。一方で，他の生徒とのコミュニケーションについては，デメリットがあると感じているとのこと。

コミュニケーションに関しては，困った状況になったときに，どう行動するかということに課題があったことを挙げ，対教師から子供同士へやり取りが増えるようにしていきたいとまとめた。

⑷　指導助言

指導案の内容が伝わりやすかった。目標や実態の書き方が「～できる。」と肯定的な表現であることもよいと思った。作業学習において，地域性を取り入れていることが，子供にも作業の価値が伝わりやすい作業学習になっていると感じた。領域・教科を合わせた指導である作業学習は，できる活動をメインにして，成功体験をすることから始まる。できないことも指導するが，「できる」「できない」「できそう」の３つがあり，「できそう」は，「教師の支援があればできる」である。「できそう」に取り組んで「できる」ことにより生徒ができる体験を積み重ねることができる。細かな物の受け渡しにおいても，生徒の動きを待つことで，コミュニケーション活動にもつながるので，主体性の引き出し方の工夫ができる。休憩の場面においても，教師が言葉掛けをする以外にも，椅子に座ったら休みたいサインなどの動きを作っていってもよい。

２　研究協議

協議の柱：『主体的に判断・行動するための作業学習の在り方』

⑴　グループ討議・発表

高等部での取組だけでなく，中学部や他校の作業学習グループでの取組事例などが発表された。主体的な行動を引き出すためには，環境整備を教師が行うことの重要性について，意見が出された。タイムスケジュールや授業の内容，道具を片付ける場所を決めておくことで主体的な活動を引き出すことができるのではないか。また，ペアの組ませ方によっても生徒同士でできることが増えるという意見が出された。また，子供が見通しをもって作業に取り組むことができれば，教師の支援が減り，より子供の主体的な活動が引き出されるのではないかという意見も出された。困ったときに相談できるような環境づくりや，グループの中にリーダーを置くことも大切であり，育成することも必要であるという意見が出された。

⑵　全体協議

協議の柱：『「作業」自体の環境』『人への働きかけ』

グループ討議や発表で出された意見からということ『「作業」自体の環境』『人への働きかけ』について全体協議を行った。高等特別支援学校の東高校生との共同学習の中で自分たちが行っている作業学習においては教えられることもある。その経験を通して自身がついてきた様子が分かる。自身の経験から部活動においては主体的に活動できていたことを例に挙げ，特別支援学校の学習活動においても，そのような環境を整えることができないかという意見も出された。

⑶　指導助言

１歳の子供が「おんぶして」と言ったらする。２・３歳もする。求められたときにおんぶしてあげた子は，やがて歩き始める。おんぶしてもらえなかった子はかえっておんぶを求め続ける。主体性は関係性の中で出てくるものと思う。エリクソンによると，基本的信頼感は人間が生きていく上でのベースになる。子供が望むように大人が愛してあげることが信頼感につながる。大人が子供の気持ちを察することである。信頼感をもって社会に出ることで，自立と社会参加につながる。

教師は子供の手本になる。見守る，一緒に働くなどあるが，どういう姿を見せるかも大事である。焼印の場面では，生徒だけではなく，教師も手袋をすることで，安全性を伝えることができるように思う。

高等部の実践における成果と課題

１　成果

・　テーマ研究の時間を使って，別冊資料集の活用をはかることができた。特に，チェックリスト，年間指導計画，キャリア教育の資料について２回の検証を通して活用することができた。

２　課題

・　チェックリストの実態よりも高い生徒に対して使いにくさがあったり，アセスメントの発達段階も使いにくさがあったりした。

・　作業学習という限られた領域・教科の時間においてしか活用する機会がなかったため，活用方法が限定的であった。

Ⅴ　研究のまとめ

「アカショウビン」

Ⅴ　研究のまとめ

１　３年間の研究のまとめ

本研究は，一人一人の自立と社会参加をめざす一貫性・継続性のある指導の在り方について，様々なアプローチで研究を進めてきた。１年次（平成 26 年度）の研究では，アセスメントを利用した指導の在り方について，方法を学び，それを教師全員で共有することができた。そうした一つの方法で行った授業づくりを通して，私たちは一貫性のある指導を行うことができ，児童生徒の自立と社会参加へつなげられるような研究をすることができた。しかし，１年次の研究で明らかになった課題を解決しながら，より研究テーマの達成に近づくために，２年次は四つのプロジェクトチームを立ち上げて研究を行うことになった。私たちは１年次の初めに計画してきた３年間の研究計画について，大きな方向転換が必要であることを感じ，計画の変更を行ったのである。

２年次は四つのプロジェクトチームを作り，研究に取り組んだ。チェックリストチームはより客観性のある児童生徒の実態把握ができるように，これまで本校で用いられていたチェックリストの項目を見直し，削除したり新規項目を付け加えたりし，更にチェック項目の根拠を示す形で改訂版を作成した。年間指導計画チームでは，１年次の授業づくりで出された課題について教育課程の在り方について疑問を呈し，単元指導計画を改善することで，より一貫性・継続性のある指導ができるのではないかと考えて，立ち上げられた。数ある領域・教科の中で，特別支援学校ならではの生活単元学習と作業学習において単元一覧表を作成して，継続性のある指導につなげようと考え，また，単元の目標を各学部統一した要点のみを記載し，そこから生徒の実態に応じて目標を考えられるようにした。キャリア教育チームは１年次の研究を進める中で，やはりもっと私たちの指導の中にキャリア教育の視点を取り入れるよう，また指導する教師がその意識を高くもつことこそが，一人一人の自立と社会参加につながると考え，立ち上がったチームである。２年次に取り組んだ研究内容として，キャリア教育における各学部のキャッチフレーズを作ることで教師の意識を高めることや，キャリア教育の全体指導計画にある指導内容一覧を領域・教科ごとに整理することで，一つ一つの学習内容とキャリア教育の視点が分かるような一覧表ができ，指導のポイントとして共有できるのではないかということになった。アセスメントチームは１年次の取組を更に深めるためのチームとして，継続した研究を進めるとともに，もっとアセスメントを授業づくりや児童生徒の課題分析に生かすためにはどのような方法がよいだろうかということについて研究を進めた。その結果，発達の段階を四つの領域に分けて文献を基にまとめることで，発達段階表を作成し，結果を総合的に捉えることで児童生徒のより明確な実態が分かるようにした。

このように，四つのプロジェクトチームで取り組む研究の成果としてまとめられたものが，「別冊資料集」である。このように成果をまとめることができた一方で，課題も挙げられた。それは，分担して並行した研究を進めることで様々な視点から研究を行うことができたが，一つ一つのプロジェクト研究の内容が大きすぎて，全体で共有をすることが難しいという点であった。全体の場においても研究の成果を報告する場を２回設けて共有化を図ったが，それだけでは，全教師で共有をすることは難しかったという意見が多かった。また，研究内容が大きすぎて，一部の教師の意見や考えで指導計画等を変更してもよいのかという判断に迷う部分があったことやそれぞれの関連があまり図られていないことから３年目の研究への不安が記述された意見もあった。

そこで，３年目の研究として取り組むべき内容としては，２年次の研究の成果としてまとめられた「別冊資料集」を全員で活用することを通して，本校教師全員で研究成果を共有しようと考えた。また，２年次の研究では実践というところまで進めることができなかったため，授業実践をしなが

ら，研究成果の検証を行うことにし，一年間研究を行った。その成果と課題については以下のとおりである。また，研究のまとめとして，教師向けに行ったアンケート結果の数値についても記載しておく。【　】内の数値はテーマ研究における各プロジェクトチームの成果を活用したかどうかについてのものである。１～４までの４段階評価によるもので，１から順に「全く活用していない」，「ほとんど活用していない」，「まあまあ活用した」，「かなり活用した」としてある。数値が高くなればなるほど活用度が高いことを示す。

⑴　チェックリスト　【2.84】
○　改訂版のチェックリストを活用して，児童生徒の実態把握を行った。
○　指導前における児童生徒の到達度を把握することができた。
○　目標を設定する際に役に立った。
△　実態にあったチェックリストではなかった。(特に肢体不自由児，実態の高い児童生徒)
△　情報量が多い，見やすさに欠ける。
△　発達段階表との違いが分かりにくい。

⑵　年間指導計画　　【3.14】
○　個人目標を立てるときの参考にした。
○　小中高の一覧表を見て，つながりが分かった。
○　行事生単は目標が立てやすかった。
△　小中高で同じ目標であるため，学部でのねらいが分かりづらい。
△　目標設定に幅がありすぎて，目指すべきところがぶれる。
△　単元一覧表と作業班毎の指導計画がリンクしていない。

⑶　キャリア教育　　【2.63】
○　学習活動との関連を見付けられた。
○　キャリア教育の視点を意識した指導ができた。
△　指導の視点が後付けになったと感じる。
△　常に教師は意識するべき内容である。
△　一つ視点を決めて授業を行うとよい。

⑷　アセスメント　　【2.86】
○　個人内のバランスが分かり，実態把握に役立つ。
○　個人目標や学習活動の変更の手掛かりになった。
○　☆歳□カ月と客観的な課題分析ができた。
○　コミュニケーション面で活用しやすかった。
△　使い方が分からない。
△　授業づくりのレベルでは使えない。
△　どこを見てよいのか，分かりにくい。
△　実態の高い児童生徒には使えない。

このような結果から，研究を進める中での「別冊資料集」の活用度について，活用した教師が多かったことが数値から分かる。一方，別のアンケート項目で，ふだんの授業においてどれくらい「別冊資料集」を活用しているか質問したところ，その数値は【1.96】であった。

２　今後に向けて

本章の冒頭でも述べたように，私たちは，一人一人の自立と社会参加をめざす一貫性・継続性のある指導の在り方について，様々なアプローチで研究を進めてきた。２年次のまとめとして作られた「別冊資料集」の検証を行った３年目を終えた段階では，得られた成果と課題を基に，改善点や今後の活用に対する提案を行った。今後は，関連する校務分掌において，それぞれのプロジェクトチームの成果と課題を引き継ぎ，そこから活用方法や今後の在り方を全体へ提案していくようにしたい。

今年度は，「かごしま学力向上プログラム」における授業公開と同時並行で本研究を進めた。この研究の主たる目的である一人一人の自立と社会参加をめざす指導について，各学部で考え，作り上げた授業を公開し，多くの意見をいただくことができた。また，各学部におけるめざす児童生徒像へつながる指導の在り方について協議し，考えを深めることができた。

このような研究を通して手に入れた授業づくりのスキルを身に付け，チームで取り組む特別支援学校ならではの同僚性の再確認をすることができた。このことをまた財産として，日々の授業を大切にしたいという一人一人の思いを研究という形で深め，児童生徒の変容を促すような指導を行い続けていきたい。

参考・引用文献

- 文部科学省　特別支援学校学習指導要領解説　総則等編(幼稚部・小学部・中学部)
- 文部科学省　特別支援学校学習指導要領解説　総則等編(高等部)
- 文部科学省　HP「今後の中央教育審議会の審議イメージ」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/
- 文部科学省　初等中等教育局（平成 19 年４月１日）
  「特別支援教育の推進について（通知)」
- 中央教育審議会　初等中等教育分科会（平成 24 年７月 23 日）
  「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」
- 独立行政法人　国立特別支援教育総合研究所 HP「アセスメントとは」https://www.nise.go.jp/portal/elearn/asesument.html
- 独立行政法人　国立特別支援教育総合研究所
  特別支援教育の基礎・基本　新訂版　共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築
- 鹿児島県総合教育センター　平成 25 年度研究紀要
  「特別支援学校における一貫性･系統性のある指導の在り方に関する研究　−知的障害のある児童生徒の pdca サイクルに基づいた授業づくりを目指して−」
- 鹿児島県総合教育センター　指導資料
  「知的障害のある児童生徒に対する発達の視点を踏まえたアセスメントの在り方」（平成 25 年４月発行）
  「校内研修の充実をめざして」（平成 22 年 10 月発行）

お　わ　り　に

Ａさんは，給食時間，ごはん以外の食材がなかなか食べられませんでしたが，友達の様子を見たり，少量でも口にできたことをいつも褒めてくれる担任の励ましがあったりすることで，少しずつ食べられるものが増えてきました。

Ｂさんは，学級や学部など集団の中にスムーズに入ることがなかなかできず，緊張感の強い状態が続いていましたが，周囲の教師と自分の参加できる方法を一緒に考え，その中での安心感や達成感を少しずつ得ることで，自分の居場所を見付けることができつつあります。

Ｃさんは，みんなの前で発表することが苦手でしたが，発表のポイントを教師が整理して示すこと，発表をじっくりと待つこと，発表できたことを丁寧に認めていくことを繰り返し，短い文章ではありますが，自分なりに思いを発表できる場面が増えてきました。

このような変容は，日々の授業の中での継続した積み重ねがあったからこそ導き出せたもので，私たち教師の次への改善の原動力となるものです。本校の３年間の研究は，こうした変容を導き出すために，児童生徒一人一人の教育的ニーズに最も応えるべき指導内容・指導方法を導き出し，それを指導者間で共有し，評価・改善を繰り返していこうとした取組でした。

研究１年目は，教師全員で対象児童生徒の重点目標設定の手続きを確認し，実際の授業に結び付ける方法等を共有しました。２年目は，実態把握，小・中・高等部とつながる授業の位置付け，キャリア教育の視点からの有効性などを，より確かなものとするために，学部の枠を超えて，授業づくりの柱となるチェックリスト，年間指導計画，キャリア教育，アセスメントの四つのプロジェクトチームに分かれて，研究を行いました。３年目は，これまでの研究成果を，学部ごとの実践の場で検証しました。研究内容が広がり過ぎたのではないかとの反省もありますが，いずれも複数の教師で理論研究や授業づくりに取り組み，同僚性を高めながら，それぞれの専門性向上につながる研究を進めてきました。

３年間という研究期間を終えて，確かに部分的に子供たちの変容を確認でき，教師一人一人の授業づくりへの意識改革につながったと言えます。しかし，まだまだ多くの課題があることも事実です。ふだんの授業の中で，一人一人の教育的ニーズに応える最適な学習課題や手立て等が準備され，目標達成に向けて日々の改善が図られているか，子供の思いや願いに寄り添い，内面からの変化を大切にした指導・支援が行えているかなど，更に検証し，教師の専門性の向上をめざした取組を進める必要があると考えます。

どうぞ，本紀要をご覧いただき，多くの方々から忌憚のない御批判，御教示等を賜りますようお願い申し上げます。

最後に，研究を共に推進・実践してきた研究同人の努力に感謝するとともに，研究授業等で多くの御助言等をいただいた各先生方に心からお礼申し上げます。

平成２９年３月

教頭　上國料里美

研　究　同　人

【校長】中村　周一郎　【教頭】上國料　里美　【事務長】仮屋　孝子

小学部
飛永　雄一郎
石原　優子
竹﨑　浩記
中水　教仁
野口　憲代
山下　晃生
冨岡　夏帆
藤尾　友香
白土　暢之
田浦　清美
美座　あかり
今村　三枝子
中俣　秀樹
平　千登勢
尾前　誠一
東　明美
松元　真紀

養護教諭
塗木　ひろみ
南　美穂乃

栄養教諭
飛松　佳子

看護師
碇山　由美乃
與　ひより

中学部
駒走　俊彦
川村　雄一郎
二禮木　智香
髙野　博一
山名　友香
若松　千代
朝野　優稀
岩本　真由美
板敷　大和
馬場　真理
萩原　誠
小倉　寿彦
前潟　久美子
東　和史
宇都　恵子

事務部
柳　正和
小山田　誠
龍田　孝一郎
津川　興弘
川畑　真希

訪問教育非常勤講師
芳村　美聡
春口　勝代
春山　梅乃

高等部
北原　貴志
有満　勝利
菊田　裕菜
長崎　玲子
小野　恭一
朝廣　洋一
坂元　輝夫
島田　理香
大重　耕平
国分　佳子
真辺　拓郎
永井　望実
日髙　貴子
永正　彰人
栗山　祐平
平　麻衣子
岩元　美紀
柏　哲也
下野　千春
東　和也
上園　菜穂子
濵田　千代美
春口　陵二
里　康一郎
原口　麗胤

H26・27年度転出

中村　良一	上原　峻	梶原　成人
中村　かおり	栄　華子	宝　政樹
大瀧　梨香	墓本　武志	最上　淑子
實島　あやの	緒方　晶	前田原　みゆき
板坂　佑美子	平　世理奈	前原　修一
寺下　悟憲	山田　知穂	榮　香菜子
原　正紀	藤山　美由紀	久保上　香菜子
嘉村　徳佳	宮崎　究	渕上　新一郎
永野　由ミ子	前山　香	柏木　翔
団塚　ル聖	古村　優介	徳重　二
吉岡　沙織	小牧　洋志	米里　浩
内山　志保	宮前　真穀	榊　みなみ
中村　渚紗	ノ尾　智和	和田　慶太郎
島元　福	元田　明宏	中